

那珂 23

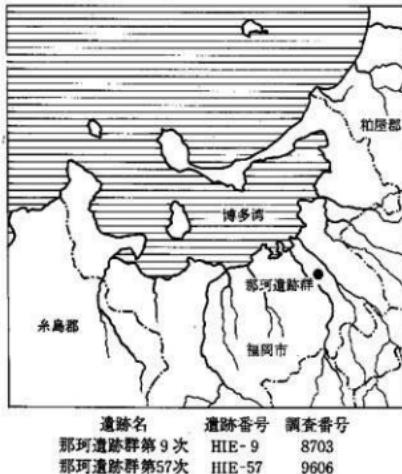
— 那珂遺跡群第9・57次調査報告 —

1999

福岡市教育委員会

那 珂 23

— 那珂遺跡群第9・57次調査報告 —



1999

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には多くの文化財が分布しています。本市では、文化財の保護、活用に努めてきてはいますが、都市基盤整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、博多区竹下五丁目地内に所在する那珂遺跡群内で、共同住宅と専用住宅建設に先だって発掘調査を実施しました那珂遺跡群第9・57次調査の報告書です。

両調査では、弥生時代から室町時代にかけての集落の遺構が検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。

発掘調査実施にあたり、費用負担などのご協力をくださいました川辺弘明氏、山根清人氏をはじめとする関係各位に感謝の意を表します。

また、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　言

1. 本書は、下記の開発に伴う事前調査として福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、補助事業で発掘調査を実施した那珂遺跡群の発掘調査報告書である。

調査次数	所 在 地	開 発 者	調 査 原 因	調 査 期 間
第9次	博多区竹下5丁目463	川辺 弘明	共同住宅建設	昭和62年4月25日～同年7月4日
第57次	博多区竹下5丁目19-32	山根 清人	専用住宅建設	平成8年6月24日～同年7月2日

2. 本書使用の遺構実測図は、第9次調査については山口謙治・城戸康利・上方高弘ほかが、第57次調査については米倉秀紀・宮井善朗ほかが作成した。
3. 本書使用の遺物実測図は、第9次調査については山口謙治・平川敬治・井上加代子が、第57次調査については米倉秀紀が作成した。
4. 本書使用の写真是、遺構を山口謙治・上方高弘・米倉秀紀・宮井善朗が撮影した。
5. 本書使用の図面の製図は、米倉秀紀・山口朱美が行った。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆は、第9次調査については山口謙治が、第57次調査については米倉秀紀が行い、編集は米倉の協力を得て山口が行った。
8. 本書収録の出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第1章 序説

1. はじめに.....	1
2. 調査の体制.....	1

第2章 遺跡の位置と環境

1. 本書報告遺跡の位置.....	2
2. 本報告周辺調査地の概要.....	2

第3章 第9次調査の記録

1. 調査概要.....	5
2. 壑穴住居跡と出土遺物.....	7
3. 据立柱建物.....	14
4. 井戸と出土遺物.....	20
5. 方形周溝墓と出土遺物.....	23
6. その他の遺構と出土遺物.....	33
7. まとめ.....	49

第4章 第57次調査の記録

1. 調査の経緯・経過と調査組織.....	51
2. 調査区の位置.....	52
3. 遺構と遺物.....	52
4. まとめ.....	56

挿図目次

Fig. 1 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡

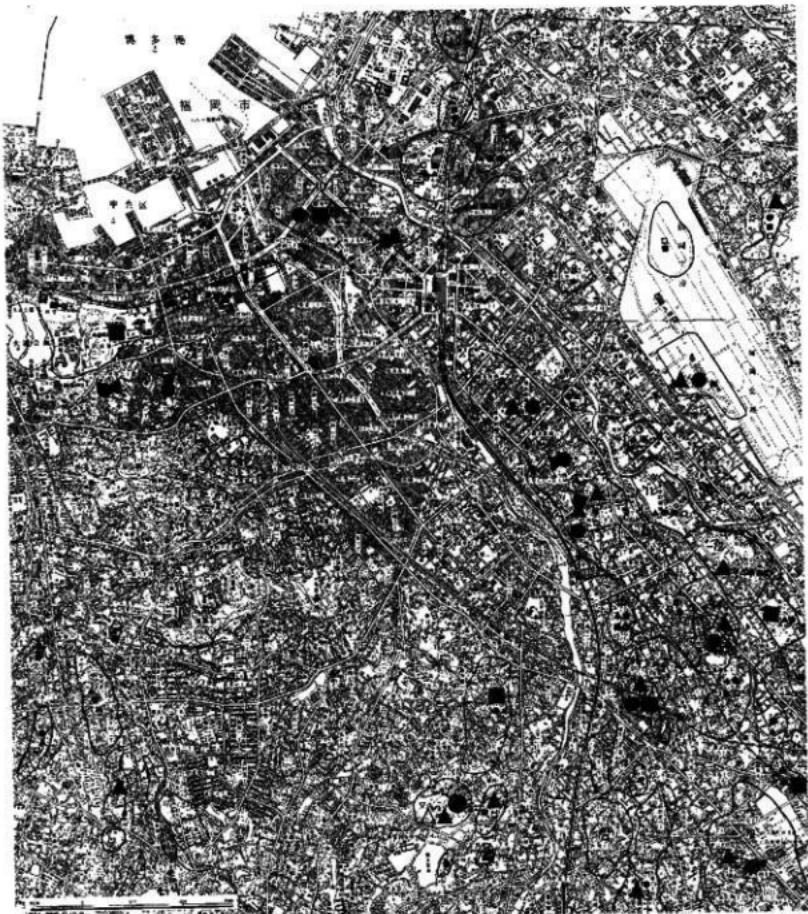
Fig. 2 那珂遺跡群調査地点位置図.....	3
Fig. 3 第9次調査遺構配置実測図.....	6
Fig. 4 第6号壘穴住居跡(SC-06) 実測図.....	7
Fig. 5 第6号壘穴住居跡出土土器実測図.....	8
Fig. 6 紹画土器実測図.....	8
Fig. 7 第16号壘穴住居跡(SC-16) 実測図.....	9
Fig. 8 第16号壘穴住居跡出土土器実測図(1)	10

Fig. 9	第16号竪穴住居跡出土土器実測図（2）	11
Fig.10	第16号竪穴住居跡出土遺物実測図	12
Fig.11	第17号竪穴住居跡（SC-17）実測図	12
Fig.12	第18号竪穴住居跡出土土器実測図	13
Fig.13	第22号竪穴住居跡出土土器実測図	13
Fig.14	第20・26号掘立柱建物（SB-20・26）実測図	15
Fig.15	第25・27・28号掘立柱建物（SB-25・27・28）実測図	16
Fig.16	第29・30号掘立柱建物（SB-29・30）実測図	17
Fig.17	第31～33号掘立柱建物（SB-31～33）実測図	18
Fig.18	第34・35号掘立柱建物（SB-34・35）実測図	19
Fig.19	第5・19号井戸（SE-05・19）実測図	20
Fig.20	第5号井戸出土土器実測図	21
Fig.21	第19号井戸出土土器実測図	22
Fig.22	方形周溝墓分布状況	23
Fig.23	第1号方形周溝墓（SX-01）実測図	24
Fig.24	第1号方形周溝墓（SX-01）土層断面実測図	24
Fig.25	第1号方形周溝墓下層出土遺物実測図	25
Fig.26	第4号方形周溝墓（SX-04）実測図	27
Fig.27	第4号方形周溝墓（SX-04）土層断面実測図	28
Fig.28	第4号方形周溝墓下層出土土器実測図（1）	29
Fig.29	第4号方形周溝墓下層出土土器実測図（2）	30
Fig.30	第13号方形周溝墓（SX-13）実測図	30
Fig.31	第13号方形周溝墓（SX-13）土層断面実測図	31
Fig.32	第13号方形周溝墓出土鉄器実測図	31
Fig.33	第13号方形周溝墓下層出土土器実測図	32
Fig.34	第7・10号土壤（SK-7・10）実測図	33
Fig.35	第7～9・11号土壤および第231号柱穴出土土器実測図	34
Fig.36	第2・3号溝（SD-02・03）土層断面実測図	35
Fig.37	第259号柱穴出土須恵器実測図	36
Fig.38	遺構検出時出土遺物実測図	37
Fig.39	第4号方形周溝墓上層出土土器実測図（1）	38
Fig.40	第4号方形周溝墓上層出土土器実測図（2）	39
Fig.41	第4号方形周溝墓上層出土土器実測図（3）	40
Fig.42	第13号方形周溝墓上層出土土器実測図	42
Fig.43	第4号方形周溝墓出土弥生土器実測図（1）	44
Fig.44	第4号方形周溝墓出土弥生土器実測図（2）	45
Fig.45	第4号方形周溝墓出土弥生土器実測図（3）	46
Fig.46	出土石器実測図（1）	47
Fig.47	出土石器実測図（2）	48
Fig.48	第9次調査地および周辺調査地	49

Fig.49 第57次調査区位置図	51
Fig.50 第57次調査遺構配置実測図	52
Fig.51 SC-008	53
Fig.52 SC-001・002・005	54
Fig.53 出土遺物	55

図 版 目 次

PL. 1	1) 第9次調査地近景（北西から） 3) 調査区全景（西から） 5) 南側調査区全景（西から）	2) 北側調査区全景（西から） 4) 那珂八幡古墳遠景（本調査地から） 6) 南側調査区全景（東から）
PL. 2	1) 第6号竪穴住居跡完掘状況 3) 第14号竪穴住居跡出土遺物 5) 第22号竪穴住居跡出土土器	2) 第6号竪穴住居跡出土遺物 4) 第22号竪穴住居跡完掘状況
PL. 3	1) 第16号竪穴住居跡完掘状況	2) 第16号竪穴住居跡出土遺物
PL. 4	1) 第17号竪穴住居跡検出状況 3) 第18号竪穴住居跡出土遺物	2) 第18号竪穴住居跡検出状況 4) 第259号柱穴出土須恵器
PL. 5	第1号方形周溝墓下層出土遺物	
PL. 6	第4号方形周溝墓下層出土土器	
PL. 7	1) 第4号方形周溝墓埋土堆積状況（a-a'） 2) 第4号方形周溝墓埋土堆積状況（b-b'） 3) 第13号方形周溝墓土層堆積状況（西から）	4) 第13号方形周溝墓出土遺物
PL. 8	1) 第5号井戸検出状況 3) 第5号井戸出土遺物	2) 第5号井戸遺物出土状況
PL. 9	1) 第19号井戸遺物出土状況	2) 第19号井戸出土遺物
PL. 10	各遺構出土遺物	
PL. 11	遺構検出時出土遺物	
PL. 12	第4号方形周溝墓上層出土遺物	
PL. 13	第13号方形周溝墓上層出土遺物	
PL. 14	第4号方形周溝墓出土弥生土器（1）	
PL. 15	第4号方形周溝墓出土弥生土器（2）	
PL. 16	第9次調査出土石器	
PL. 17	1) 第57次調査区全景（西から） 4) SC-005（南から）	2) SC-001（南から） 5) SC-005石製紡錘車出土状況
PL. 18	1) SC-003（南から）	2) SC-004・006（東から） 3) 出土遺物



- | | | | |
|-----------|-------------|-------------|--------|
| 1. 那珂遺跡群 | 2. 北原遺跡群 | 3. 東原河原遺跡群 | ▽先土器時代 |
| 4. 萩原遺跡 | 5. 庄田青木遺跡 | 6. 竹比野・丁目遺跡 | ▲弥生時代 |
| 7. 姿勢遺跡 | 8. 古坂御所遺跡 | 9. 始輪遺跡 | ●古墳時代 |
| 10. 博多遺跡群 | 11. 郡内召外遺跡 | 12. 収付遺跡 | ■古代 |
| 13. 高須遺跡 | 14. 遠賀口岱遺跡群 | 15. 井尻B遺跡群 | □中世 |
| 16. 五十川遺跡 | 17. 和田3遺跡群 | 18. 須恵遺跡群 | |

Fig. 1 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡

第1章 序 説

1. はじめに

博多区竹下五丁目地内に、地権者である川辺弘明氏による共同住宅建設が、山根清人氏による専用住宅の建設がそれぞれ計画され、昭和61年3月3日に川辺弘明氏より、平成8年4月10日には山根清人氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課(以下、埋文課とする)に、埋蔵文化財事前審査願書が提出された。この申請地は那珂遺跡群に所在しているため、埋文課は遺構の遺存状態を把握するための試掘調査を実施することを決定し、それぞれ昭和61年4月25日と平成8年6月12日に試掘調査を実施した。

前者の試掘調査の結果、現地表下15~55cmの申請地全域にわたって弥生時代・古墳時代および中世の溝や柱穴などの遺構が分布していることが確認でき、屋敷や館の存在が予想された。申請地は周知の遺跡であるところの那珂遺跡群に含まれており、試掘調査の結果、同遺跡群のなかでも旧地形が残っており、遺構の遺存状態が良好であることなどから、埋文課は共同住宅建設の計画変更による保存が必要であると決定した。

後者の試掘調査では、現地表下50~70cmで弥生時代および古代の竪穴住居跡や溝・柱穴などの遺構が検出され、西側にわずかに傾斜するものの、申請地全域に遺構が遺存すると予想された。この試掘調査結果を受け、埋文課は盛土など住宅建築計画の変更による保存が必要であると決定した。

以上の決定を受け、両者とも申請者と埋文課は協議を重ねたが、現状での保存は困難であり、前者は申請地全域、後者は建物建設地について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。前者は川辺氏個人による事業であるが、共同住宅建設であるため申請者との調査費、調査期間、出土遺物の取り扱いなど契約事項が整い、調査契約が成立し、調査現場事務所などの附帯条件が整ったあと、本調査を実施した。後者については、第4章参照。

調査名	第9次調査(調査実施面積 1,030m ²)			第57次調査(調査実施面積 120m ²)		
	調査地地籍	分布地図番号	測量番号	調査地地籍	分布地図番号	測量番号
調査地地籍	博多区竹下5丁目463	分布地図番号	38-0085	調査地地籍	博多区竹下5丁目19-32	分布地図番号
遺跡調査番号	8703	遺跡略号	NAK-9	遺跡調査番号	9606	遺跡略号
調査期間	1987年4月25日~同年7月4日			1996年6月24日~同年7月2日		

2. 調査の体制

調査体制としては、以下に示す体制を構成した。緊急調査であるため充分なる体制は組むことができなかつたが、山根清人氏(第57次調査)や発掘調査委託者である川辺弘明氏(第9次調査)をはじめとする関係者各位の協力のもとに、本調査・整理・報告からなる発掘調査は順調に進行いたしました。関係各位に謝意を表します。

調査主体 福岡市教育委員会文化財部(文化部) 埋蔵文化財課

教育長 佐藤善郎(前) 町田英俊

文化財部長 川崎賢治(前文化部長) 後藤直(前) 平塚克則

埋蔵文化財課長 柳田純平 荒巻輝勝(前)

文化財整備課長 上村忠明

調査第1係長 横山邦繼(前第1係長) 二宮忠司

調査第2係長 飛高憲雄(前第2係長) 山口讓治

	文化財整備課管理係長 陶山能成
調査担当	山口譲治(第9次調査) 米倉秀紀・宮井善朗(第57次調査)
試掘調査担当	山崎純男(前文化財主事)・杉山富雄・小林義彦(第9次調査) 松村道博(前主任文化財主事)・池田祐司(第9次調査)
事務担当	松延好文(前) 西田結香(前) 谷口真由美(文化財整備課管理係)
調査協力者	城戸康利(現太宰府市教育委員会)・上方高弘・石田晴美・尾崎君枝・甲斐田嘉子・坂井昭美・藤野洋子・松本幸子・山崎美枝子(第9次調査) 姜元杓(現高麗大学研究員)
整理協力者	犬丸陽子・井上加代子・平川敬治・山口朱美・植木香織・内川美樹・門田直恵

第2章 遺跡の位置と環境

1. 本書報告遺跡の位置(Fig.1・2, PL.1)

福岡平野のほぼ中央部には、北流し博多湾に注ぐ那珂川・御笠川があり、両河川間の中流域から下流域にかけては、春日丘陵から延びる中位あるいは低位の段丘が形成されている。この中位・低位段丘は著しく開析され、南東から北西方向に断続的に延び除々に低くなる高まりがある。これらの段丘上には南から須玖遺跡群・井尻B遺跡群・五十川遺跡群・諸岡遺跡群や雜餉隈遺跡群・南八幡遺跡群・麦野遺跡群・高畠遺跡・井相田遺跡群・板付遺跡などが、北端に比恵遺跡群が所在しており、その北には砂丘が発達し、砂丘上には博多遺跡群が所在している。いずれも弥生時代から古代・中世にかけての大遺跡で、弥生時代以降、福岡平野の中で中心的役割を担ってきた地域であるといえよう。現在、この地域は福岡市・春日市・大野城市と三市にまたがっているが、都市基盤整備が整い、JR鹿児島本線・西鉄大牟田線・国道・県道など主要道路が縦横に走り、宅地化が進み博多市街地と一体化しており、標高13mから5m前後までの緩やかな傾斜はもつものの、ほぼ平坦な地形となっている。

那珂遺跡群は、北端部の那珂・比恵丘陵といっている標高10mから6mの中位段丘上に所在し、比恵遺跡群の南に隣接している。

本書収録の調査地は、那珂遺跡群のなかでは南部に位置し、第9次調査地は第41・46次調査地に挟まれた標高10m前後を測る丘陵尾根上にあたり、第57次調査地は前者の西160mの標高8m前後を測る丘陵西斜面にあたる。第9次調査地は国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から22.7cm、東から11.4cmにあたり、第57次調査地は北から22.8cm、東から11.6cmにあたる。

2. 本報告周辺調査地の概要(Fig.2)

那珂遺跡群は、1997年12月まで67ヶ所の調査が実施され、各時代・各時期の様相がわかりつつある。また、那珂遺跡群は、これまでの調査成果から先上器時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認されているとともに、各時代・時期ごとに集落・墓域などが復元できる状況になりつつある。ここでは、第9次調査・第57次調査を中心とした周辺調査地の概要をみていくことにする。第9・57次調査の周辺地の調査としては、第22・26・33・41・46・55次調査などがある(Fig. 2参照)。

第22・55次調査は第9次調査地の南西60m前後、第57次調査地の南東60m前後にあたる。第22次調査では、古墳時代後期から中世の溝・土壙や柱穴が検出され、瓦類を含む古墳時代の6世紀後半から7世紀の一括遺物が注目される(荒牧宏之『那珂遺跡3』1991)。第55次調査では、古墳時代後期から中世の掘立柱建物・土壙・井戸・溝・柱穴などが検出され、特に第22次調査地から延びてきている古

墳時代後期の溝は、東西に走っており、丘陵の南端に位置することなどから集落の南端を区画する溝と考えられ、那珂遺跡群の古墳時代後期から古代にかけての様相復元にあたって貴重な成果を得たといえよう(加藤隆也『那珂17』1997)。

第26・33次調査は第9次調査地の北60m前後、第57次調査地の北東200m前後にあたる。第26次調査では、弥生時代中期末から後期中頃の竪穴住居跡・井戸・土塙からなる集落、6世紀後半から8世



Fig. 2 那珂遺跡群調査地点位置図

紀にかけての堅穴住居跡・掘立柱建物・溝からなる集落を検出したほか、15世紀以降の大溝も検出されている（荒牧宏之「那珂遺跡群第26次」『中南部4』1995）。第33次調査でも、第22次調査と同様の遺構が検出されており、那珂遺跡群の南部の尾根上には、弥生時代中期末から後期中頃・6世紀後半から8世紀と室町時代後半期の集落が営まれていることが確認された（荒牧宏之「那珂9」1994）。

第41次調査は、道路を挟んで第9次調査地の東隣接地の丘陵尾根上にあたり、標高9.4～9.6mの鳥栖ローム上面で弥生時代から中世にかけての遺構群を検出した。第41次調査成果としては、まず先土器時代のナイフ形石器文化期の包含層検出があげられる。これまで第9次調査をはじめ各調査地でナイフ形石器・台形石器や先土器時代のものと考えられる剝片が遺構検出時や後世の遺構から出土しており、先土器時代の遺跡としては認知されていたが、ローム層中からナイフ形石器・彫器・剝片などが良好な状態で出土したことは、福岡平野での先土器時代の様相を考えるうえで貴重な成果であるといえる。次に堅穴住居跡・掘立柱建物・井戸・土壤・溝などからなる弥生時代中期末から後期にかけての集落の検出がある。特に調査区中央部で検出された南北方向の溝は、後期初頭前後の環溝の陸橋部で東側の空間を区画していたと考えられる。第20・23次調査地検出の溝もほぼ同時期の環溝と考えられ、当時の那珂の集落構造を考えるうえで貴重な成果を得たといえる。次に古墳時代初頭の方形周溝墓の検出をあげることができる。第9次でも主体部は検出できなかったが、第62・63次調査成果と合わせてみていくと方形周溝墓といえよう。また、那珂遺跡群の中央と南部中央・北部中央の丘陵尾根中央頂部に古墳や方形周溝墓が所在していることは、古墳時代における空間使用を考えるうえで貴重な成果であるといえる。さらに7世紀後半から奈良時代の掘立柱建物・堅穴住居跡・溝などからなる集落、12世紀後半期の集落の検出など多大な成果を得た（菅波正人「那珂14」1995）。

第46次調査は、道路を挟んで第9次調査地の西隣接地にあたる。第16次調査では標高8.7～9.0mの鳥栖ローム上面で、弥生時代中期末～後期初頭の井戸・古墳時代後期～奈良時代の堅穴住居跡・土壤が検出された。第46次調査地は丘陵尾根から西斜面にあたっており、第9・41次調査で検出した古墳時代初頭の方形周溝墓群は延びていない。井戸が検出されていることから弥生時代中期後半～後期と奈良時代には集落が営まれている（加藤隆也「那珂14」1995）。

第3章 第9次調査の記録

1. 調査概要(Fig.3・PL.1)

本調査予定地は、東側・西側を幅4m弱の南北方向に走る道路に挟まれ、南北側は民有地と隣接し、平面形は平行四辺形をなしている。本調査は、地権者と埋文課との協議の過程で、共同住宅建設予定地すべてに遺構が分布するとして、申請地全域を調査対象としており、廃土および調査事務所設置は場内処理を行うこととなっていた。本調査は、まず調査対象地の北西角に調査事務所兼休憩所である用地として東西7m強・5m前後を確保し、南北側の民有地との境界にはブロック塀があり、東西側は市道と接しているため検出遺構面の深さを考慮し、北側は1m前後、西側・南側は2m弱の引きをとり、東側は遺構分布が稀薄なため3m前後の引きをとり調査区を設定した。なお、東側については掘立柱建物群が伸びていると考えられたため、本調査の過程で拡張し調査を実施した。

本調査は、まず調査対象地を中央部で東西に切り北側からバックホーを使用し厚さ30cm前後の耕作土を除去することから始めた。その結果、標高9.4~9.8m前後の鳥柄ロームの上面で遺構を検出したため精査を行い、北側の調査終了後、廃土をバックホーを使用して移動し、南側の耕作土を除去し鳥柄ローム上面の精査を行った。地形的には、鳥柄ロームおよびその下の八女粘土のありかたからみていくと、本調査地は丘陵尾根上に位置しているものの、北から南西方向へやや傾斜している。

検出遺構として、弥生時代後期初頭前後の井戸2基、弥生時代(中期後半から後期)の堅穴住居跡6棟・掘立柱建物5棟・土壙、古墳時代初頭の方形周溝墓3基、古墳時代後期後半から奈良時代にかけての堅穴住居跡4棟・掘立柱建物7棟などがある。梁間1間の掘立柱建物は弥生時代のものと考えられ、調査区の西側におもに分布しているほか、同期の堅穴住居跡も調査区の西側から南側にかけて分布している。古墳時代後期後半の堅穴住居跡は、方形周溝墓の周溝を切る形で調査区の南側に分布している。これらの検出遺構は、堅穴住居跡をSC、掘立柱建物をSB、井戸をSE、土壙をSK、方形周溝墓をSX、溝をSD、柱穴をSPと遺構記号を使用し、遺構検出順に遺構記号の下に2桁の通し番号を付した〔例: SX-01(方形周溝墓)・SD-02(溝)・SE-05(井戸)・SC-06(堅穴住居跡)・SK-07(土壙)・SB-20(掘立柱建物)〕。なお、柱穴については検出順に3桁の通し番号を付し、建物として確認したものは整理過程で遺構番号の後に2桁の通し番号を付した。本書のなかでは遺構名・遺構記号併記して使用している。

出土遺物として、先土器時代のナイフ形石器・剝片・削片、弥生時代中期から後期の弥生土器・石器、古墳時代初頭の土師器・鉄器・石器、古墳時代後期から奈良時代の須恵器・土師器、中世の青磁などがある。弥生時代の弥生土器や石器は、堅穴住居跡・井戸や土壙などから出土したほか古墳時代初頭の方形周溝墓から多量出土した。古墳時代初頭の土師器は方形周溝墓の溝から、古墳時代後期の須恵器・土師器は堅穴住居跡などから出土した。出土した遺物は、頭に8703の遺跡調査登録番号を冠し、土器・土製品は00001から、石器は01001から、鉄器は01051から通し番号を付し登録番号とした。なお、本書のなかでは、挿図および図版は遺跡調査登録番号を外した5桁で示し、本文中では4桁で述べていくことにする。また、本調査では先土器時代の遺物が遺構検出時や弥生時代以降の遺構から出土しているが、良好な包含状態で出土したものではなく、出土量も少ないと機会をみつけて紹介することにする。

0
10m

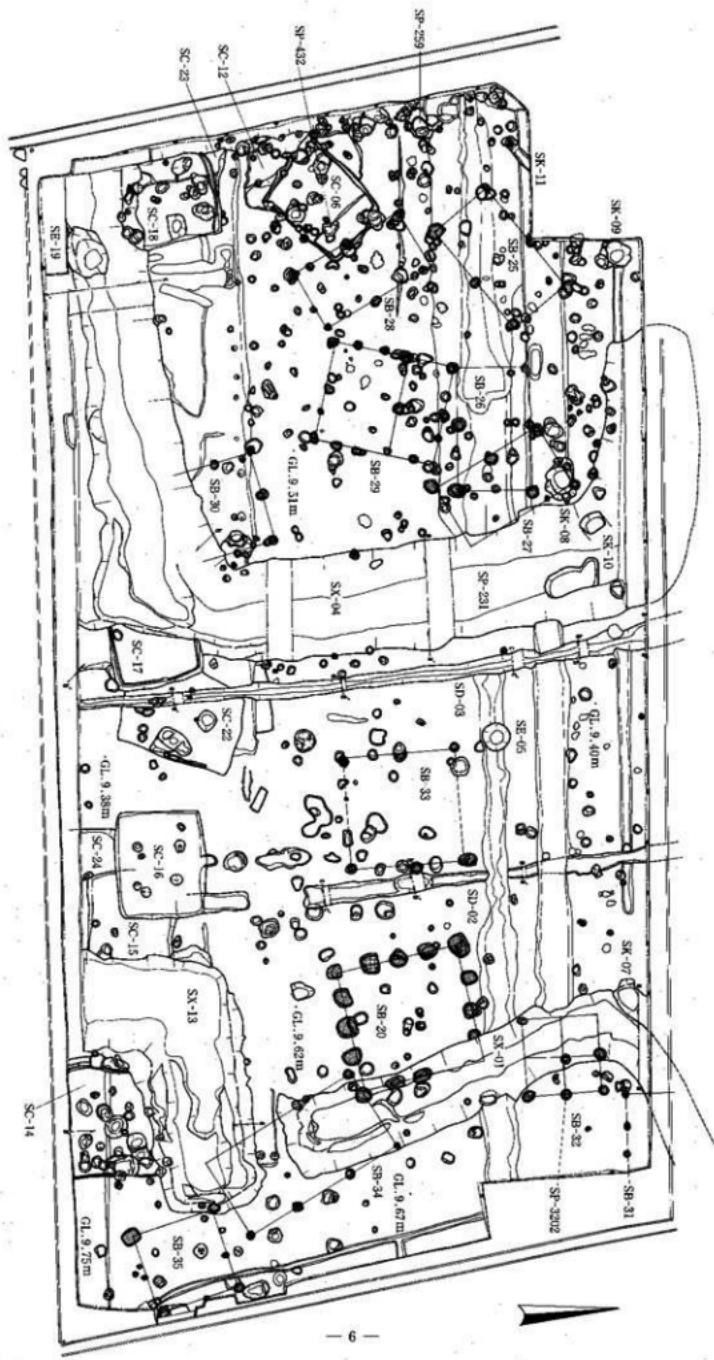


Fig. 3 第9次調查遺構配座測量圖

2. 窪穴住居跡と出土遺物

本調査では、弥生時代のもの6棟、古墳時代後期のもの4棟を検出した。弥生時代のものは、方形周溝墓構築以前のものであり、検出土壙のなかには中期によくみられる窪穴住居跡の中央土壙と考えられるものもあり、調査区西側から南側に分布しているが調査区全体に弥生時代の窪穴住居跡からなる集落が広がっていたと考えられる。

(1) 第6号窪穴住居跡(SC-06)と出土遺物(Fig.4・5・46, PL.2)

本住居跡は調査区の西端中央に位置し、SC-12と切り合い関係にあり、SB-28に切られている。本住居跡とSC-12は、15cm前後の遺存のため最後まで切り合い関係を確定することはできなかったが、本住居跡はSC-12を切っている可能性が高い。本住居跡は、長軸4.3m、短軸3.2mを測る長方形の平面形をもち、東側に幅1m前後の削り出しのベットをもち、壁溝が巡っている。なお、主柱は2本と考えられ、その間に火が設けられている。SC-12は、南北に長軸をとり4.5m、短軸3.2m前後を測る平面形長方形の窪穴住居跡である。

出土遺物 本住居跡からは壺・壺・鉢・高杯・器台・手捏ね土器などの弥生土器と砾石が出土した。01-03・05は壺で、01はくの字状をなす口縁をもち口径35.6cmを測る。02は口径31cmを測り丹が塗ら

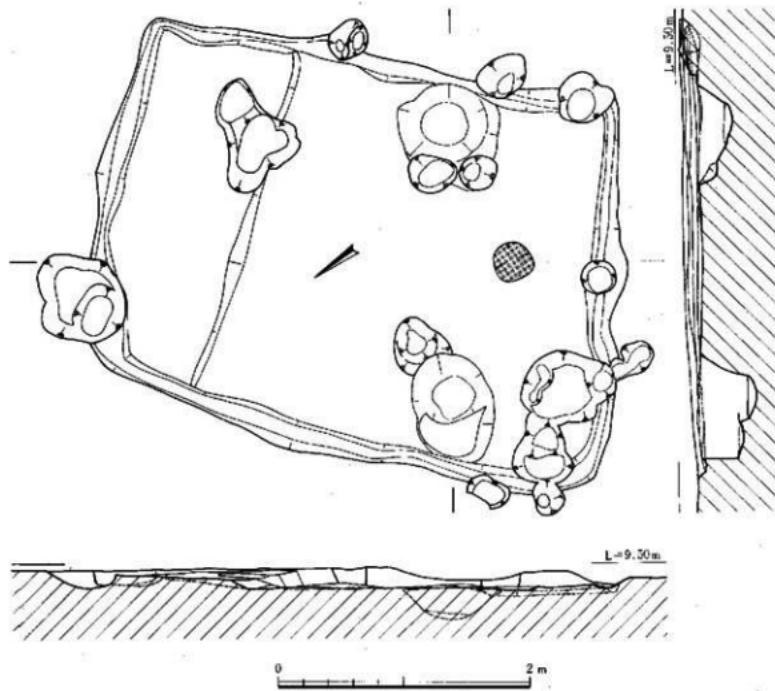


Fig. 4 第6号窪穴住居跡 (SC-06) 実測図

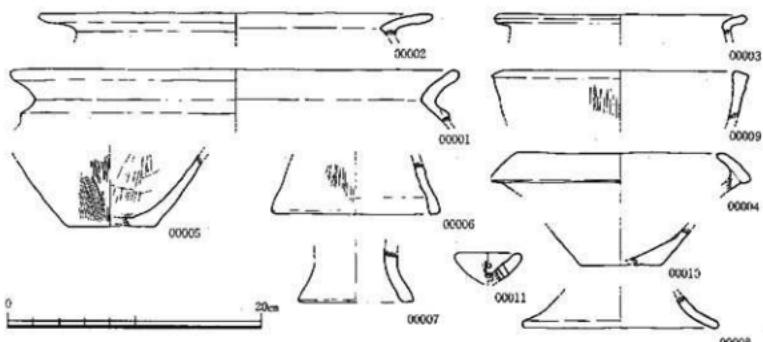


Fig. 5 第6号竪穴住居跡出土上器実測図

れている。03は口径20cmを測る。04・10は底で、04は二重口縁臺、10は底部である。09は鉢と考えられ口径20.4cmを測る。11は手程ね土器で口径5.2cmを測り、焼成前の穿孔がある。08は高杯の脚部で器表には丹が塗られている。06・07は器台である。1007は粘板岩製の砥石で、3面が砥面として使用されている。

以上の出土遺物から、第6号竪穴住居跡は弥生時代後期後半頃、第12号竪穴住居跡は中期末から後期初頭頃のものと考えられる。

(2) 第14号竪穴住居跡(SC-14)と出土遺物(Fig. 6・16, PL.2)

本住居跡は、調査区の東側南端に位置し、SX-13に北側を切られ、南側は調査区外へ延びている。遺存状態は5cm前後と非常に悪く壁溝で住居跡と確認できる程度である。東西4.6mを測り、平面形方形をなすものか。

出土遺物 本住居跡からは弥生土器の細片とともに、絵画土製品と砥石が出土した。12は弥生土器の破片を利用し、縦3.9cm、横5.8cmのメンコ状に整形し、嘴の長い鳥を描いている。1008は凝灰岩製、1009は砂岩製の砥石で、前者は表裏が石皿状をなし、左および下側縁も砥面として使用しており、長さ16.25cm、幅15.15cm、最大厚3.15cmを測る。1009は表裏および左右側縁が砥面として使用されており、裏面には薬研磨状をなす砥溝が6条ほどみられ、長さ22.75cm、幅12.85cm、最大厚4.05cmを測る。

以上から本住居跡は弥生時代終末期前後のものと考えられる。

(3) 第16号竪穴住居跡(SC-16)と出土遺物(Fig. 7~10, PL.3)

本住居跡は、調査区南側の中央よりやや東寄りに位置し、SC-15・SC-24を切り、SD-02に切られている。東西4.2m、南北3.6mを測る平面形長方形をなし、35~40cm遺存しており、北側壁のはば中央に竈が設けられていた。竈は白色粘土を使用し構築されていたと考えられるが、住居廃棄の際、破壊したと考えられ白色粘土が北側の覆土に多量含まれており、移動式竈も白色粘土中から出土しており、造り付け竈の骨組みとして使用されていた可能性が高い。主柱は、床から60cm前後埋め込まれている4本柱である。

第15号竪穴住居跡は、SC-24・SX-13を切り、SC-16に切られている。南北3.4m、東西4m前後を測る平面形長方形をなし、15cm前後遺存している。第24号竪穴住居跡は、SC-15・16・SX-13に切られ南側は調査区外へ延びている。1.8m幅のベットはやや広くもう1棟住居が重なっている可能

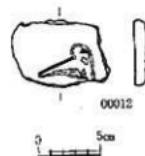


Fig. 6 繪画土器実測図

性がある。

出土遺物 本住居跡からは、須恵器・土師器など比較的まとまった一括遺物が出土した。13~19は須恵器で、20~45は土師器である。

須恵器からみしていくと、14・16~18は杯蓋で、16の口縁は無返し、ほかには有返しの口縁をもち、14は受け部径10.8cm、器高2.6cmを測る。17の天井外にはヘラ記号がみられる。15は受け部径14cmを測る杯身である。13は胴部最大径15.2cmを測る壺で、19は口縁径10cmを測る高杯でヘラ記号が付されている。

土師器としては、高杯・壺・瓶・移動式竈がある。27は高杯の杯部で、口縁径19.2cmを測り、27は高杯の脚部で底径9.4cmを測る。

20~25・39~42は壺で、24が口径が15.2cm、25が14.6cmなど口径が

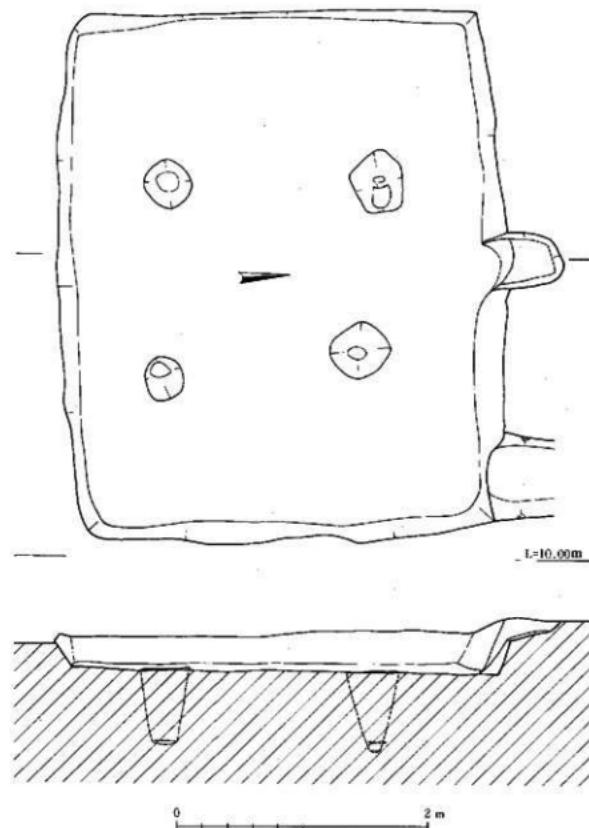


Fig. 7 第16号堅穴住居跡 (SC-16) 実測図

15cm前後のもの、21~23のように口径が20~23cm前後となるもの、20は28cm、39は30.2cmと口径が30cm前後になるものに大別できる。いずれも胴部から屈曲して口縁となる器形をもち、口縁部は横ナデ調整を施し、外面はハケ目調整が加えられ、内面の屈曲部から下位はヘラケズリが施されている。29・31・37・38は瓶で、29は口径28.6cmを測り、31・38は底径16.8cm・28.4cmを測る。36・43~45は移動式竈で、43は炊き口の左右の部位と考えられ、推定高32.4cmを測る。ほかに、胴部に2個の把手がつく壺か瓶になるものが多量出土している。

以上、遺構および出土土器から古墳時代後期の7世紀前半頃のものといえよう。

(4) 第17号堅穴住居跡 (SC-17) (Fig. 11, PL.4)

本住居跡は調査区南側のはば中央に位置し、SC-22・SX-04を切っている。本調査時は私の不注意で、本住居跡より古いSX-04を先に掘りあげてしまった。SX-04のセクションベルトが残ってい

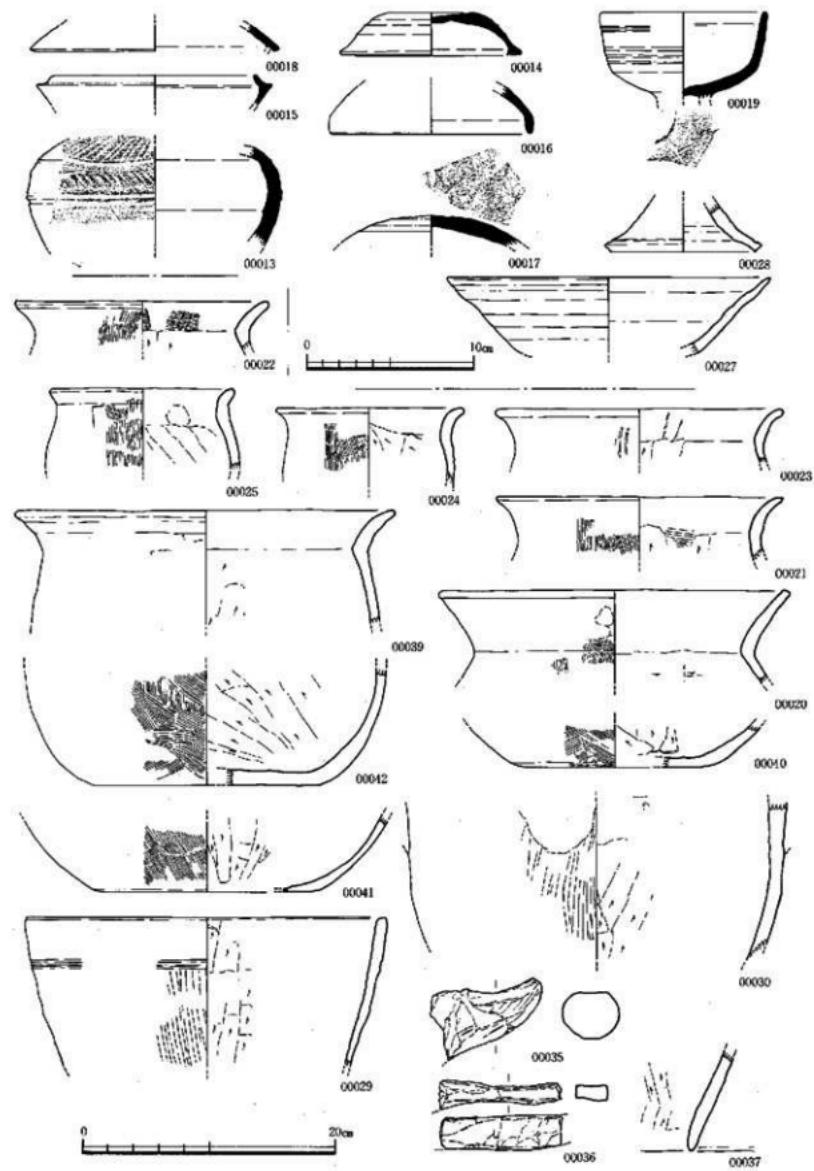


Fig. 8 第16号竖穴住居出土土器实测图 (1)

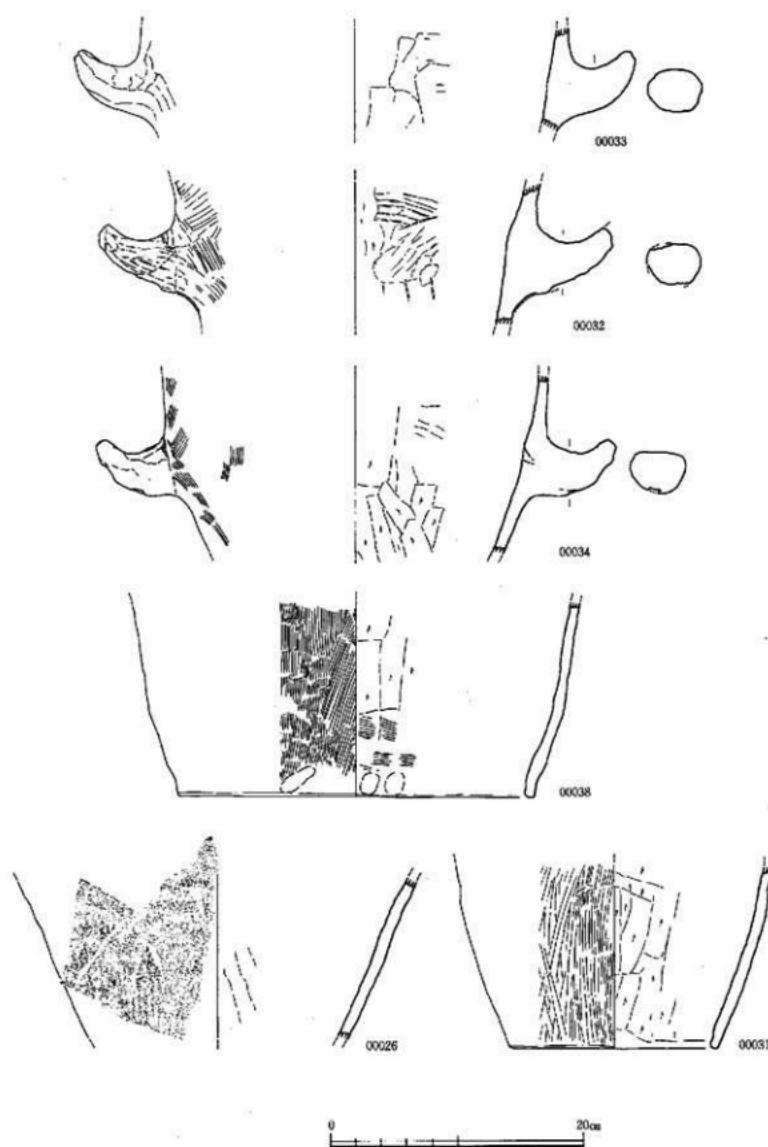


Fig. 9 第16号堅穴住居跡出土上上器実測図(2)

たため規模を確認することができた。東西4.3m、南北3.8m前後を測る平面形長方形を呈し、50cm前後遺存していた。壁には壁溝が巡っており、SX-04掘削時の所見から北側壁のほぼ中央に竈が設けられていたと考えられる。出土遺物は精査を行ったところではなかったが、後で考えれば、SX-04の上層の本住居跡内

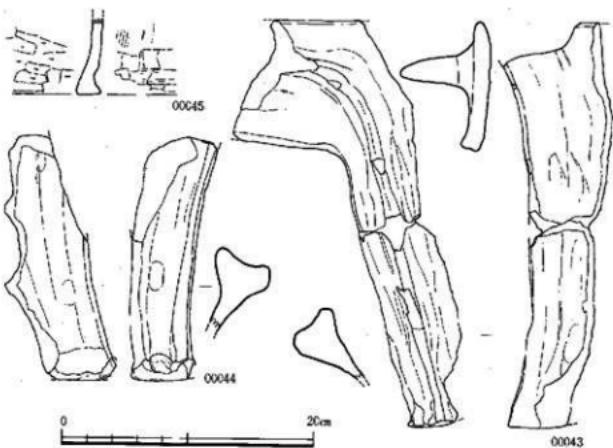


Fig. 10 第16号竪穴住居跡出土遺物実測図

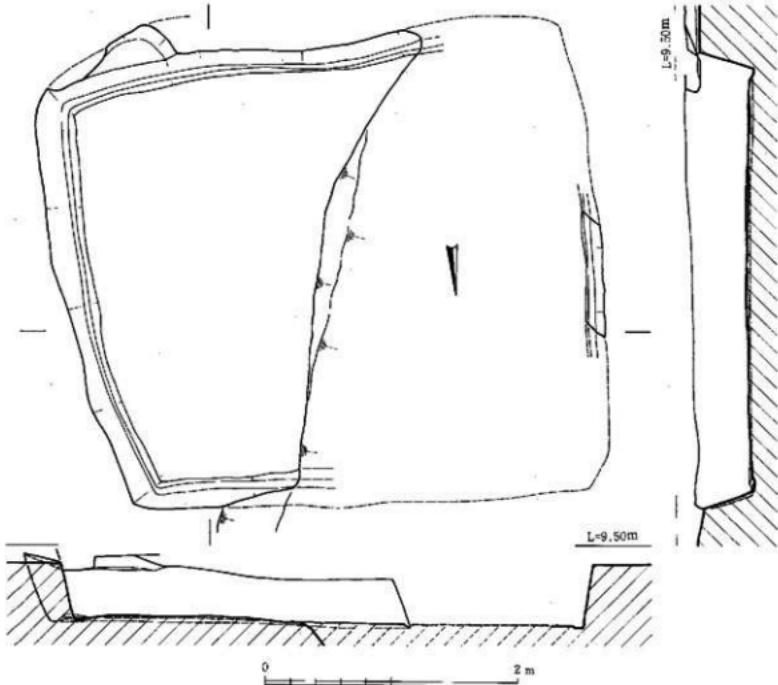


Fig. 11 第17号竪穴住居跡 (SC-17) 実測図

と思われるところから白色粘土に混じって出土した須恵器は、本住居跡に帰属するものといえよう。

以上から、本住居跡は古墳時代後期の7世紀初頭前後のものといえよう。

(5) 第18号竪穴住居跡(SC-18)と出土遺物(Fig.12, PL.4)

本住居跡は調査区の南西端に位置し、SC-23・SX-04を切っている。本住居跡についてもSX-04を先に掘削してしまい、平面形は方形から長方形を呈していると考えられるが、規模など構造を把握できなかった。

出土遺物 本住居跡からは古墳時代の須恵器・土師器と弥生土器が出た。46~49は須恵器で、46は無返しの杯蓋で、口径11.2cm、器高3.3cmを測る。48は壺の蓋と考えられ、外天井にヘラ記号がみられる。47は蓋受け用の造りだしをもつ杯身で、受け部径11cmを測る。49は腹の胴部片。55は胴部外面にタキを施した土師器壺で、口径20cmを測る。50~54は弥生土器で、50は口径26.2cmを測る蓋、51は壺の底部、52・53は壺で、52は口径17.6cmを測る無頸壺、53は口径12.4cmを測る。54は器台。

以上の出土遺物から本住居跡は、古墳時代後期の7世紀初頭前後のものといえよう。なお、本住居跡出土の弥生時代中期末前後の弥生土器は、第23号竪穴住居跡に帰属する遺物と考えられる。

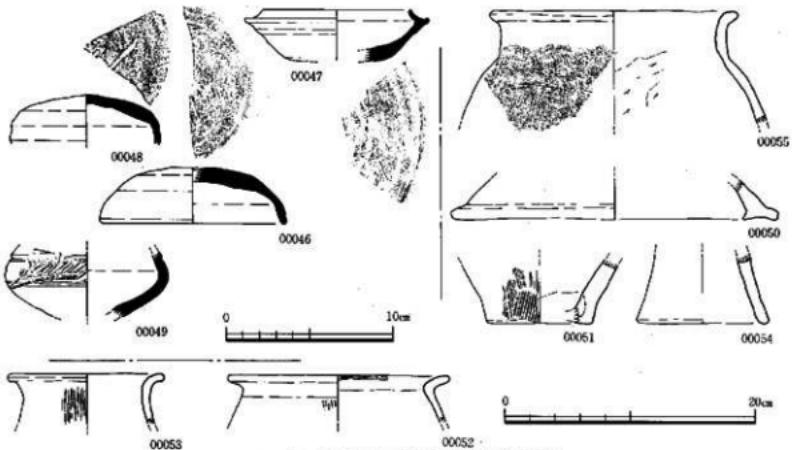


Fig.12 第18号竪穴住居跡出土土器実測図

(6) 第22号竪穴住居跡(SC-22)と出土遺物(Fig.13, PL.2)

本住居跡は、調査区南側のはば中央に位置し、SD-03・SC-17に切られている。本住居跡は痕跡程度に遺存しているのみであるが、南北方向4.6m、東西方向3.6m前後を測る長方形の平面形をもち、2本柱を主柱とすると考えられる。東壁に沿った中央に土壙も設けられている。

出土遺物 56~58は弥生土器の壺で、58は口径20cmを測る。

以上から本住居跡は、弥生時代後期前半頃のものか。

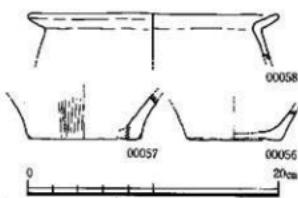


Fig.13 第22号竪穴住居跡出土土器実測図

3. 掘立柱建物(SB)

本調査では、12棟の掘立柱建物(以下、建物とする)を検出した。検出した建物は、1間×3間を基調とする弥生時代のものと、古墳時代後期以降のものに大別できる。いずれの建物の柱穴からも出土遺物は少なく、いずれも弥生時代の弥生土器の細片であり、時代・時期を決定できるものではない。いずれも時代・時期は、北部九州地域で一般的にいわれている梁行1間、桁行3間のものは弥生時代のものとし、本遺跡の出土土器は弥生時代のものは中期後半から後期初頭のものが一番多く、次に後期中頃から後半にかけてのものがあり、弥生時代の本調査地の建物は中期後半から後期後半のものといえる。古墳時代初頭は土器類はあるものの、本調査地は方形周溝墓群が築造されており、集落空間とは考えられないのでこの時期のものはないといえる。古墳時代の遺物は後期のものからあり、以降奈良時代と鎌倉時代の遺物も出土している。方形周溝墓群以降の掘立柱建物は、遺物がもっとも多い古墳時代後期後半から奈良時代に帰属するものが多く、鎌倉時代に帰属するものもある可能性がある。

(1) 第20号掘立柱建物(SB-20)(Fig.14)

本建物は調査区東側の中央に位置し、SX-01を切っている。SP-2001-2016の16個の柱穴からなる梁行4間・桁行4間の建物であるが、私の本調査時の判断誤りからSX-01を先に掘削してしまった、SP-2001・2002を確認できなかった。柱穴掘り方は一辺40~80cmを測る隅丸方形を呈し、20~65cm遺存している。柱は柱痕跡から15cm角前後の角柱が用いられていたと考えられる。東側桁行4.65m、西側桁行5m、北側梁行4.55m、南側梁行5mで、柱間は90~160cmを測る。

本建物はN-8.5°-Wの主軸方位をとる桁行4.65~5m、梁行4.55~5mの4間×4間の建物で、古墳時代後期以降のものであるが、時代・時期限定はできない。

(2) 第25~28号掘立柱建物(SB-25~28)(Fig.14・15)

第25~28号建物は、調査区の西側の中央から北側寄りで検出した梁行1間、桁行2間の建物である。第26号建物は、第27号建物を切り第29号建物に切られている。また、第27号建物はSX-04に切られてしまっている。第28号建物はSC-06を切っている。いずれの建物も一辺45~55cmの隅丸方形の柱穴掘り方をもち、10~80cm遺存している。

第25号建物は、N-45°-Eの主軸方位をとる桁行4.75~5.11m、梁行2.59~2.73mの2間×1間の建物である。第26号建物は、S-89.5°-Eの主軸方位をとる桁行4.84~5m、梁行2.8~2.84mの2間×1間の建物である。第27号建物は、N-27°-Wの主軸方位をとる桁行4.6~4.73m、梁行2.7~3.15mの2間×1間の建物である。第28号建物は、N-25°-Wの主軸方位をとる桁行4.77~4.79m、梁行2.48~2.53mの2間×1間の建物である。これらの建物は2間×1間の建物であること、第27号建物がSX-04に切られること、第28号建物がSC-06を切っていること、第27・28号建物は主軸方位がほぼ同じであることなどから、第27・28号建物が弥生時代後期前半から中頃で、第26号建物が後期後半頃のものか。第25号建物はSC-06とはほぼ同じ主軸をとることから後期初頭前後のものか。

(3) 第29号掘立柱建物(SB-29)(Fig.16)

本建物は、調査区の西側中央に位置し、第26号建物を切っている。SP-2901-2919の19個の柱穴からなる建物で、SP-2909・2914・2916は確認できなかった。柱穴掘り方は径25~45cmの平面形円形で、10~70cm遺存している。桁行4.83~5.02m、梁行3.85~4.08mで、柱間は85~125cmを測り、北側2間のところの柱穴は棟持ち柱か。柱間が近く壁立ちの平地住居か。

本建物は、N-17.5°-Eの主軸方位をとる5間×4間の建物か、あるいは壁立ちの平地住居で、古墳時代後期後半頃のものか。

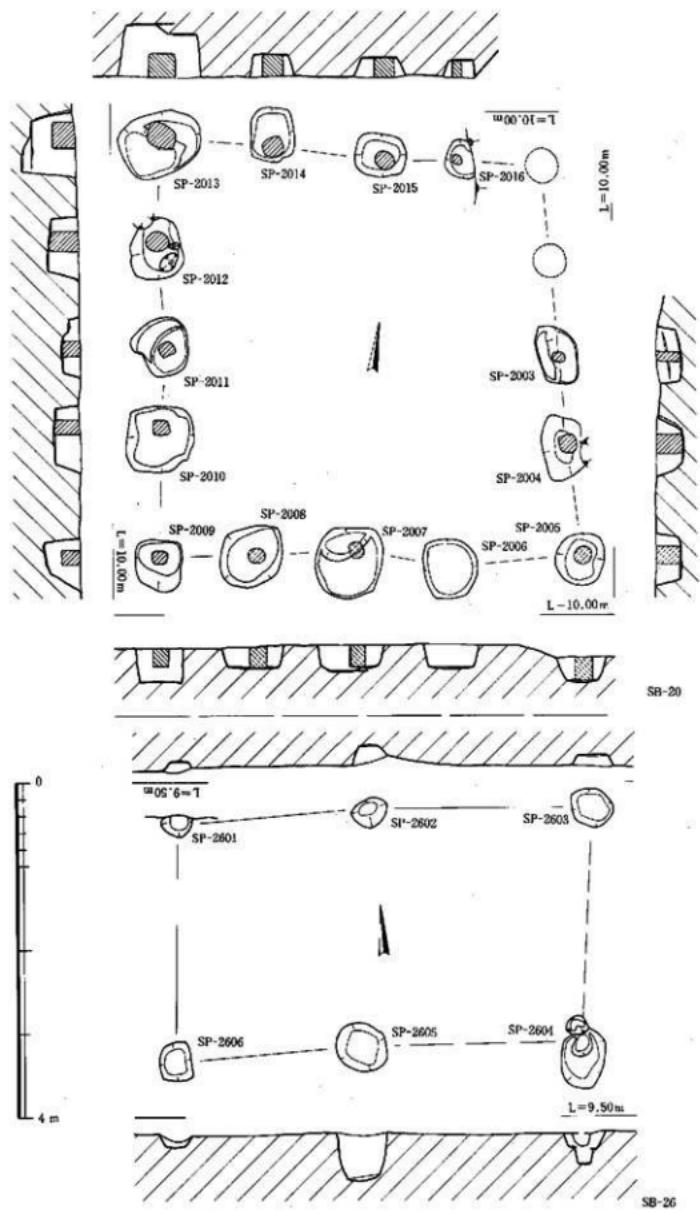


Fig.14 第20・26号掘立柱建物 (SB-20・26) 實測図

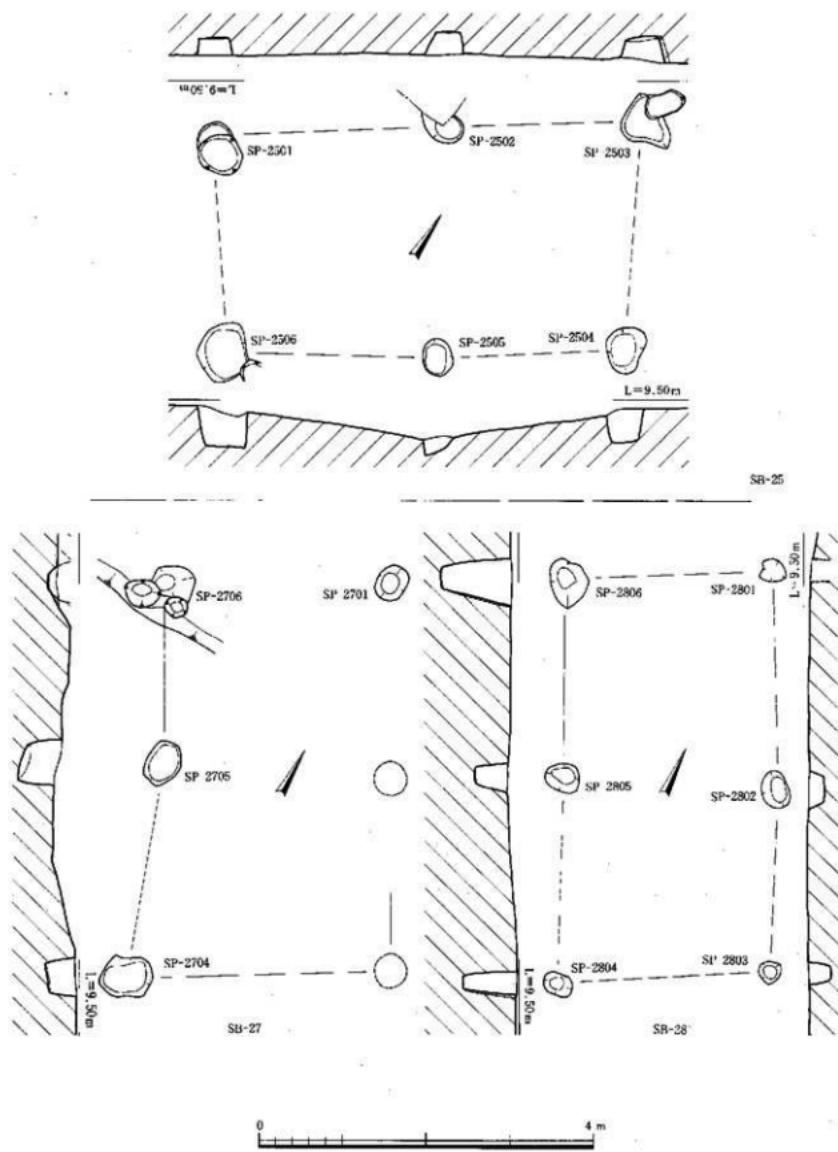


Fig. 15 第25・27・28号掘立柱建物 (SB-25・27・28) 実測図

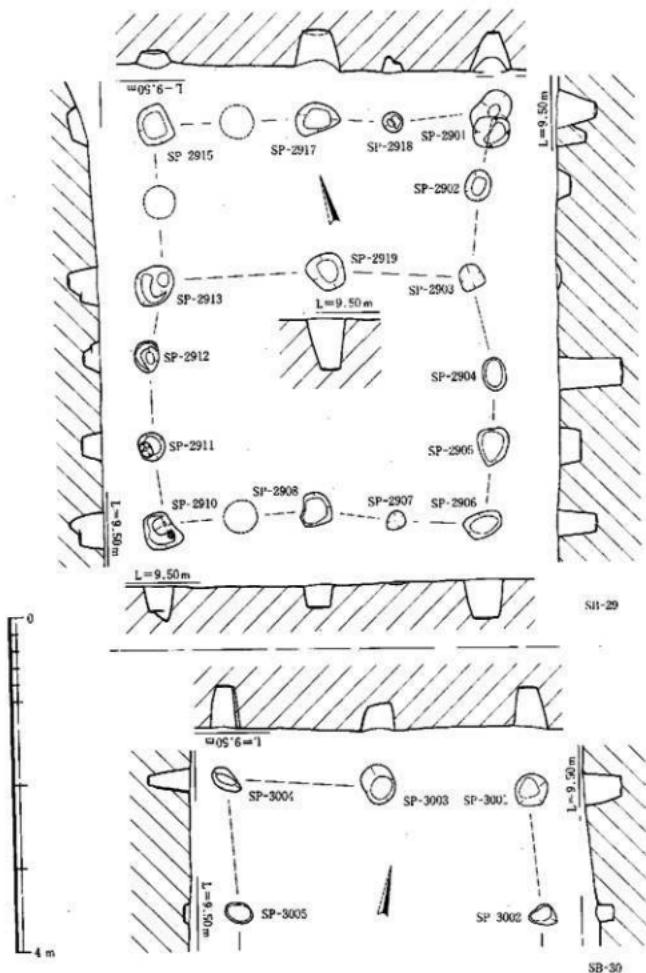


Fig. 16 第29・30号掘立柱建物 (SB-29・30) 実測図

(4) 第30・31号掘立柱建物 (SB-30・31) (Fig. 16・17)

第30号建物は、調査区南側の中央より西寄りで検出し、SX-04と切り合い関係にあるが、私の本調査時の誤りから、前後関係を確認しないままSX-04を掘削してしまったため前後関係はわからない。SP-3001～3005の5個の柱穴を確認し、梁行2間の建物で、桁行1間を確認したのみである。梁行柱間は1.75・1.85mで、桁行柱間は1.52・1.6mである。本建物はN-9°-Wの主軸方位をとっている。

第31号建物は、SP-3101・3103の柱穴を確認したのみで北側に延びていると考えられる。

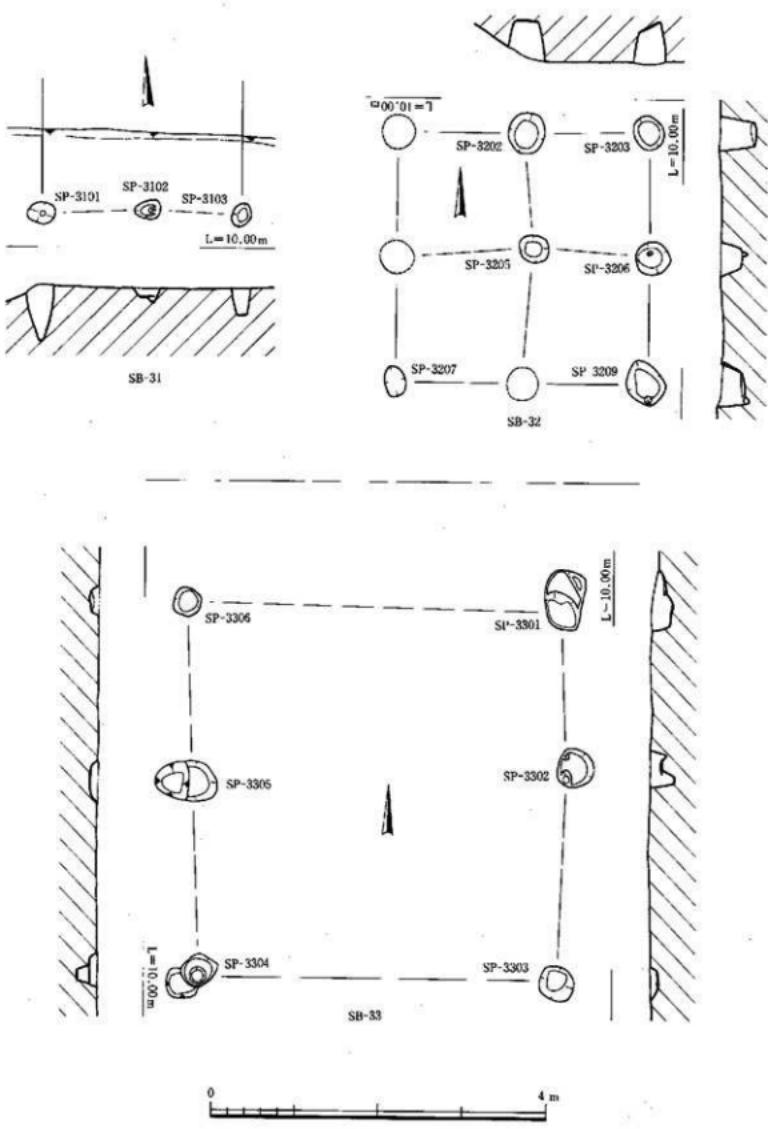


Fig. 17 第31~33号掘立柱建物 (SB-31~33) 実測図

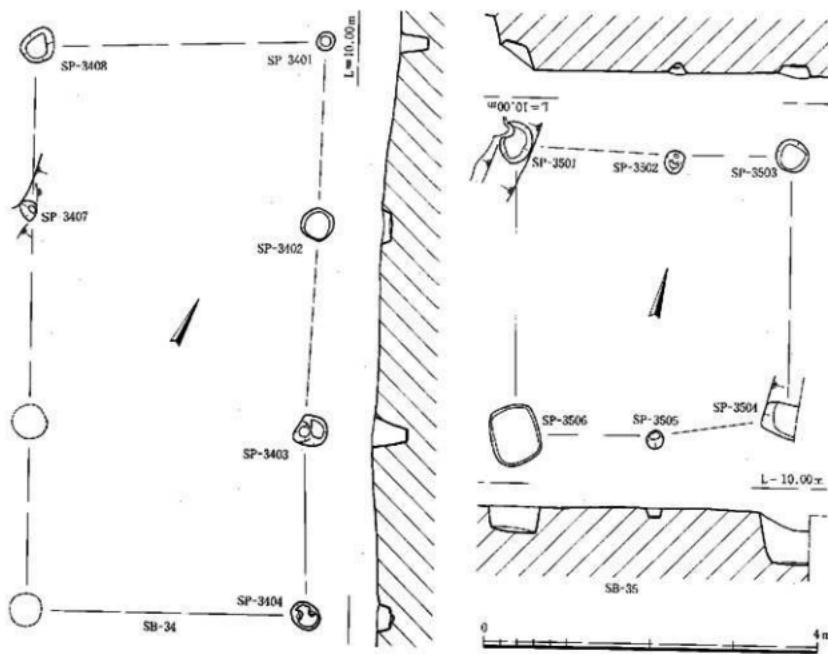


Fig.18 第34・35号掘立柱建物 (SB-34・35) 実測図

(5) 第32・33・35号掘立柱建物 (SB-32・33・35) (Fig.17・18)

第32号建物は調査区北東に位置し、SX-01を切っているが私の本調査時の誤りからSX-01を先に掘削してしまったため、SP-3201・3204・3208を確認できなかった。桁行2間、梁行2間の総柱の建物で、柱間は1.5mを測る。柱穴掘り方は径40cm前後で、45~50cm遺存している。第32号建物は、桁行・梁行2間の磁北に主軸方位をとる総柱の倉庫と考えられる建物で、古墳時代後期後半から奈良時代の間におさまると考えられる。第33号建物は調査区の中央に位置し、SD-02を切っている。桁行2間・梁行1間の建物として検出したが桁行4.36~4.46m、梁行4.28~4.47mと方形に近く2間×2間の総柱の建物だった可能性が高い。N-3°-Wの主軸方位をとる。第35号建物は調査区の南西端に位置し、SX-13を切っている。SP-3501~3506の6個の柱穴からなる桁行2間、梁行1間の建物としてまとめたが、桁行3.3m、梁行3.12~3.45mと方形に近く、桁行の中間の柱穴が小さく、しかも10cm前後と遺存状態が悪いことから、もともとは2間×2間の総柱の建物であった可能性が高い。N-16°-Wの主軸方位をとる。

(6) 第34号掘立柱建物 (SB-34) (Fig.18)

本建物は調査区の東側中央よりやや南寄りに位置し、SX-01・13に切られている。SP-3401~3408の8個の柱穴からなる桁行3間、梁行1間の建物としてまとめた。柱穴掘り方は円形を呈し、20~40cm遺存している。桁行6.74~6.85m、梁行3.32~3.45mでN-27°-Wの主軸方位をとる。

4. 井戸(SE)と出土遺物

(1) 第5号井戸(SE-05)と出土遺物 (Fig.19・20・46, PL.8)

本井戸は、調査区北側のほぼ中央に位置している。検出面では径1.1m前後を測る円形を呈し、鳥栖ロームを掘りぬき、八女粘土層下部まで掘削しており、2.85m遺存している。なお、井戸底の最深部は含水層である硬砂層まで達しており、この湧水を利用したと考えられる。井戸底は、ほぼ平坦で径58cmを測る。

遺物は、検出面から底までむらなく出土したが、底上30cm前後の0267・0268・0272の甕3点からなる群と検出面下75cm前後の0275～0278などからなる群は、井戸廃棄時の祭祀と考えられる。底直上の祭祀は壺の完形品3点からなり、上部の祭祀は小形甕の完形品2点と大形甕・壺などの破碎品で構成されている。

出土遺物 まず、底直上の甕3点からみていくことにする。0272は横の状態で、0267・0268は座った状態で出土した。0272はくの字状をなす口縁部をもち、胴部に最大径をもつ長胴で、底は丸みをもつた平底に整形している。口縁部は横ナデ、胴部表面は粗い縱方向のナデの後、下部の表面を大きく削り取っている。胎土は石英・砂粒を多く含み堅致で、器面は褐色を呈し、焼成も良い。口径11.8cm、器高21.2cmを測る。0267は口縁に最大径をもち17.8cmを測り、器高は20.7cmで、丸みをもつ平底の径は7.6cmを測る。胴部器表は縱方向のハケ目調整を施し、口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ調整で仕上げている。口縁部の対する2ヶ所を意図的に打ち欠いている。0268は口径17.1cm、器高16.5cm、底径6cmを測り、ハケ目調整が施された器表には丹が塗布されていたと考えられ、口縁端は意図的に打ち欠いている。

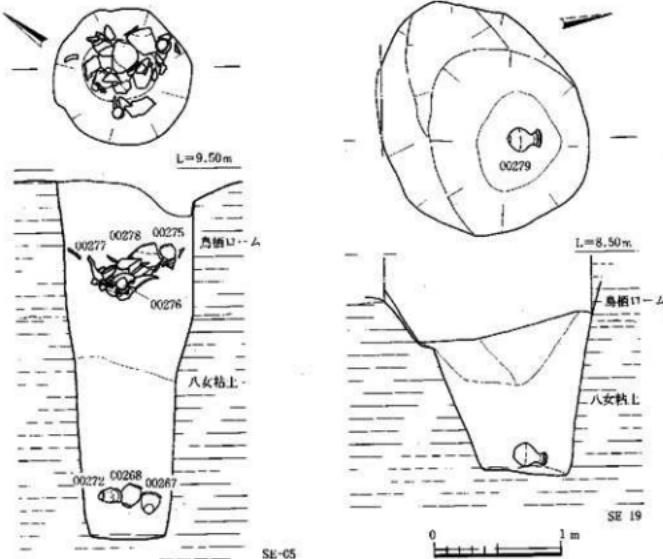


Fig.19 第5・19号井戸 (SE-05・19) 実測図

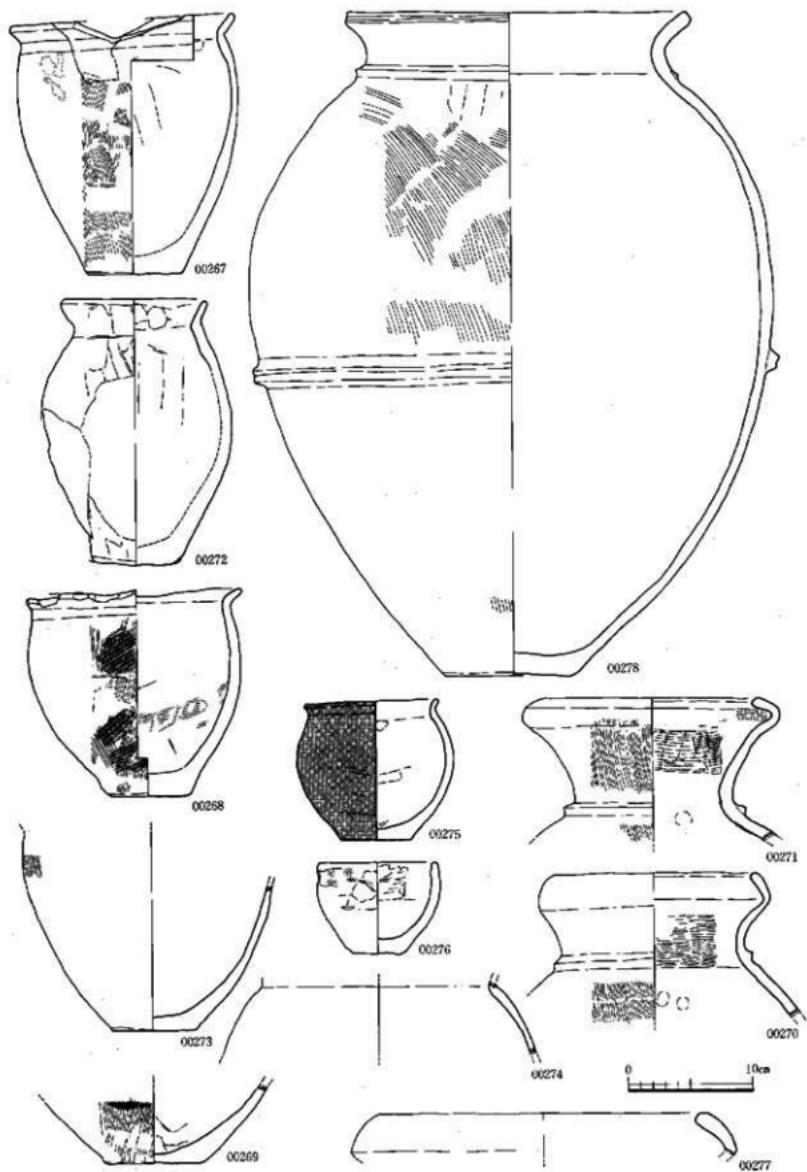


Fig. 20 第5号井戸出土土器実測図

0269～0271・0273～0278は上部の祭祀を構成していた土器である。0276は、底は平底でやや開きぎみに立上り、端部を丸めて口縁部とした椀状をなす鉢で、口径9.6cm、器高7.3cmを測り、本来は丹が塗布されていたと考えられ丹痕がみられる。0275は、膨らみをもつ胴部がややすぼり屈曲して開き口縁部となり、底部は平底をなす壺で、U口縁部は横ナデ調整後胴部にかけて丹を塗布しており、内面はナデ調整で仕上げている。口径10.7cm、器高11.3cmを測る。0278はくの字状をなす口縁部をもつ大形の壺で、屈曲部直下に三角凸帯、胴部中位にM字凸帯が巡っている。口径27.5cm、器高53cmを測る。0273は丹塗布の壺、0269～0271・0274・0277は壺で、0270・0271・0277は袋状口縁壺である。

1002は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の穂摘み具である。

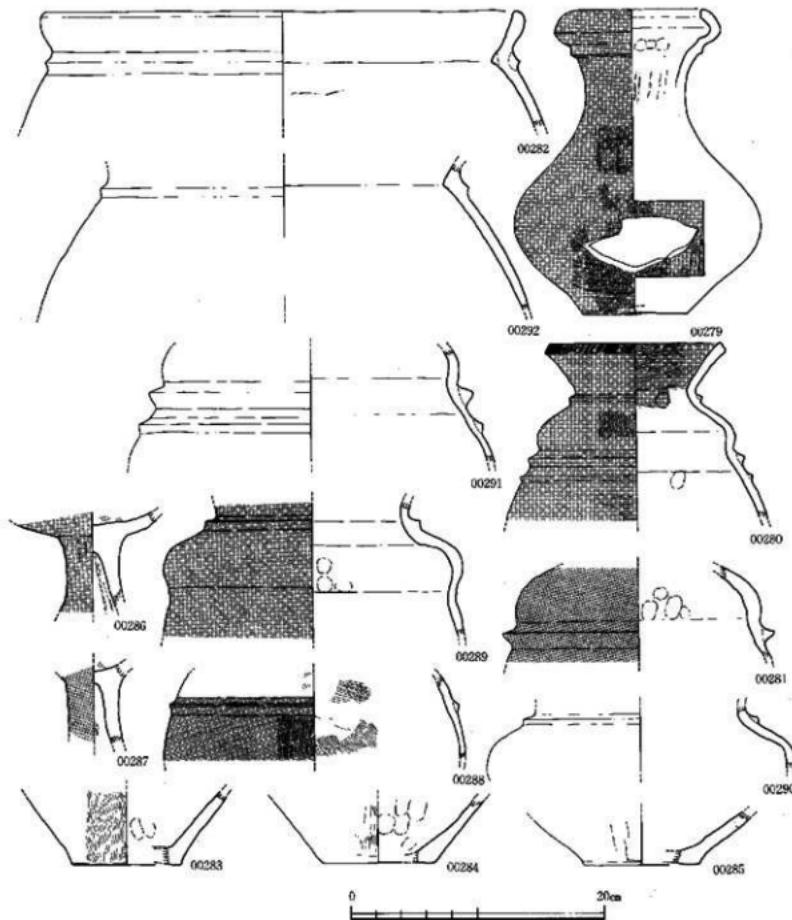


Fig. 21 第19号井戸出土土器実測図

以上から、硬砂層の湧水を利用した本井戸は、弥生時代後期初頭頃廃棄されたといえる。

(2) 第19号井戸(SE-19)と出土遺物 (Fig.19・21, PL.9)

本井戸は調査区南西端に位置し、SX-04に切られている。本井戸はSX-04の底面で検出し、検出面では長軸1.9m、短軸1.6mを測る楕円形を呈し、1.4m前後遺存しており、底はほぼ平坦で長軸80cm、短軸65cmの不正円形を呈している。本井戸は鳥栖ロームを掘りぬき、八女粘土層下部まで掘削しており、検出面での状況から鳥栖ロームと八女粘土層の境が大きく崩落していたと考えられ、鳥栖ロームと八女粘土層の境の湧水を利用した井戸と考えられる。

遺物は、検出面から底にかけてむらなく出土し、完形品は、底で袋状口縁壺1点が出土したのみである。ただ、底近くから底にかけて瓢形土器などの破片が多く、完形品1点と破碎土器で構成される井戸廃棄時の祭祀の可能性が高い。

出土遺物 0279は底で出土した袋状口縁壺で、袋状をなす口縁部直下に三角凸帯1条を巡らし、しづりを加えたややすほまる頸部となり、胴部は下彫れの形をなし、底は平底に整形している。口縁部は横ナデ調整後、器表面は頸部から胴部にかけてミガキを施し、胴部は縱方向のハケ目調整を施し、器表面および口縁部内面にかけて丹が塗布されている。なお、胴部の一部を意図的に打ち欠いている。口径9.4cm、器高24.2cm、底径8.2cmを測る。0282-0284・0292が壺、0286・0287が高杯、ほかは壺である。0282・0292はくの字をなす口縁部をもつ大形の壺で、器表の口縁部直下に三角凸帯1条が巡っており、0282は口径38.4cmを測る。0283・0284は平底の底部で、底径8.8cm・9cmを測る。0286・0287は高杯の軸部で器表面には丹が塗布している。ほかはいずれも瓢形土器で、0280は口縁部から胴上半部まであり、もっとも遺存している。最大径は胴部の中位か下位にあると考えられ、すばまりながら立ち上り、屈曲して肩部となり、さらにはすばまり頸部となり、屈曲して開きながら立ち上り口縁となっている。口縁端には刻み目が施され、頸部に1条と肩部直下に2条の三角凸帯が巡っている。器表面はハケ状工具により丁寧な横ナデ調整が施され、口縁部から胴部表面にかけては丹が塗布されている。口径14.2cm、残存高14cmを測る。0281・0289・0290は肩部、0288・0291は肩部直下、0285は底径9.2cmを測る平底の底部である。

以上から、本井戸は平面形円形を呈し、鳥栖ロームを掘りぬき八女粘土層まで掘削し、鳥栖ロームと八女粘土層の境の湧水を利用したと考えられる。また、本井戸は出土土器から弥生時代中期末から後期初頭頃のものといえよう。

5. 方形周溝墓(SX)と出土遺物

本調査では、主体部は検出できなかったが、調査区の西側を占める形でコの字状をなす溝からなる1基、調査区東側では北側と南側で逆L字状をなす溝からなる2基の方形周溝墓を検出した。第41次



Fig.22 方形周溝墓分布状況

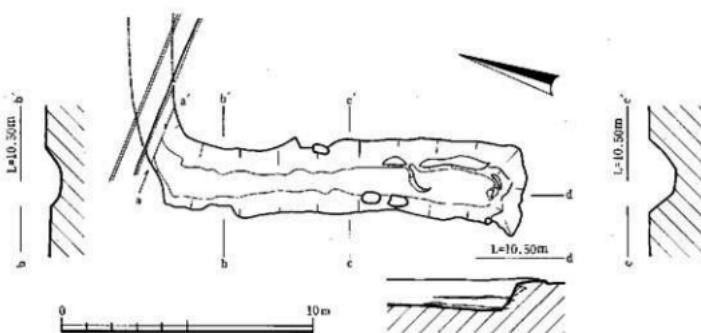


Fig. 23 第1号方形周溝墓 (SX-01) 実測図

調査成果と合わせてみていくと、那珂遺跡群の南側丘陵尾根上に所在する方形周溝墓群は少なくとも5基以上で構成されていたことになる (Fig. 22)。

(1) 第1号方形周溝墓 (SX-01) と出土遺物 (Fig. 23~25, PL. 5)

本方形周溝墓は、調査区東側で逆L字状をなす周溝として検出し、SB-34を切り、SB-20に切られており、SB-31・32とも切り合い関係にあるが、本調査時に確認していないため前後関係はわからない。鳥柄ローム面で黒褐色土から黒色土を埋土として北方向に延び、北側の調査区境界付近で東に曲がる幅2.5~3.5mの溝として検出した。上から黒褐色土・黒色土・暗褐色土・黒色~黒褐色土のバミス混じり上・バミス混じりの黒褐色土や黄褐色土・バミス混じりの黒色土を埋土とし、横断面形は逆台形を呈しており、1m前後遺存している。東側壁の傾きが西側壁の傾きより緩やかであることから東側を囲んでいたと考えられる。なお、南端は階段状をなしながら立ち上がっており陸橋と考えられ、SX-13との位置関係や第41次調査成果を考慮すると、内法で一辺6m前後の方形を区画していたと推定でき、南西角を陸橋とするものと考えられる。

出土遺物 本方形周溝墓からは、特に溝底や底面上で弥生土器とともに、まとまりをもった古式土師

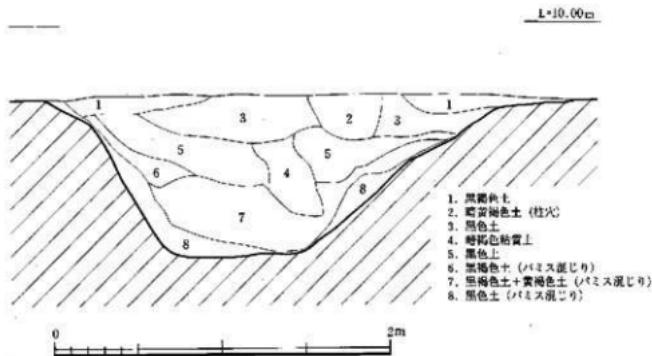


Fig. 24 第1号方形周溝墓 (SX-01) 土層断面実測図

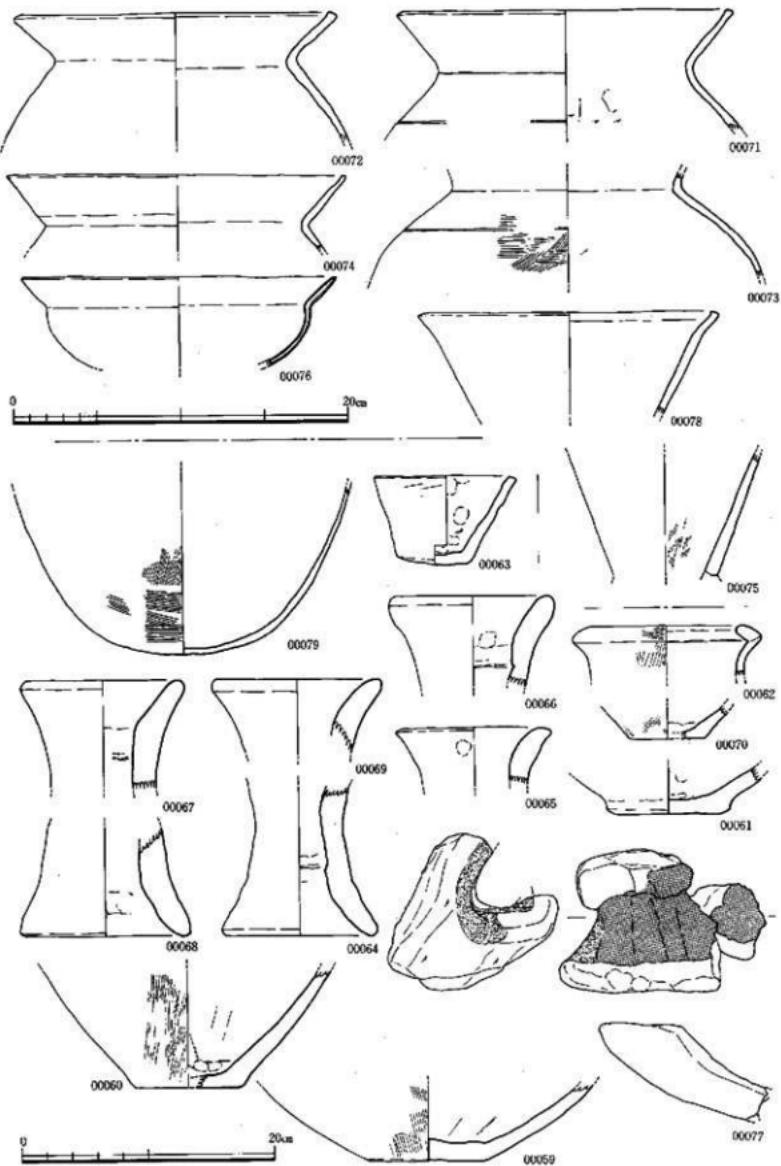


Fig. 25 第1号方形周溝墓下層出土遺物実測図

器が出土した。71~74は膨らみをもつ胴部から屈曲し、開きながら立ち上り口縁となる土師器壺で、いずれも器壁は薄く仕上げている。遺存状態が悪く、器面調整はわからない。71は口径20.2cm、72は19.2cm、74は20cm強を測る。75は球状をなす胴部から、屈曲して開きながら長く立ち上がって口縁となる土師器の長頸壺と考えられる。76は半円球状の胴部から屈曲して開きながら立ち上り口縁となる上師器の小形屈曲口縁鉢で、口径18.6cmを測る。78・79は土師器の壺で、底は丸底で、底近くの器表面にはハケ目調整がみられ、内面はヘラケズリがみられる。78は口径18cmを測り、78・79は同一個体と考えられ器高32cm前後となるか。63は弥生土器の鉢で、全体的に凹凸しており手捏ね土器か。口径11.3cm、器高7.1cmを測る。支脚か。77は金属質のものが付着しており、ルツボと考えられる。ほかはすべて弥生土器で、59~61は壺の底部、62・70は壺、64~69は器台である。

以上から本遺構は、幅3mで2m前後の深さをもつ逆台形溝で、内法一辺6m前後を方形に区画したと考えられる方形周溝墓で、出土土器から古墳時代初頭の布留式土器期の古段階のものといえよう。

(2) 第4号方形周溝墓(SX-04)と出土遺物(Fig.26~29・46, PL.6・7・16)

本方形周溝墓は、本調査区の中央から西側をコの字状をなす溝が囲む形で検出し、SK-10・SE-19・SC-23・SB-27を切り、SC-17・18に切られている。また、SB-30とも切り合ひ関係にあるが本調査時に確認していないため前後関係はわからない。本遺構は標高9.5m弱の鳥栖ロームの面で、茶褐色から暗茶褐色土・粘質土を埋土とする幅4m前後の溝が、コの字状に調査区西側を囲む形で検出した。溝は鳥栖ロームを掘りぬき八女粘土層まで掘削し、北側では上から茶褐色土および粘質土・黒褐色粘質土・パミス混じりの茶褐色粘質土・ばさばさした茶褐色土・褐色~黄褐色土および粘質土・黒褐色土混じり褐色粘質土・黄褐色ローム再堆積土を埋土とし、かたや南側では、上から炭化物やパミス・土器片などを多く含む茶褐色土および粘質土・ややしまりがない茶褐色土や暗茶褐色粘質土やシルトの互層・土器や炭化物を含む黒褐色粘質土や黒茶褐色土・ローム混じりの茶褐色土・ローム再堆積土を埋土としており、南側の方が地下水位が高いと考えられ埋土が湿りを帯びている。溝の横断面形は基本的には逆台形を呈しているが、南側ではU字状をなし、1.5m前後遺存している。

溝は北側で西に折れ、大半は調査区外へ延びているが浅くなってきており、陸橋となると考えられる。なお、第46次調査の成果も考慮すると、内法一辺8m前後の方形を幅4m前後の溝で区画した方形周溝墓で、北側中央に陸橋が設けられていたと考えられる。また、溝上部の埋土中から多くの板石片が出土した。これらの板石は片面にベンガラと考えられる赤色顔料が付着しているものが多くあり、石棺部材と考えられる。本方形周溝墓も主体部は検出できなかったが、石棺部材と考えられる板石片の出土から、主体部は石棺であった可能性が高いといえよう。

出土遺物 本方形周溝墓の溝からは、弥生時代の弥生土器・石器・古墳時代の土師器・須恵器・石製品など多量の遺物が出土し、特に下部の埋土中からは古墳時代初頭の比較的まとまった遺物が出土した。0153・0154は、球状をなす胴部から屈曲し内窓ぎみに開きながら立ち上り口縁となり、口縁端を軽くつまみ、器壁を薄く仕上げた布留系の壺で、0153は口径19cm強、0154は15.4cmを測る。0165は高杯の軸部片である。0155は胴部から頸部への屈曲部片で、長頸壺か。0156・0159は小形丸底壺と考えられ、口径11cm・6.4cmを測る。0219は、膨らみをもつ胴部から屈曲して直に短く立ち上り、口径9.2cmを測る口縁部となっており、器表面は丹塗りで小形丸底壺か。0157・0158は小形器台で、器表面は傷みが進んでいるが横ナデ調整後ミガキを加え?、丹を塗布している。0157は口径10.4cmを測る受け部、0158は3ヶ所に焼成前の小孔をもつ底径11.6cmを測る脚部。0160は手捏ね土器で、口径5.4cm、器高2.9cmを測る。0163も手捏ね土器と考えられるが、器表面がナデ調整で丁寧に仕上げられており、小形のコップ形に整形したものか。0164は土師器の底部で鉢か。0105・0161・0162・0234~0237は二

重口縁蓋で、0105・0162は一次口縁垂下型で口径27.2cm・17.3cmを測る。0234は、球状をなす胴部から屈曲して短く直に立ち上り頸部となり、屈曲して一次口縁となり、さらに屈曲してやや開きながら立ち上り、口径24.5cmを測る口縁となっている。胴部器表面にはハケ目調整が残り、内面はヘラケズリが施されており、口縁部は横ナデ調整で仕上げられていると考えられるが、器面が傷んでおりわからない。0236は口径24cmを測る。0161は球状をなす胴部から屈曲して、やや開きながら短く立ち上り頸部となっており、焼成後に底を穿孔している。器表面にはタタキを施した後、ハケ目調整が施され、胴部最大径17.1cmを測る。なお、0235・0237は胴部最大径31.5cm・34cmを測る。

0098・0174は土製のスプーンで前者には丹が塗布されている。1013は、棒状をなす花崗岩の転轍の上下を敲打器として使用しており、下敲打面には赤色顔料が付着している。1014は砂岩を用いた手持

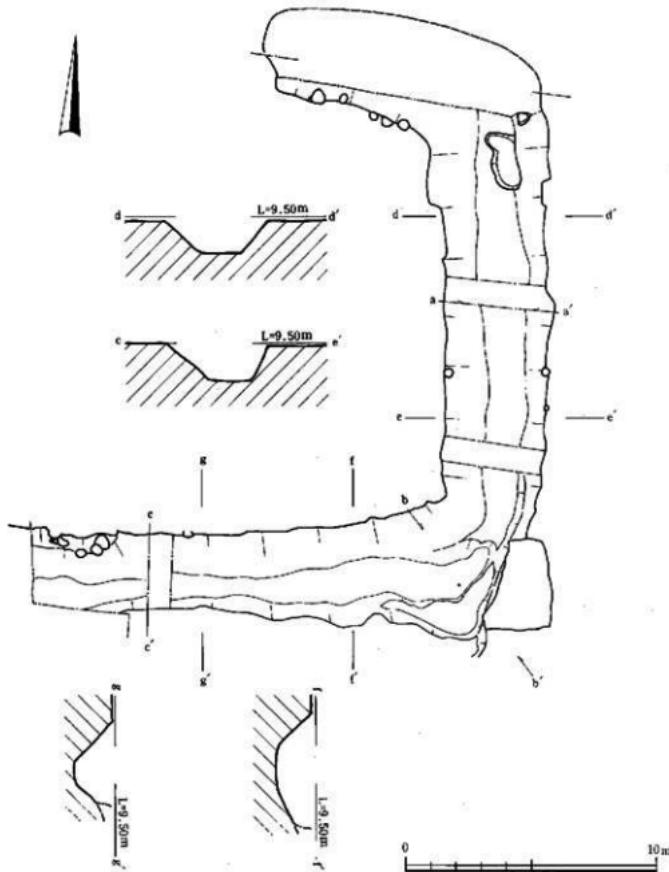


Fig. 26 第4号方形周溝墓 (SX-04) 実測図

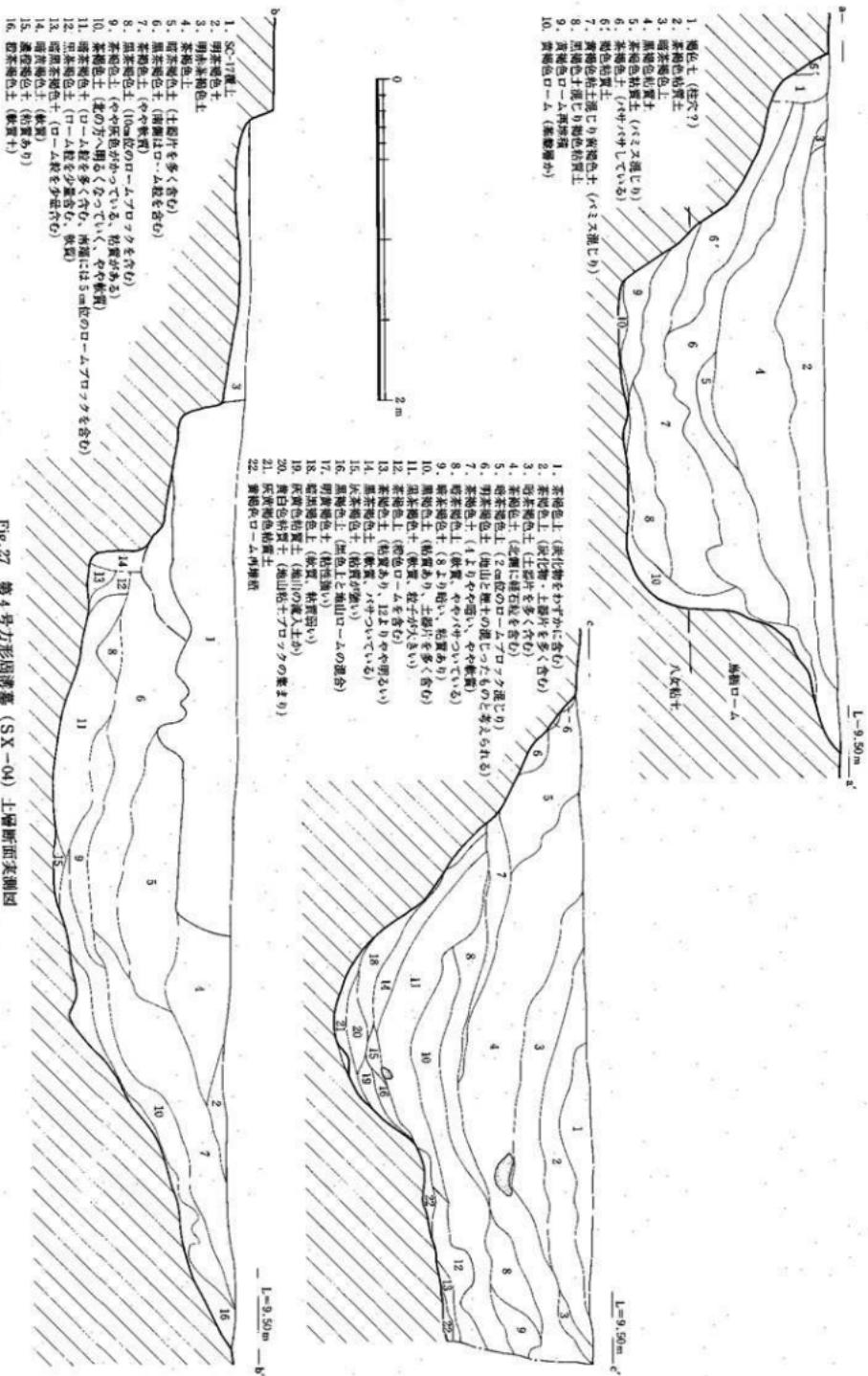


Fig. 27 第4号方形開溝基(SX-04) 土壌断面実測図

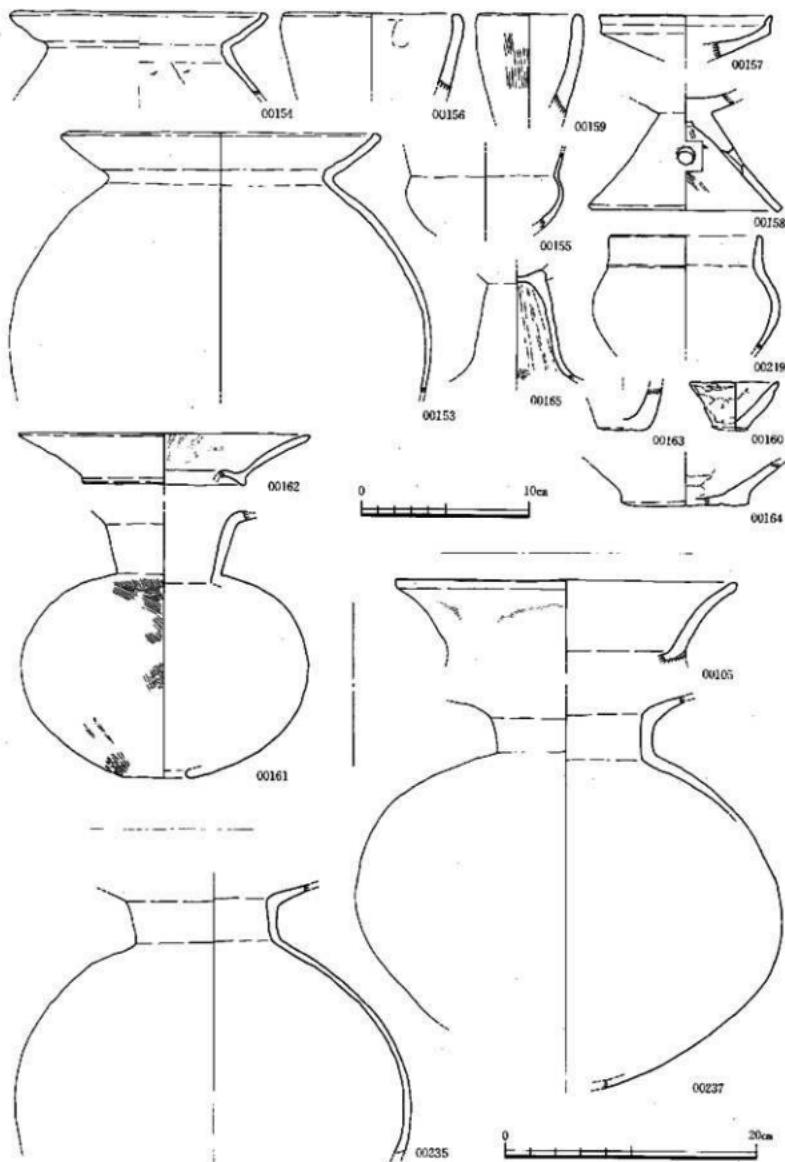


Fig. 28 第4号方形周溝基下層出土土器実測図(1)

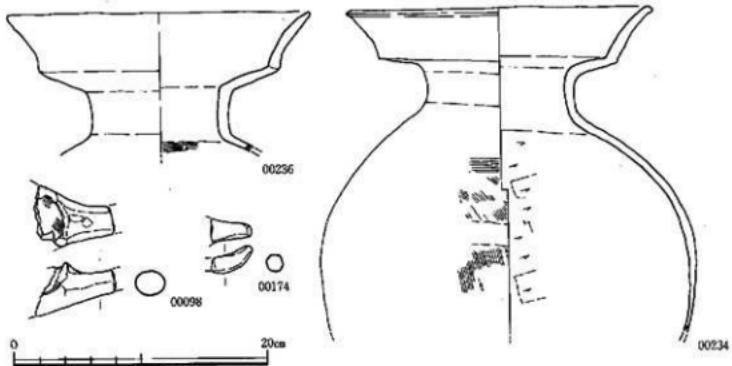


Fig. 29 第4号方形周溝墓下層出土土器実測図(2)

ち砥石で、断面形方形をなし4面を砥面として使用している。1016は凝灰岩製の砥石を転用した凹み石で、砥石として使用されているのは3面で、凹み面は表裏2ヶ所である。石錐の可能性もある。

以上から、本方形周溝墓は幅4m前後の逆台形溝で、内法一辺8m前後を方形に区画し、北側中央に陸橋をもち、石棺を主体部とした可能性が高い方形周溝墓といえ、出土土器から古墳時代初頭の布留式土器期の古段階のものといえよう。

(3) 第13号方形周溝墓(SX-13)と出土遺物(Fig. 30-33・46, PL.7・10)

本方形周溝墓は、調査区南東側で逆L字状をなす溝として検出し、SC-14・24とSB-32を切り、SC-15・SB-35に切られている。本造構は、標高9.8m前後の鳥柄ローム面で暗茶褐色～黒茶褐色土を埋土とする幅4m前後の逆L字状をなす溝として検出した。埋土は上からしまりのある暗茶褐色～黒褐色土・暗茶褐色土・暗灰茶褐色土・暗灰茶褐色～黒茶褐色土・明茶褐色土・黒みがある暗茶褐色土・黒褐色土・ローム再堆積土となり、1m強遺存している。溝の断面形は逆台形を呈し、検出した北側では階段状をなしながら立ち上がっており、陸橋となると考えられ、南側は調査区外へ延びている。第41次調査成果を考慮すると、内法で一辺4m前後の方形を幅4m前後の溝で区画した方形周溝墓で、北側中央に陸橋を設けていたと考えられる。

出土遺物 本方形周溝墓からは、弥生土器とともに、特に下部から古墳時代初頭の比較的まとまりのある遺物が出土した。0245・0266は壺で、0266は球状をなす胴部から屈曲して、内湾ぎみに開きながら立ち上り口縁

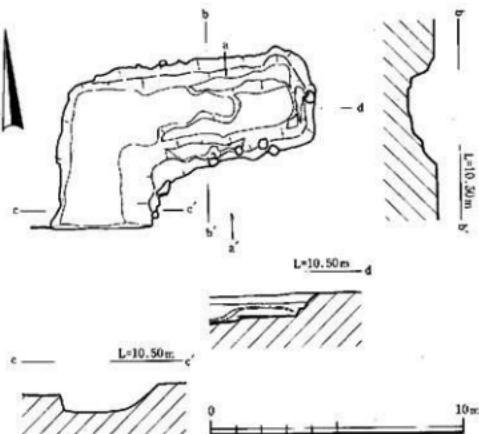


Fig. 30 第13号方形周溝墓(SX-13) 実測図

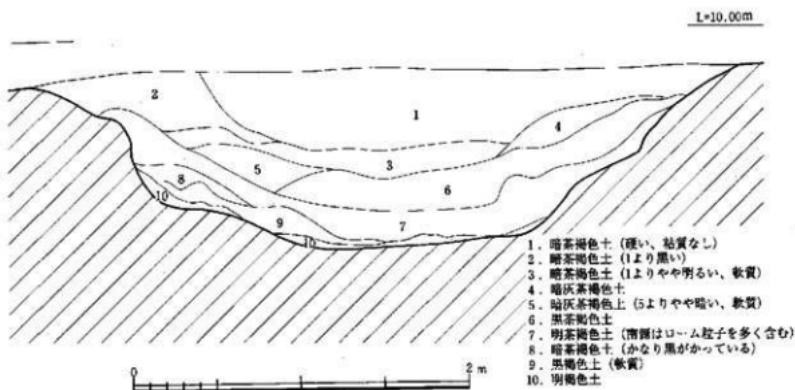


Fig. 31 第13号方形周溝墓 (SX-13) 土層断面実測図

部となるいわゆる布留系の壺である。肩部器表面から口縁部および内面屈曲部までは横ナデ調整を施し、胴部内面はハラケズりが、器表面の肩部には3~5本の沈線を巡らし、器壁は薄く仕上げ、口縁部は丹を塗布している。また、口縁部は一部打ち欠きがあり、打ち欠き部にも丹を塗布している。口径17.7cmを測る。0242は長頸壺か小形丸底壺の口縁と考えられ、0250は口径16cmを測る杯?。0246・0247は小形の鉢で、0247は口径8cm、器高5.5cmを測る。0246・0247・0250は溝上部の出土であり、後期以降のものか。0240・0265は二重口縁壺で、0240は横ナデ調整で仕上げ、0265は球状をなす胴部をもち、底は尖りぎみで不安定である。器表面には難なハケ目調整痕が残っている。ちなみに胴部最大径は33.6cmを測る。0248・0249は器台で、0248は口径12cm、器高15.3cm、底径13.2cmを測り、0249は底径10.6cmを測る。0238は逆L字状口縁をもつ弥生土器壺で、口径32.4cmを測る。0239はT字状口縁をもつ弥生土器の大形壺(壺棺用)で口径46.8cmを測る。0241も弥生土器で壺か。

1051は鋳造鉄斧と考えられ、残存長9cm、側面幅約4.5cm、厚み0.7cmを測る。鋳が進行しているがメタルは残存していると思われる。1052は身部が完存していると思われ、茎部になると考えられるところは鋳が大きな塊状をなしており、木質を巻き込んでいる可能性が高い。残存長6.8cm、幅3cm、身部厚0.4cmを測る。1053は錫の茎部か。

1020・1021は砂岩製の砥石で、1020は石皿状をなし、1021は断面形方形をなし、4面が砥面となっている。1022は扁平な花崗岩砾の縁辺を打ち欠き、隅丸方形になるように整形し、凹み石として使用している。凹み面は表裏の2面で器長9.7cm、幅9.4cm、最大厚2.65cmを測る。

以上から、本方形周溝墓は幅4m前後の逆台

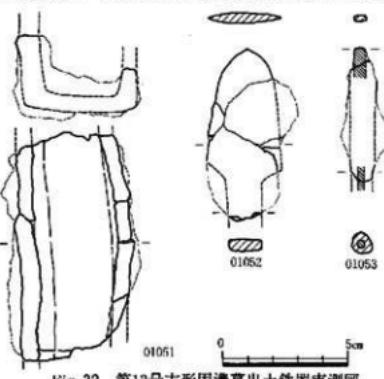


Fig. 32 第13号方形周溝墓出土鐵器実測図

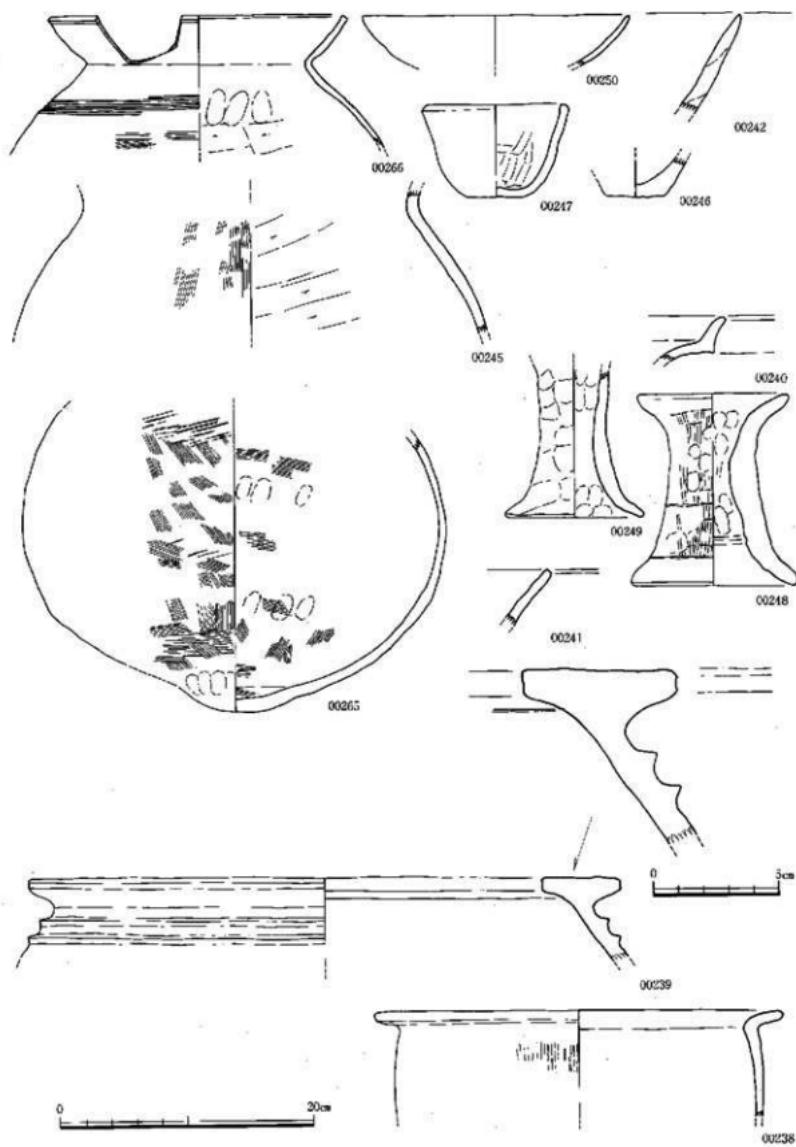


Fig. 33 第13号方形周溝墓下層出土土器実測図

形溝で、内法一辺4m前後の方形を区画した方形周溝墓で、北側中央に陸橋を設けていたと考えられ、出土遺物から古墳時代初頭の布留式土器期の古段階のものといえよう。

6. その他の遺構と出土遺物

その他の遺構としては、土壙や溝と建物としてまとめることができなかった柱穴がある。土壙としたものは、ほとんどのものが建物など各遺構に切られており弥生時代中期から同時代後期にかけてのものと考えられる。溝は後述するが2条並行しており道路となる可能性が高い。柱穴については、弥生時代中期から後期にかけてのもの、古墳時代後期から奈良時代にかけてのもの、12世紀後半から13世紀にかけてのものがあると考えられるが、数個の柱穴から須恵器が出土し、古墳時代後期と確認できるものがあるものの大多数は弥生土器の細片のみの出土であり、時代および時期を限定できるものは少ない。

(1) 土壙(SK)と出土遺物

土壙としては、SK-07~11の5基を検出した。5基のなかには柱穴としたほうが良いものがあり、5基以外にも土壙と考えたほうが良いものもあるが本調査時は土壙あるいは柱穴としており、本調査時の所見をもとに遺構認定した。

第7号土壙(SK-07) (Fig. 34・35, PL.10)

第7号土壙は調査区の北東部に位置し、SX-01に切られており、北側の一部は調査区外に伸びている。長軸1.8m、短軸1.1mを測る平面形長方形を呈し、2段掘りとなり50cm強遺存している。床はやや皿状をなし、長軸90cm前後、短軸70cm前後の隅丸方形をなし、壁は床からほぼ直に立ち上がって

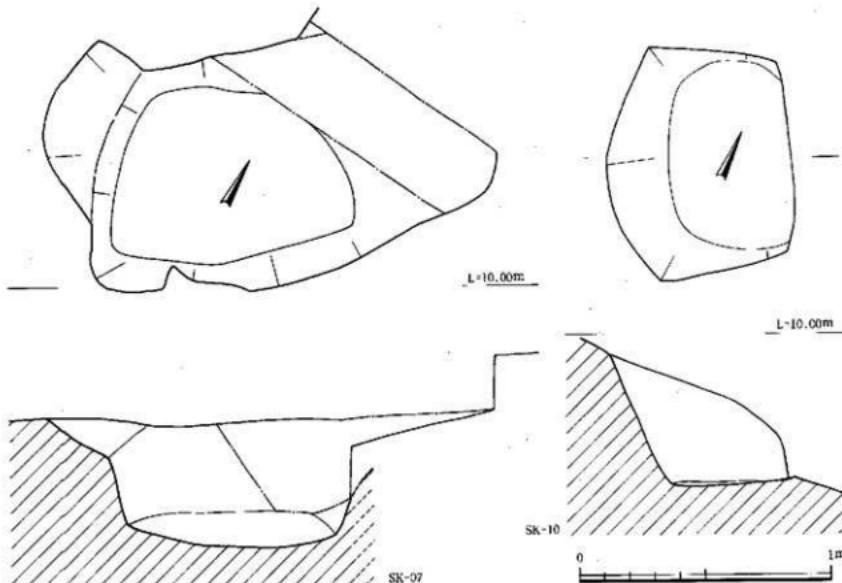


Fig. 34 第7・10号土壙 (SK-07・10) 実測図

いる。

出土遺物 本土壙からは、破片ではあるが比較的まとまった弥生土器が出土した。0299はくの字をなす口縁部をもつ壺で、胴部内外面はハケ目調整を施し、口縁部は横ナデ調整で仕上げている。口径15cmを測る。0300・0301は鉢の底部で、前者は底径12cmを測り、瓶の可能性もある。後者は底径9.4cmを測り、胴部外面は丁寧な縱方向のハケ目調整が施され、内面は指押さえ後軽くナデ調整を加えている。0293・0295・0297・0298は壺で、0293は口径9.6cmを測る袋状口縁壺で、0298は膨らみをもつ胴部から屈曲して直に立上り頸部となり、やや開きぎみに折れれば平坦な口縁をなし、口径10.3cmを測る。0294・0295は胴部が膨らみをもつ平底の壺で、胴部外面はナデ調整を施し、胴部内面は前者は指によるナデあげがみられ、後者は指押さえ痕が残る。また、0295は丹痕が胴部外面に付着しており丹が塗布されていたと考えられる。底径5cm、6.5cmを測る。0297は底径5.7cmを測る丹塗り壺の底部である。0296は口径15cmを測る器台である。

以上、出土土器から本土壙は弥生時代中期末前後のもので、形状が隅丸方形をなしていること、小形の土壙であることなどから他遺構の付設土壙と考えられる。まわりに確定できる柱穴はないが、平面形円形を呈する竪穴住居跡の中央土壙の可能性が高いといえよう。

第8号土壙(SK-08) (Fig.35, PL.10)

本土壙は調査区北側の中央から西寄りに位置し、SB-27に切られている。本土壙は、長軸1.5m前

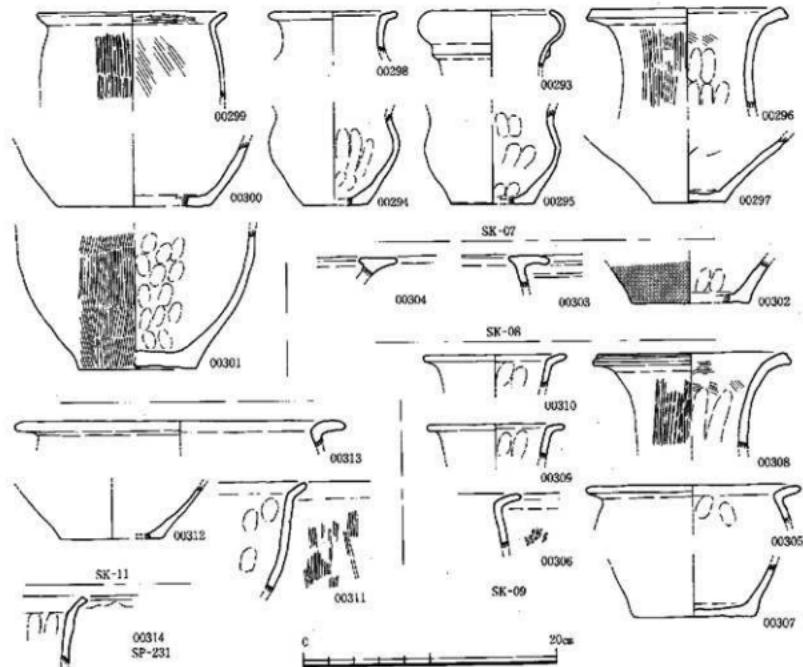


Fig. 35 第7~9・11号土壙および第231号柱穴出土土器実測図

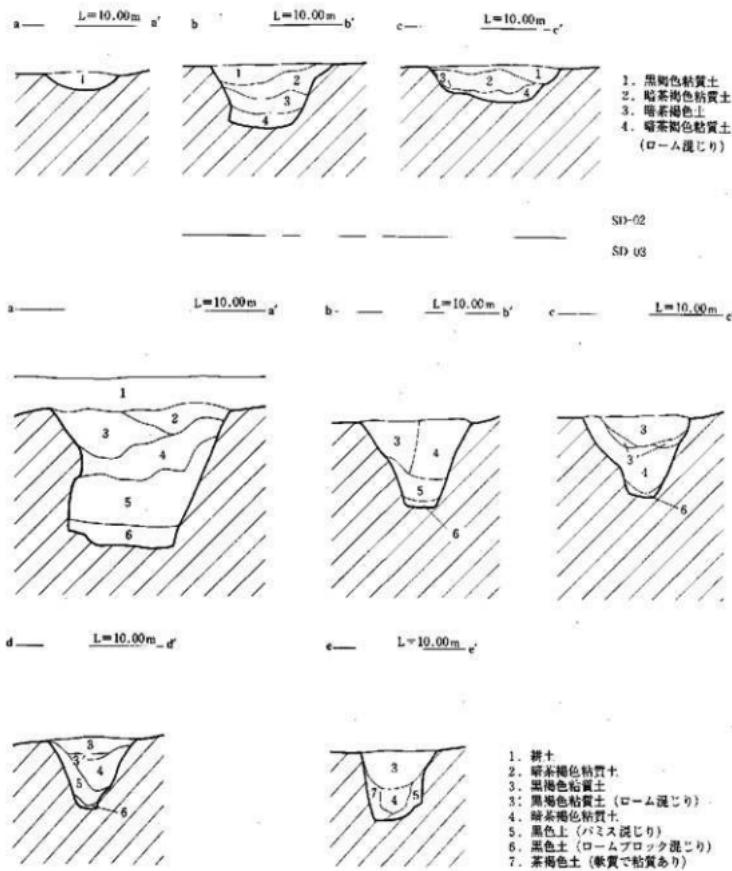


Fig. 36 第2・3号溝 (SD-02・03) 土壌断面実測図

後、短軸1.1m前後を測る平面形長方形を呈し、炭化物・ロームブロックを含む暗茶褐色～黒褐色土や茶灰色土・黒灰色を覆土とし85cm前後遺存している。床はほぼ平坦で、一辺60cm前後の隅丸方形をなし、壁は床から30cm前後ほぼ直に立上り、やや開きながら立ち上がっている。本土壙も第7号土壙と同様の上壙で、本土壙を中心にして柱穴が巡っており、径7m前後を測る平面形円形を呈する竪穴住居跡の中央土壙と考えられる。

出土遺物 本土壙からは、少量の弥生土器が出土した。0302・0303は壺で、前者は底径9.3cmを測る底部、後者は口縁が平坦となる逆L字状をなす口縁部である。0204は圓筒状口縁をなす壺である。

以上から、本土壙は平面形円形を呈する竪穴住居跡の中央土壙で、弥生時代中期後半頃のものといえよう。

第9号土壙(SK-09) (Fig. 35, PL.10)

本土壙は調査区の北西隅で検出した。長軸1.2m、短軸1mを測る平面形不正長方形を呈し、上か

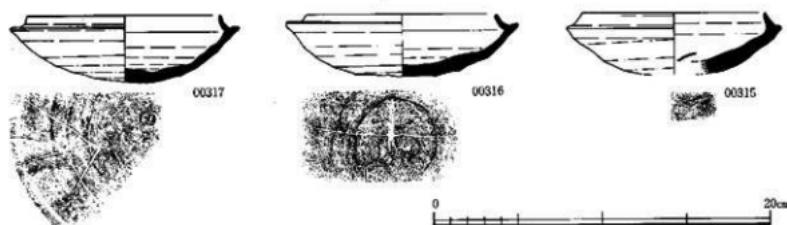


Fig. 37 第259号柱穴出土須恵器実測図

ら弥生土器片・炭化物・ロームブロックを含む黒褐色土・茶褐色土・暗茶褐色土・黒褐色土を覆土とし、2段掘りで45cm前後遺存している。床は一辺45cmを測る隅丸方形を呈する皿状をなし、壁は床から緩やかに開きながら立ち上がっている。本土壙を中心として半円状に柱穴が巡っており、本土壙も径5m前後を測る平面形円形の竪穴住居跡の中央土壙と考えられる。

出土遺物 本土壙からは、破片ではあるが比較的まとまった弥生土器が出土した。0305～0307は壺で、前者2点は逆L字状口縁部をもち、0305は口径16.9cmを測る。0307は底径9.7cmを測る底部である。0309・0310は、膨らみをもつ胴部から屈曲してやや開きながら立ち上り頭部となり、折れて口縁部となる壺で、口径10.9cm、11.3cmを測る。0308は口径15cmを測る器台である。

以上から、本土壙は平面形円形を呈する竪穴住居跡の中央土壙で、出土土器から弥生時代中期後半から中期末のものといえよう。

第10号土壙(SK-10) (Fig. 34, PL.10)

本土壙は調査区北側の中央から西寄りに位置し、SX-04に切られている。長軸0.75m+α、短軸0.95m前後を測る平面形隅丸長方形の土壙で、55cm前後遺存している。床はほぼ平坦で、壁は床から緩やかに開きながら立ち上がっており、第7～9号土壙と同様の形状をもつことから竪穴住居跡の中央土壙と考えられる。弥生時代中期末前後のものか。

第11号土壙(SK-11) (Fig. 35, PL.10)

本土壙は調査区の北西部の調査事務所用ユニットハウス側に位置し、北側は事務所の下へ延びている。本土壙は溝状をなし、幅40cm前後で南北方向に1.5m検出し、25～40cm遺存している。本土壙の南端部が柱穴状をなしていることから、本土壙は掘立柱建物の布掘りの可能性がある。

出土土器 本土壙からは少量の弥生土器が出土した。0312・0313は壺で、前者は底径8cmを測る平底

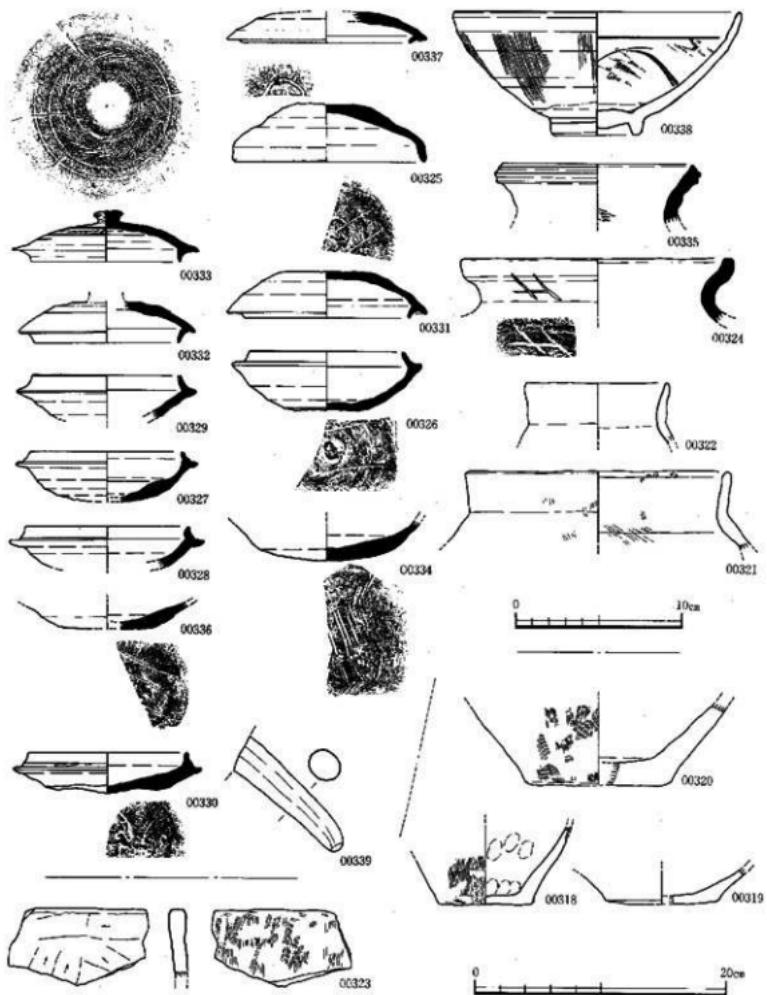


Fig. 38 遺構検出時出土遺物実測図

の底部で、後者は逆し字状をなし、口径26.2cmを測る口縁部である。0311は鉢か。

以上から、本土墳は掘立柱建物の布掘りと考えられ、出土遺物としては弥生土器しかないが、埋土中の遺物であり、時期を決定する遺物であるといえないことから、本土墳は、布掘りをもつ掘立柱建物が北部九州地域で一般的にみられるようになる古墳時代以降のもので、本遺跡での出土遺物から古墳時代後期から奈良時代にかけての間のものといえよう。

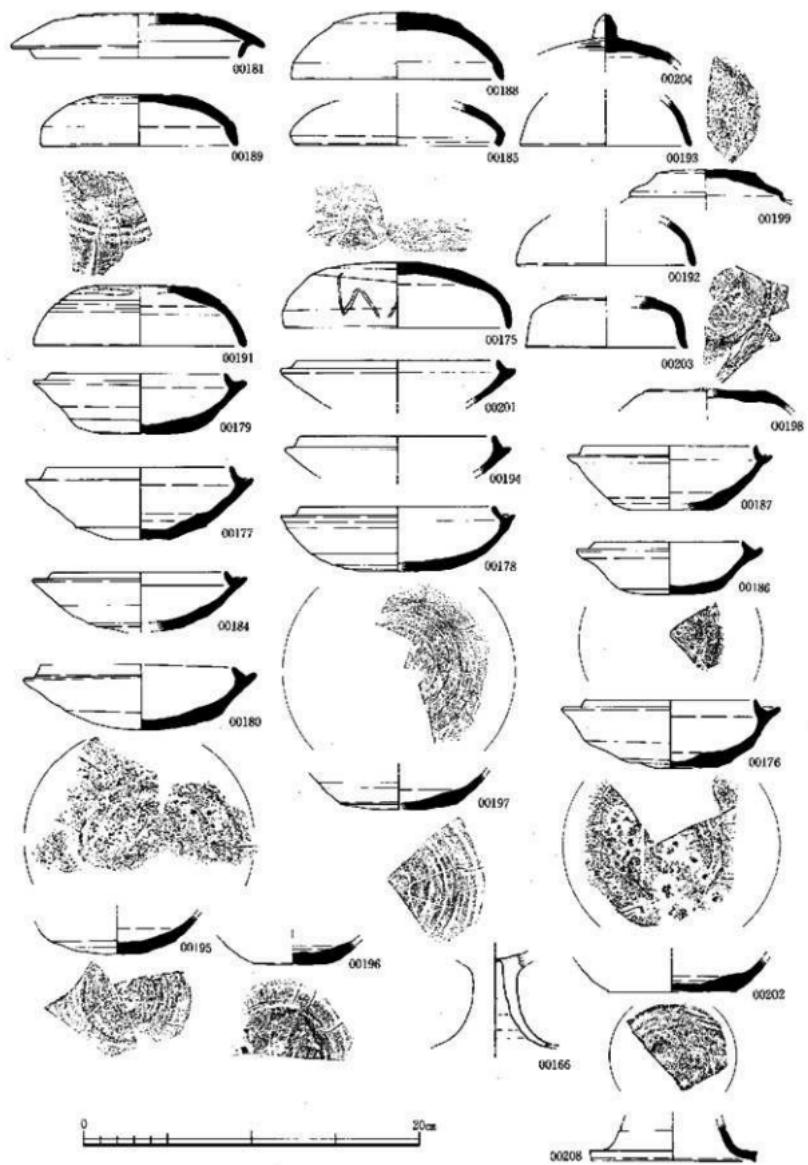


Fig. 39 第4号方形周溝墓上層出土土器実測図(1)

(2) 第2・3号溝(SD-02・03)(Fig.36)

第2・3号溝は、調査区のほぼ中央に位置し、20cm前後の耕作土を除去した鳥栖ロームの面で南北方向に並走する溝として検出した。第2号溝はSC-15・16・24を切り、SB-33に切られている。第3号溝は、第2号溝の西側8m強に位置し、SC-22を切っている。第2号溝は幅40~80cmを測り、上から黒褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色土・ローム混じりの暗茶褐色粘質土を埋土として、横断面形は逆台形をなし10~40cm遺存している。なお、調査区南側では2.2mの間隔で溝が切れ、陸橋状をなしている。第3号溝は幅40~100cmを測り、上から暗茶褐色粘質土・黒褐色粘質土・ローム混じりの黒褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・バミス混じりの黑色土・ロームブロック混じりの黑色土・茶褐色土を埋土とし、横断面形は逆台形を呈し40~80cm遺存している。両溝の溝底は起伏があり、第2号溝は陸橋があるためと考えられるが、流路方向が不明である。しかし、第3号溝は全体的にみると南から北に流路方向をとっている。

両溝はN-2.5°-Wの流路方向をとり、8.25m(溝中心間)の間隔をもち並走しており、溝幅および逆台形の横断面形をもつこと、同様の埋土をもつことなどから一連の溝と考えられることから、両溝は道路の側溝といえよう。両溝とも出土遺物としては、弥生土器の細片と黒曜石製の削片があるのであり、第2号溝が古墳時代後期後半の竪穴住居跡を切っていることから時代・時期を決定できる遺物は出土していない。本道路側溝の時期は、第33次調査において、本調査検出の両溝よりやや西に流路方向をふる中世の溝が検出されており、一連の溝とすれば中世のものといえる。しかし、ここでは側溝の流路方向が磁北に近いこと、第33次調査検出の中世の溝とは流路方向が異なることから別の遺構としてとらえ、古墳時代の竪穴住居跡を切っていること、本調査において7世紀から8世紀にかけての出土遺物が一定量あることなどから、本道路側溝は奈良時代前後のものとしておく。

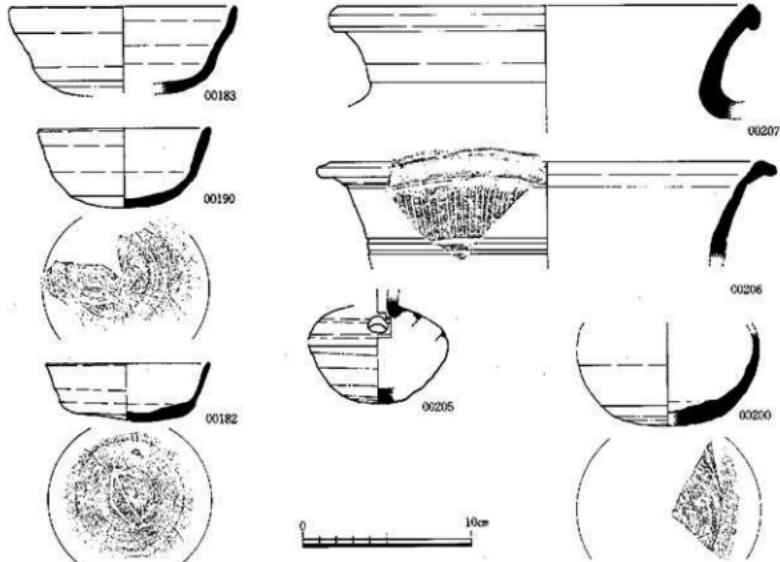


Fig.40 第4号方形周溝墓上層出土土器実測図(2)

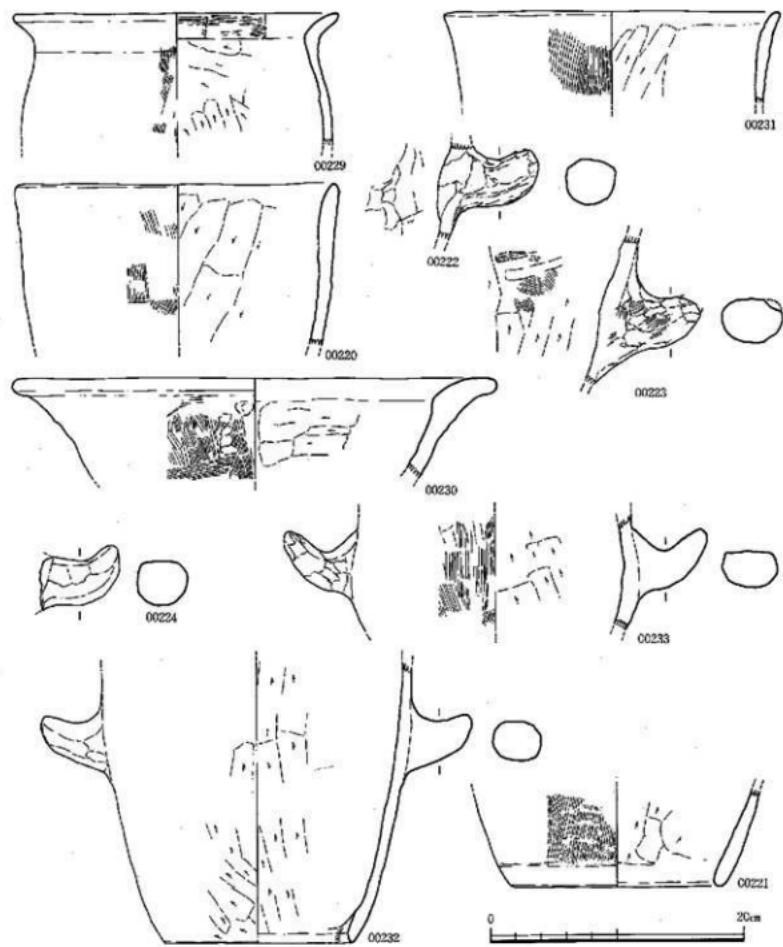


Fig. 41 第4号方形周溝墓上層出土土器実測図(3)

(3) 柱穴出土遺物 (Fig. 35・37, Pl. 10)

柱穴からはたびたび述べたように出土遺物としては弥生土器の細片のみが大半を占めており、圓化できるものはほとんどないが、ここでは比較的まとまった須恵器が出土した第0259号柱穴と第0231号柱穴から出土した弥生土器についてみていく。

第0259号柱穴は、調査区西端の中央から北寄りに位置し、他の柱穴に切られているが、一辺50cm強を測る平面形隅丸方形の掘り方をもつ柱穴で、21cm遺存している。本柱穴は建物廢棄の際、柱が除去され祭祀が行われたと考えられ、2個の完形品を含む須恵器杯が出土した。0315～0317はいずれも外

底にヘラ記号をもち、蓋受けの造りだしをもつ杯身で、外底はヘラ削りで口縁から内面にかけては回転ナデ調整で仕上げられている。口径は11cm、11.4cm、11.4cmを測る。以上から、本柱穴は6世紀後半頃廃棄され、祭祀が行われたといえよう。

第0231号柱穴は調査区北側の中央から西寄りで検出し、SB-27と切り合う形の建物の柱穴と考えられるが、柱穴の直接的な切り合い関係がないため、前後関係はわからない。0314は弥生土器の甕か鉢。

(4) 遺構検出時出土遺物(Fig.38, PL.11)

本調査では、遺構確認時に中世の青磁・土師質土器・滑石製品、古墳時代後期後半から奈良時代にかけての須恵器・土師器、弥生時代の弥生土器・石器、先土器時代の石器などが出土した。ここでは中世の出土遺物からみていくことにする。なお、石器・石製品については後述する。

中世の出土遺物としては、輸入陶磁器と国産陶器および土師器がある。細片が多く2点を図化した。0338は高台付きの青磁碗で、器面は外底は露台のまま残し、脇部外面から口縁にかけては回転させながらヘラで整形し6本前後を単位とする横描文様が、内面は丁寧なナデ整形後横描文様とヘラによる線刻が施され釉がかけられている。口径17cm、器高5.1cm、高台径7.3cmを測る。同安窯系青磁か。0339は土師質土器で、鍋か釜の支脚である。中世の他の出土遺物も12世紀後半から13世紀にかけてのものといえる。

古墳時代から奈良時代にかけての遺物としては、須恵器と土師器がある。0321～0323が土師器で0324～0337は須恵器である。0321・0322は、球状をなす脇部から屈曲してほぼ直に立ち上り口縁となる土師器壺で、口径16cm・8.5cmを測る。0323は瓶か。0325・0331～0333・0337は須恵器の杯蓋で、0325は無返し、他は身受けの造りだしをもち、0333はつまみをもっている。0333は外天井に2～3条単位の沈線を巡らし、沈線間にヘラで斜めに刻み文様帯を作り、L縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げており、外天井にはヘラ記号もみられる。受け部径11cm、器高3cmを測る。0331・0332・0337は受け部径12cm・10.5cm・12cmを測り、0331の外天井にはヘラ記号がみられ、0337は生焼けか。0325は外天井にヘラ記号がみられ、口径11.4cm、器高3.5cmを測る。0326～0330・0334・0336は須恵器杯身で、0326・0330・0334・0336の外底にはヘラ記号がみられる。0326～0330はいずれも蓋受けの造りだしをもち、受け部径11.2cm・10.8cm・11.6cm・10.7cm・11.2cmを測り、0326・0327・0330は器高3.5cm・3cm・2.4cmを測る。0324は生焼け須恵器の甕で、口径16.3cmを測り脇部にヘラ記号がみられる。0335はL縁径11.5cmを測る須恵器壺か。以上のはか、須恵器・土師器の細片があるが、6世紀から7世紀にかけてのものが大半を占め、わずかに8世紀前半頃の須恵器・土師器の杯の破片がみられる。

弥生時代の遺物としては、弥生土器と石器がある。弥生土器は壺・壺・鉢・高杯・器台など各種あるが、いずれも方形周溝基など他の遺構出土の弥生土器と重なるため、図化しなかった。0318・0320は甕、0319は壺の底部である。遺構検出時の出土弥生土器は、弥生時代中期後半から後期初頭のものが大半を占め、わずかに後期中頃から後期後半のものがある。

(5) 方形周溝基上層出土遺物

本調査地の1/2を方形周溝基が占めており、私の本調査時の確認誤りから、堅穴住居跡など方形周溝基より後出の時期の遺構を確認しないまま周溝を掘削したため、多くの古墳時代後期から古代にかけての遺物が混じってしまった。

第4号方形周溝基上層出土遺物(Fig.39～41, PL.12)

須恵器からみていくことにする。0175・0181・0185・0188・0189・0191～0193・0198・0199は杯蓋で、0204は宝珠形のつまみをもち、0181は杯身受けの造りだしをもち、0175・0185・0188・0189・01

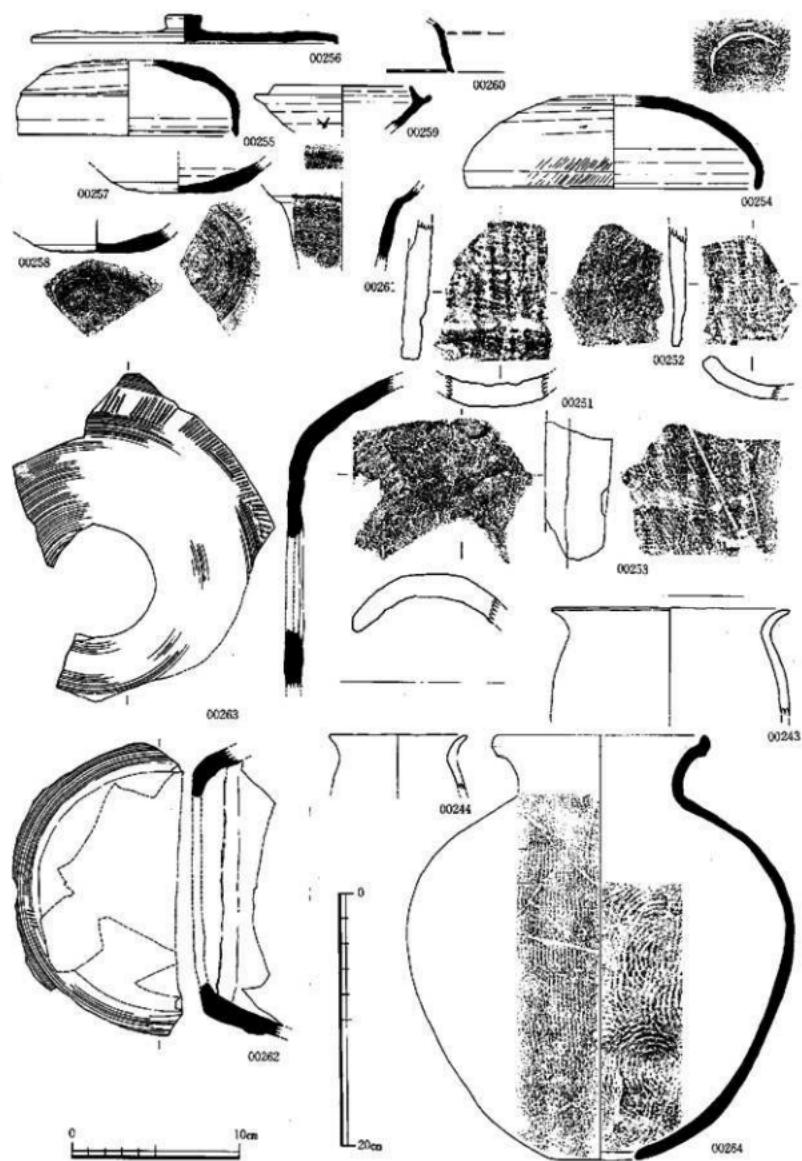


Fig.42 第13号方形周溝墓上層出土器實測圖

91~0193は無返しの口縁をもち、0175・0191・0198・0199の器表にはヘラ記号がみられる。0175・0188・0189・0191は口径13.4cm・12.6cm・11.6cm・12.6cm、器高3.9cm・4cm・3cm・3.6cmを測る。0181は受け部径15cmを測る。0203は口径9.6cmを測り、壺の蓋か。0176~0180・0184・0186・0187・0194~0197・0201・0202は杯身で、0176・0178・0180・0186・0195~0197・0202はヘラ記号がみられ、0195~0197・0202以外は杯蓋受けの造りだしをもっており、0194は生焼けの須恵器である。0176~0180・0186・0187は受け部径13cm・13.6cm・14cm・12.6cm・13.6cm・11cm強・10.4cm、器高4cm・4.3cm・3.8cm・3.6cm・3.9cm・3.2cm・3.9cmを測る。0182は蓋受け部の造りだしをもたない無高台の杯で、外底にヘラ記号をもち口径9.8cm、器高3.5cmを測る。0166は土師器、0208は須恵器の高杯の脚部である。0183・0190は須恵器の盤で、後者の外底にはヘラ記号がみられ、口径13.3cm・10.9cmを測り、後者の器高は4.8cm弱を測る。0200・0205は須恵器の壺で、胴部最大径11cm・8.2cmを測る。0206・0207は口径27.4cm・25.8cmを測る須恵器の壺である。

つぎに出土土師器をみていく。0229は、膨らみをもつ胴部から屈曲して開き口縁となる壺で、口径25.6cmを測る。0230も壺か。0220・0221・0231・0232は瓶で、0220・0231は口径25.6cm・26.6cmを測り、0221・0232は底径17cm・15.2cmを測る。以上のはか、壺か瓶または移動式壺の把手が出土している。

本周溝から出土した6世紀後半の須恵器・土師器の大半は、第17号竪穴住居跡のところで出土しており、同住居跡の遺物といえよう。

第13号方形周溝墓上層出土遺物(Fig.42, PL.13)

まず須恵器からみていくことにする。0254~0256・0260は蓋で、0254・0256は無返しの口縁をもち、0255・0256は杯身受けの造りだしをもつ杯蓋である。0256は外天井の中央につまみをもち、口径18.2cm、器高1.7cmを測る。0254は口径17.2cm、器高5.5cmを測り、ヘラ記号がみられる。0255・0260は本調査出土の須恵器としてはもっとも古く、前者は口径13cm、器高4.5cmを測る。0257~0259はヘラ記号をもつ杯身で、0259は蓋受けの造りだしをもち、受け部径10.6cmを測る。0261は壺の頸部片。0262は提瓶、0263は横瓶か。0264は土師質須恵器の壺で、胴部内面は同心円状をなす叩きで、胴部外面は平行叩きが残り、頸部から口縁部にかけては摩耗している。口径16.5cm、器高33.9cmを測る。

0243・0244は土師器の壺で、口径19cm、11cmを測る。0251~0253は瓦類で、前者2点は平瓦、後者は丸瓦である。

本周溝出土の遺物から遺構として検出できなかったが、6世紀前半から同中頃と7世紀から奈良時代の遺構の存在が予想できる。

(6) 第4号方形周溝墓出土弥生土器(Fig.43~45, PL.14・15)

本方形周溝墓は、本調査地の西半分を占めており、SE-19・SK-10をはじめ、周溝の南側では井戸を切った痕跡もあり、多くの弥生時代の遺構を切っていると考えられると同時に、6世紀後半後に本地周辺を集落空間とするために整地された可能性があり、本周溝からは本来の遺構の時期を示す古式土師器より多い多量の弥生土器が出土した。

0095・0096・0215は蓋である。0106~0128・0130~0134・0136~0143・0146~0152・0167~0169・0173・0209~0212・0216・0225~0227は壺で、0110・0111・0120などのように口縁が平坦になる逆L字状口縁部をもつもの、0113・0117のようにくの字状をなす口縁部をもつもの、0112のように口縁部が内傾する逆L字状口縁部をもつもの、0106~0109のようにくの字状をなす口縁部をもつ大形の壺棺用の壺などさまざまの壺が出土した。底部はやや上げ底ぎみになるものがあるものの、ほとんどが平底の壺である。口径でみると、0117がもっとも最小で17.8cmを測り、20cm前後のもの、30cm前後のもの

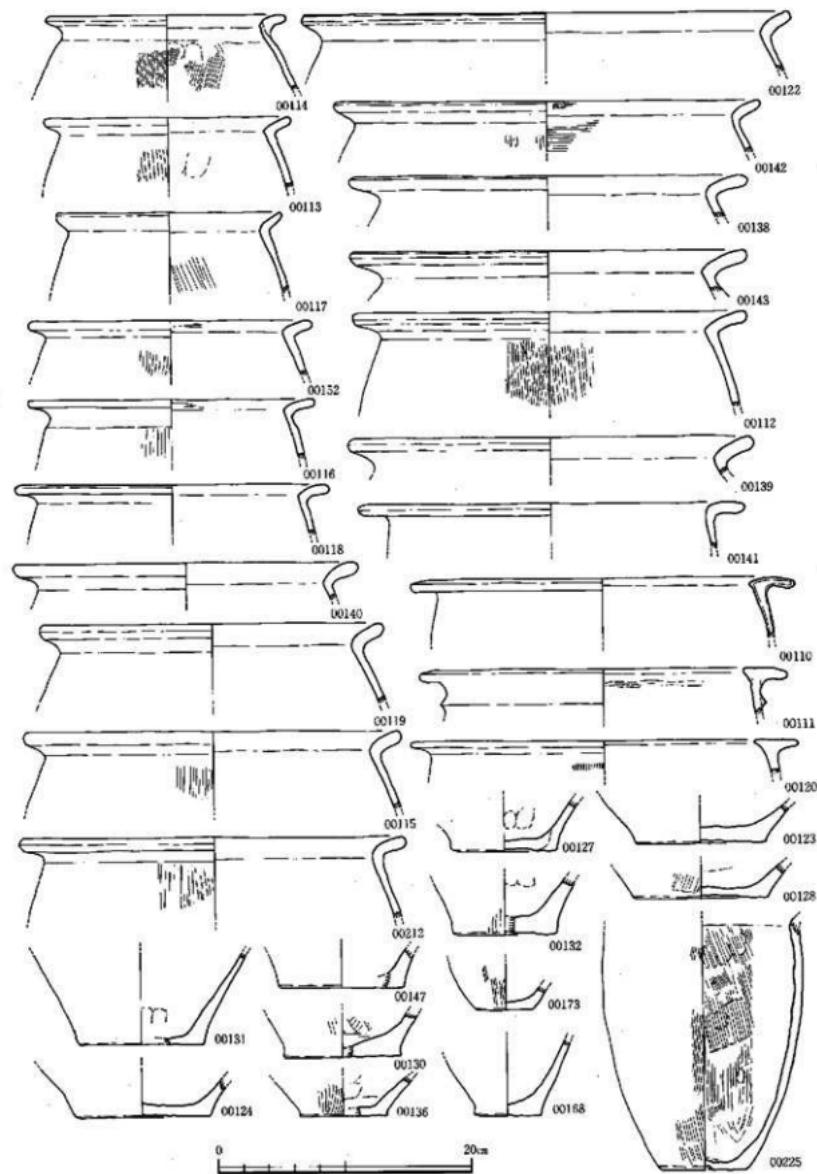


Fig. 43 第4号方形周溝墓出土弥生土器実測図(1)

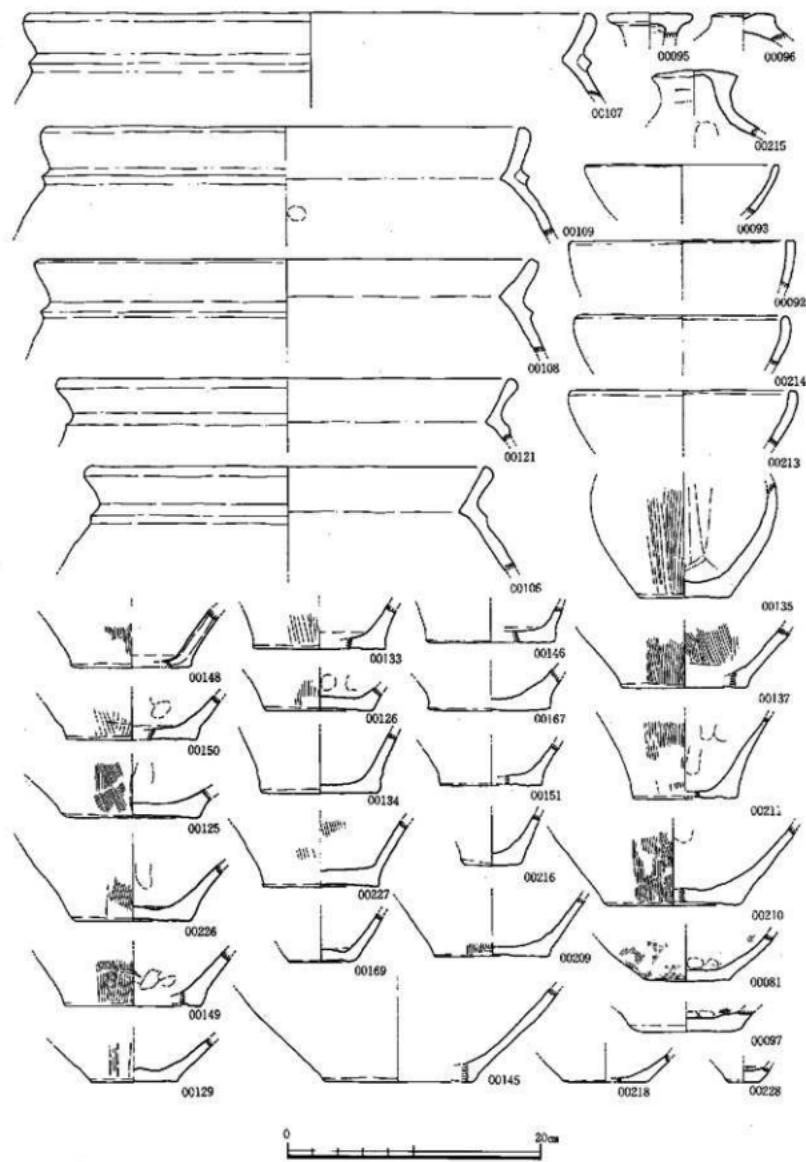


Fig.44 第4号方形周溝墓出土弥生上器実測図(2)

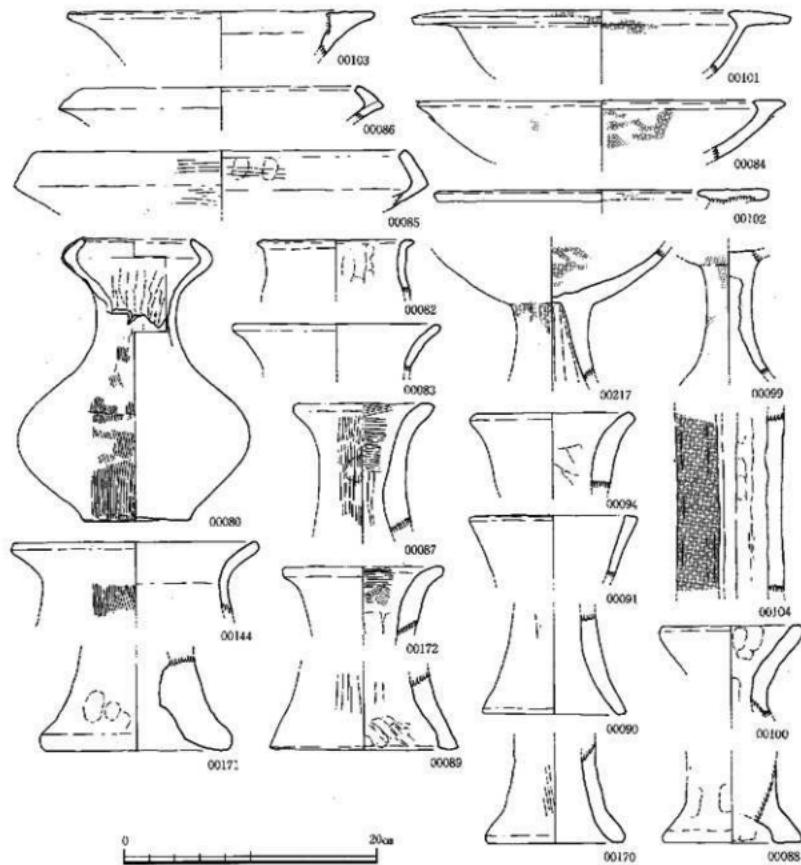


Fig. 45 第4号方形窯溝墓出土・弥生土器実測図(3)

があり、0122が日常煮炊き用の壺としては口径38.8cmともっとも大きく、壺柄用の壺は口径32.6~45.6cmを測る。また、0123・0124などのように丹塗りの壺も多い。92・93・0135・0213・0214は鉢で、92は口縁端がコの字状をなし口径18.2cmを測り、93は口縁端は丸くおさまり口径15.6cmを測り、0213・0214は口縁部がやや内傾ぎみとなり口径18.4cm・17.4cmを測る。0315は壺の可能性もある。80~83・85・86・97・0129・0145・0218は壺で、80は袋状口縁壺の完形品で、口縁部を打ち欠いており、井戸祭祀に使用されたものと考えられ、SE-19に帰属する遺物の可能性が高い。口径9cm、器高22.3cmを測る。85・86は複合口縁壺で、口径29cm・21.8cmを測る。82は口径12.4cmを測る。84・99・0101~0103・0217は高杯で、99・0217は軸部、84・0101~0103は鈍状口縁部をもつ杯部で、口径29.2cm・30cm・26.6cm・24.2cmを測り、高杯はいずれも丹が塗布されている。87~91・94・0100・0104・0170・0172は器台で、0104は丹塗りの筒形器台である。87・91・94・0172の口径は11.3cm・13.4cm・13cm

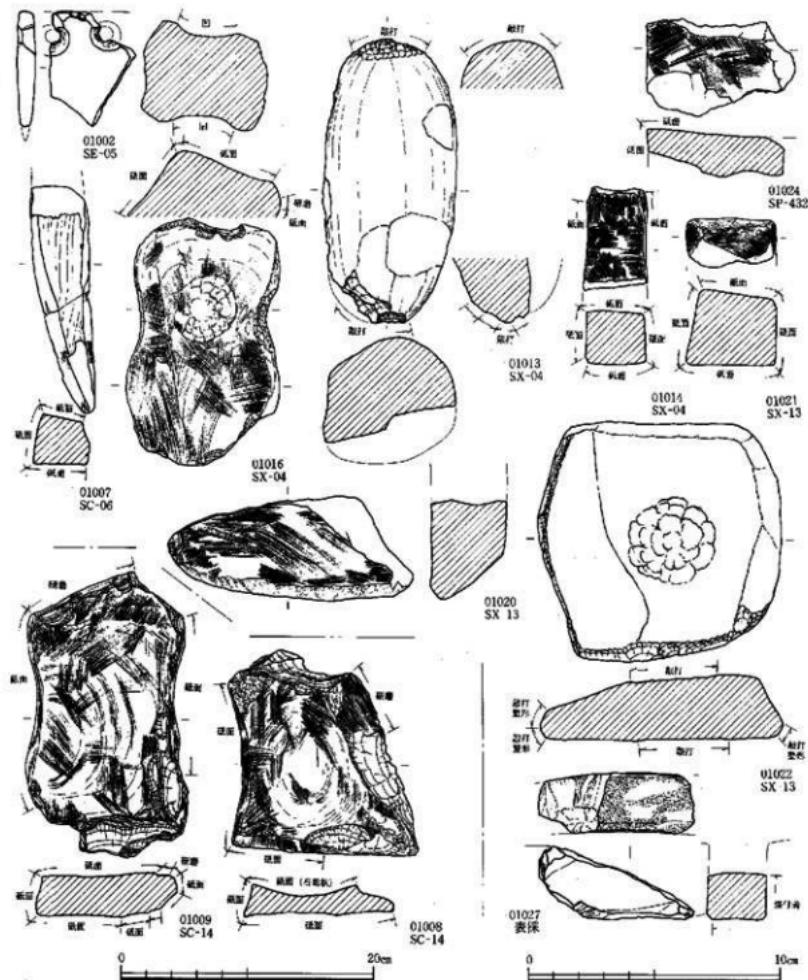


Fig.46 出土石器実測図(1)

・12.8cmを測り、88~90・0170の底径は11cm・15cm・11.4cm・11cmを測る。0171は支脚か。

以上、本方形周溝墓出土弥生土器は、弥生時代中期後半から後期初頭に位置づけることができるものが大半を占め、少量後期中頃から後期後半のものがみられる。

(7) 本調査出土石器および石製品 (Fig.46・47, PI.16)

ここでは、遺構検出時および他時期の遺構から出土した石器・石製品についてみていくことにする。1027は滑石製品で、片側に煤が付着しており、古代から中世にかけての石鍋の蓋と思われる。1001・

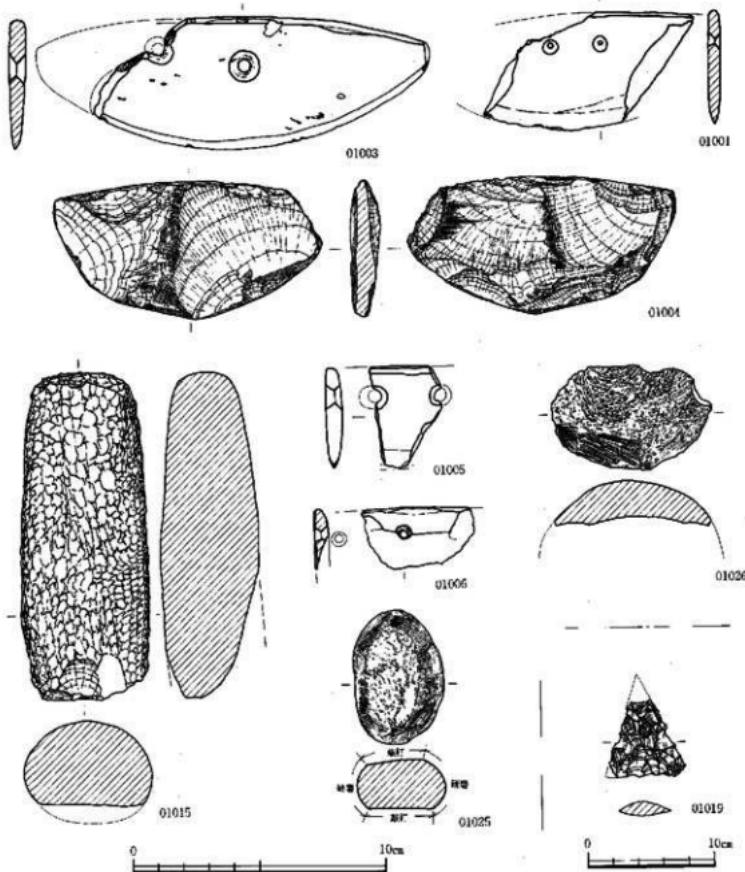


Fig. 47 出土石器実測図(2)

1003・1005・1006は石製穂摘み具で、1003・1006は小豆色凝灰岩ホルンフェルスを、1001・1005は安山岩質凝灰岩製ホルンフェルスを用材としている。1001・1003は杏仁形を呈し、手縄縛固定用穿孔中心間は2cm弱・3.5cmを、1005も2cm弱を測る。1003は器長5.2cm、幅13.4cm、最大厚0.7cmを測る。1004は安山岩質凝灰岩製の石製穂摘み具の未製品で、剥離加工によって杏仁形に整形し、片面の一部は研磨も加えている。1015は安山岩？製の大型蛤刃石斧未製品で、敲打によって頭部および断面形円形の体部を造りだしている。器長13cm+α、幅5.1cmを測る。1019は黒曜石製の石鎌、1025は磨石、1026は敲打用の工具である敲石である。

1027を除く石器および石製品は、1019が弥生時代前期末前後と考えられるが、ほかは弥生時代中期前半から中期後半の古段階でおさまるものといえよう。

7. まとめ

那珂遺跡群は、那珂川と御笠川の中流域から下流域の両河川間に発達している中位・低位段丘北端の通称那珂・比恵丘陵とよばれている中位段丘上に所在している。本調査地は、那珂遺跡群の南部にあたり、現在標高10mを測る丘陵尾根上に位置している。

那珂遺跡群が所在している那珂丘陵は、標高10~13mの丘陵尾根の高所が劍塚古墳が所在している竹下三丁目、那珂八幡古墳が所在している那珂一丁目と本調査地周辺などと少なくとも北・中央・南の3ヶ所があり、本調査地は南の丘陵尾根高所にあたる。

本調査は1,030m²の調査であり、広い面積の調査を行ったわけではないが、弥生時代中期後半から弥生時代後期にかけての集落、古墳時代初頭の方形周溝墓、古墳時代後期後半の集落、古代の道路の検出をし多大な成果を得た。また、出土遺物としては、先土器時代の石器、弥生時代中期から後期の弥生土器・石器、古墳時代初頭の古式土師器・鉄器、古墳時代後期の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器・土師器、中世の輸入陶磁器・国産陶器・土師器などがあり、まとまりをもった貴重な資料を得ることができたといえよう。

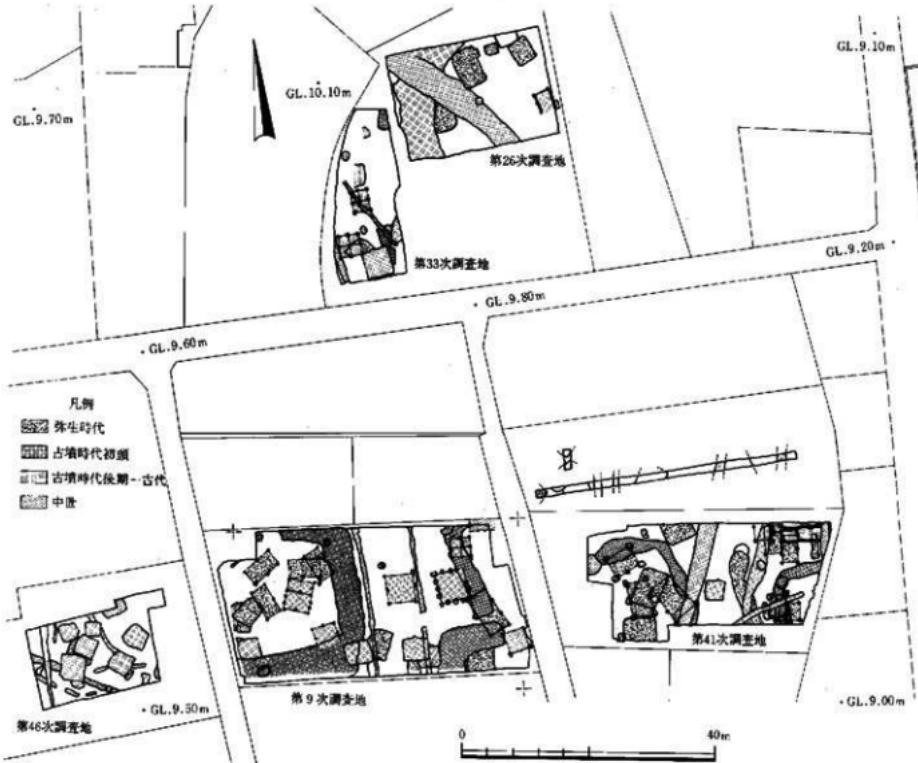


Fig. 48 第9次調査地および周辺調査地

本調査検出の弥生時代の遺構は、平面形長方形をなす竪穴住居跡 5 棟、掘立柱建物 5 棟、井戸 2 基、土壙 4 基である。弥生時代の集落は、平面形隅丸長方形をなす竪穴住居跡と 1×2 間を基調とする掘立柱建物と井戸・土壙からなり、土壙が平面形円形を呈する竪穴住居跡の中央土壙の可能性があることを考慮すると、平面形円形をなす竪穴住居跡も集落を構成していたといえよう。また、本調査地周辺地の調査成果および本調査出土遺物を加味すると、本調査地周辺は弥生時代中期後半から後期後半にかけて集落が営まれていたといえよう。

古墳時代初頭の遺構は、方形周溝墓 3 基を検出した。いずれも古墳時代初頭の布留式土器期古段階の時期のものであり、主体部は検出できなかったが、赤色顔料が付着した板石が周溝から出土したことから石棺を主体部としていた可能性が高いといえよう。周辺調査成果および地形的条件を加味すると、本調査地周辺では現在 5 基の方形周溝墓が検出されており、南側の那珂丘陵尾根上にあたる本調査地周辺には 10 基前後の方形周溝墓が所在していたと考えられる。那珂遺跡群でみていくと、北側の丘陵尾根上には 6 世紀後半の劍塚古墳・剣塚 2 号墳が所在し、中央の丘陵尾根上には 4 世紀の那珂八幡古墳や方形周溝墓群が所在しており、那珂遺跡群内には、まだ未調査の丘陵尾根の高所があり、那珂遺跡群の古墳時代初頭の様相を把握するうえで参考となろう。

古墳時代後期後半の遺構としては、平面形隅丸長方形をなす竪穴住居跡 4 棟と奈良時代までの時期幅をとると掘立柱建物 7 棟がある。また、古代の遺構としては、N-2.5°-W の主軸方位をとる 8m 前後の道路がある。6 世紀後半頃、比恵遺跡群では那ノ津官家と考えられる官衙的性格をもつ掘立柱建物群が所在するほか、那珂遺跡群でも官衙的性格をもつ掘立柱建物群の所在が確認されている。この時期に那珂・比恵丘陵では、古墳が破壊された可能性が高く、竪穴住居跡・掘立柱建物など遺構が急増する時期でもあり、那珂・比恵丘陵の大造成が行われた可能性が高い。本調査地の方形周溝墓もこの時期に破壊されたと考えられ、本調査地周辺も例外ではなさそうである。古代の道路については、北側・南側隣接地の調査を待ちたい。

第4章 第57次調査

1. 調査の経緯・経過と調査組織

福岡市教育委員会は博多区那珂にある那珂遺跡を重点地区として、すべての開発のチェックを行い、その内遺跡が破壊される部分については発掘調査を実施している。平成8年4月10日山根清人氏より福岡市博多区竹下5丁目354における埋蔵文化財事前審査願が提出され、同年6月12日に試掘を行った結果、遺構・遺物が発見された。建築物は個人専用住宅であったが、深さ1mの土壌改良を行ったため建物が建設される約100m²について発掘調査を実施した。ただし、土壌改良を行わない深さ1m以下については、申請者との協議の末、掘削を行わないこととなった。

調査は平成8年6月24日から7月2日まで行った。調査期間中は梅雨の最盛期で、ほぼ連日雨の中調査を行った。後述するとおり、深さ1mを越える溝が検出されたが、その下の掘削は行わなかった。

調査組織

申請者 山根清人

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課



Fig. 49 第57次調査調査区位置図

平成8年度（発掘調査） 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝
 第2係長 山口譲治
 調査担当 米倉秀紀・宮井善朗 庶務担当 内野保基
 平成10年度（報告） 埋蔵文化財課長 柳田純孝
 第2係長 山口譲治 庶務担当 木原淳二

2. 調査区の位置

本調査区はJR竹下駅の南東側約300m、那珂遺跡の南西端近くに位置する。調査地内の現況はほぼ平坦である。遺構検出面は橙色ロームで、標高約8mを測る。調査区のすぐ西側には小川が流れ、この小川の西を走る道路から西側は、台地の外になると考えられている。調査地の北側は一段下がっており、その比高差約1mを測る。

周辺の調査例は少なく、北側150mの第23次調査では弥生時代の環濠が検出され、大量の祭祀土器などとともに銅剣の鋳型が出土している。また7世紀代の大型総柱建物群や7世紀前半代の神ノ前窯系の瓦も出土するなど大きな成果があがっている。東側150mでは第22次調査が行われ、やはり神ノ前窯系の瓦が出土している。南東側100mの第37次調査では突帯文期の2重環濠が検出されている。このように当調査区周辺は、那珂遺跡の縁辺部ではあるが、重要遺構・遺物が発見されている。

注 ①「那珂遺跡4」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第254集 1991・同290集 1992
 ②「那珂遺跡3」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第253集 1991
 ③「那珂11」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第366集 1994

3. 遺構と遺物

検出した遺構は弥生時代の円形住居址1軒(SC008)、古墳時代の方形住居址3軒(SC001-2-5)、古代の大溝1条(SD003)、江戸時代後半以降の溝2条(SD004-6)などである。このうち古代の大溝については、前述のとおり、原因者と深さ1m以上掘削しない協定であったため、1m以上の深さの掘削は行えなかった。

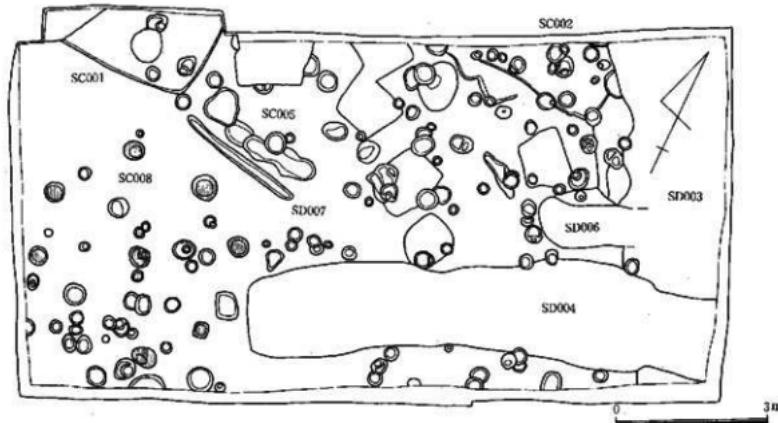


Fig.50 第57次調査遺構配置図

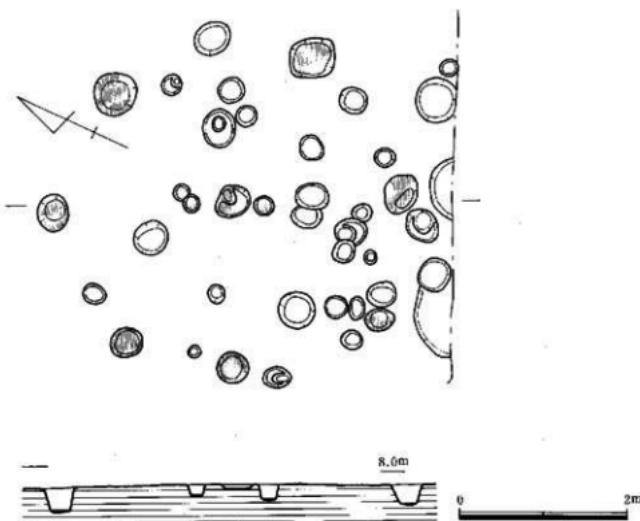


Fig. 51 SC008

① 円形竪穴住居址

SC008 (Fig. 50)

調査区西端近くで検出した。調査中は確認できず、調査終了後に岡上で把握した。ピットの深さ等から考えて、柱穴は7穴と考えられ、住居の推定径6m弱前後を測るものと考えられる。柱径32~50cm、深さ27~35cmを測る。住居の中央には径45cm、深さ8cmのピットがある。その南北両側に径約20cm、深さ15cm前後のピットがあることから、小さいながらも中央上坑と考えられよう。各柱間の距離は1.5~1.8mを測るが、東側柱間のみ2.2mを測る。各ピット内から弥生時代中期の土器片が約20点出土したが、実測できたのは2点である。

出土遺物 (Fig. 52, PL. 18)

6・8がこの住居の柱の可能性のあるピットから出土した土器である。6は鉢で、口径11.1cm、器高7.7cmを測る。全面ナデ調整である。胎土は1mm以下の石英粒・白色粒・赤色粒を含んでいる。8は甕の口縁部片で、いわゆる鋸先口縁である。外面にはタテハケ、内面にはていねいなナデ調整を施している。胎土には細かい金雲母粒や石英粒を含んでいる。

② 方形竪穴住居址

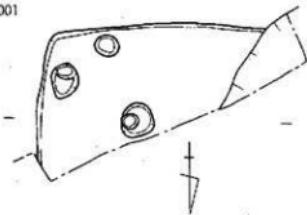
SC001 (Fig. 51, PL. 17)

調査区北西隅で検出し、大部分は調査区外へ続いている。壁面の残存高約10cmを測る。住居の全形や柱穴などは住居の検出部分が少ないので不明である。また住居内に搅乱があり、出土遺物も多くない。残存部分の床は、いわゆる貼り床で、10cm程貼っている。出土遺物は土師器片が少量出土したのみで、実測可能なものはない。

SC002 (Fig. 51, PL. 17)

調査区東側で検出し、東側をSD003に切られ、北側は調査区外へと続いている。確認部分の長さ約

SC001



SC002

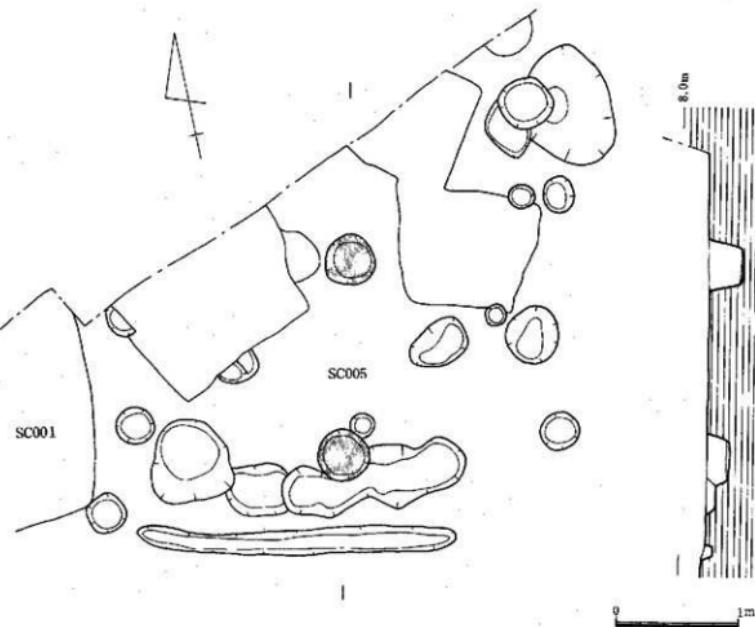
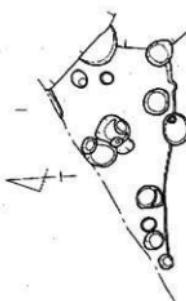


Fig. 52 SC001 • 002 • 005

3 m、壁の残存高8cmを測る。全体の形状や柱穴等は明瞭ではない。床面はいわゆる貼り床で作られている。土師器片が少量出土した。

出土遺物(Fig.52, PL.18)

2はいわゆる小形丸底壺である。口縁端部を欠失する。推定の口径約7cm、器高約7cmを測る。頸部以下以外にタテもしくはナナメのハケメを、内面にヘラケズリを施している。石英・白色粒などを胎中に含んでいる。

SC005(Fig.51, PL.17)

壁ではなく、堅穴住居と確認できたわけではないが、SC001の東側で検出した小さな溝(SD007)が壁溝で、その北側のピット2つが土柱穴と見ることができるので、ここで取り上げた。その場合、溝のすぐ北側にある凹凸は、住居を作る際に掘り下げた部分で、その上に床を貼ったものと考えられ、この凹凸の検出面で、文様入りの石製紡錘車が出土している。2穴の径は40cmと42cm、深さ17cmと27cmを測る。住居の推定長は4m前後を測るものと思われる。明確に堅穴住居と確認したわけではないので、出土遺物は紡錘車以外はわからない。

出土遺物(Fig.52, PL.18)

1は石製の紡錘車である。石材は滑石にやや近いが鑑定を受けていないので不明である。前述のSD007の北側にある貼り床面から出土した。上面には中心に向かって放射状に伸びる弧線の間を短線で埋めている。弧線は9本、その間に埋める短線は3~4本である。一見直弧文のような形態を呈している。側面には上下に2本の横線を引き、その間に短い斜線を30本引いている。文様はいずれも線刻で、太さ1~2mm前後である。線の断面形は薬研彫り状で、断面三角形の施文具を使用している。上面の直径3.8cm、下面の直径4.8cm、厚さ1.3cmを測る。

(3) 溝

SD003(Fig.49, PL.18)

調査区東端を調査区と平行に南北方向に走る。東側立ち上がりは調査区外にあり、幅2m以上を測

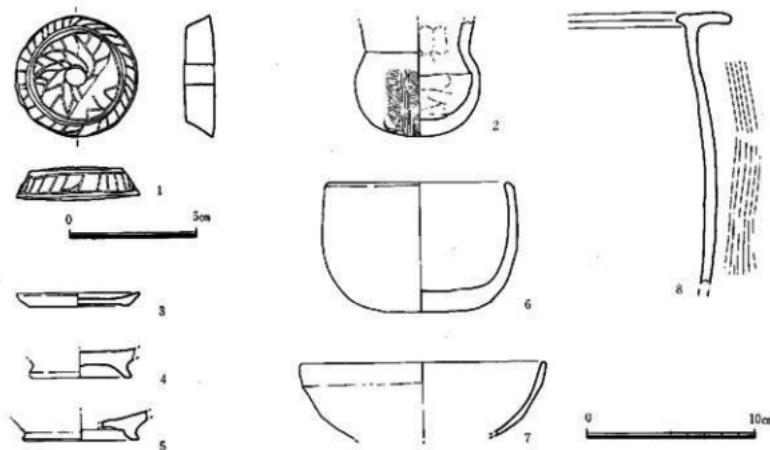


Fig. 53 出土遺物

る。また現地表面から1m、遺構面から30cmまで掘削したが、前述のとおりその下は掘削できず、深さ・溝の断面形・埋土の状況などの詳細な情報は不明である。遺物は陶磁器・須恵器・土師器・瓦が出土したが、ほとんどが細片で、実測できたのは2点である。陶磁器は白磁の小片で古代末頃。瓦は土師質で裏面に布目、外面に繩目叩きが施されている。糸切りの土師器皿も出土している。

出土遺物(Fig.52, PL.18)

4はA類黒色土器碗である。高台径6cmを測る。高台部からそのまま体部に立ち上がる。3は土師器の皿で、口径7.2cm、器高0.8cmを測る。底部糸切りのようだが磨滅のため明瞭ではない。

SD004(Fig.49, PL.18)

江戸時代後半以降の溝と思われる。幅2mを測り、深さ20~30cmと浅い。遺物は近世後期以降と思われる陶磁器片が少量出土した。

SD006(Fig.49, PL.18)

江戸時代後半以降の溝と思われる。幅0.8m、深さ20cmを測る。遺物は近世後期以降と思われる陶磁器片が少量出土した。

④ その他の出土遺物

5は土師器の塊の高台部で、高台径6.8cmを測る。遺構面の出土。7はSC008南側のピットから出土した。浅鉢形の弥生土器である。口径14.3cm、推定器高約5cmを測る。全面ナデで仕上げている。

4.まとめ

本調査区は調査面積が狭い中で、住居址4軒・大溝1条という遺構群を検出したが、それらは調査区外へ続いている、残存状況が悪いなど、遺構群の情報はあまり多くない。各住居を見ると、円形のSC008は柱穴から弥生時代中期後半の土器群が出土しており、この時期と考えられよう。方形住居址からは極めて出土遺物が少ないが、SC001・SC002からは須恵器の出土をみない。SC002から小型丸底壺が出土しており、ともに古墳時代前期と考えて大過ないであろう。SC005は住居址としても床面のみの検出のため、明確な遺物は石製の文様入り紡錘車のみである。この紡錘車はいわゆる円錐形の石製紡錘車で、その形は通常のもので、線刻が入った例も多くはないものの、見かけないものではない。ただ時間不足のため、他の出土例をあまり調べることができなかつたが、今回出土したような一見弧文を思わせる文様は、書きした範囲内では、福岡市近隣ではみられない。

SD003はおそらく幅3m以上、深さ1m以上になる大きな溝である。上層のみの、検出面からの深さ30cmのみの調査で、溝の開削時期を決めるべき下層を調査できなかつたため、溝の時期は明瞭ではない。上層からは土師器皿や陶磁器類の細片が出土している。

第22次調査では8世紀中頃の須恵器を出土する東西方向の溝(SD20)がある。この溝は報告書に明瞭な記述がないものの、土層断面を見ると深さは50cmと深いが、幅3m前後を測る。この溝をそのまま延長すると、当調査区のすぐ南側に伸び、しかもSD003にはほぼ直角となっている。SD003からは中世遺物も出土しているが、わずか上層30cmのみの調査で、正確な時期は不明である。従って今後の検証をまたねばならないが、22次調査のSD20と当調査区のSD003がつながり、直角に折れ曲がる溝である可能性、さらに言えば当調査区の北東側の地区を開発する溝である可能性も出てきたと言えよう。今後の調査時に注意をしなければならない。

図 版



1) 第9次調査地近景（北西から）



2) 北側調査区全景（西から）



3) 調査区全景（西から）



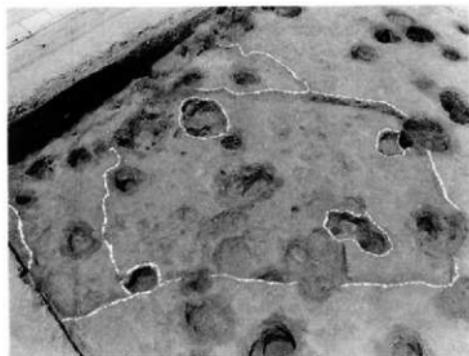
5) 南側調査区全景（西から）



4) 那珂八幡古墳遠景（本調査地から）



6) 南側調査区全景（東から）



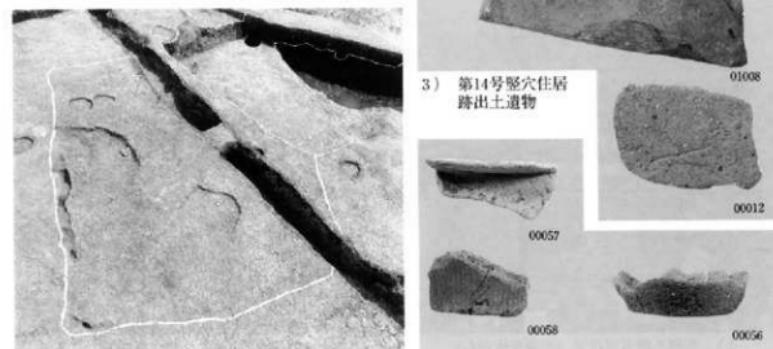
1) 第6号竖穴住居跡完掘状況



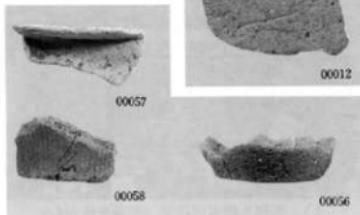
2) 第6号竖穴住居跡出土遺物



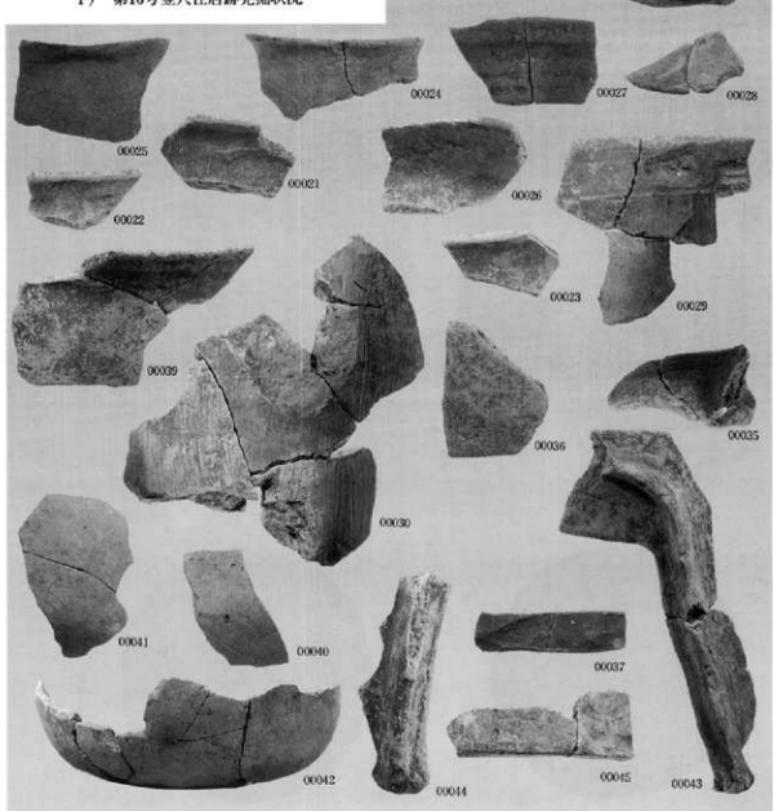
3) 第14号竖穴住居跡出土遺物



4) 第22号竖穴住居跡完掘状況

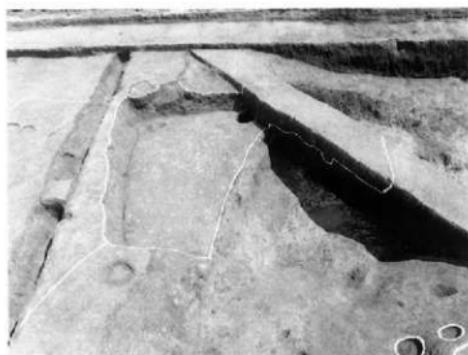


5) 第22号竖穴住居跡出土土器

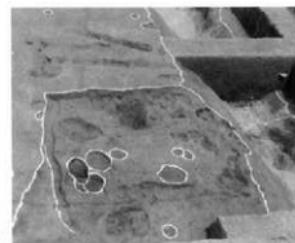


2) 第16号竖穴住居跡出土遺物

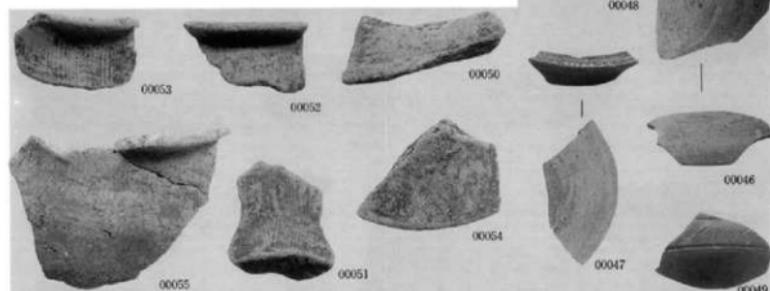
PL. 4



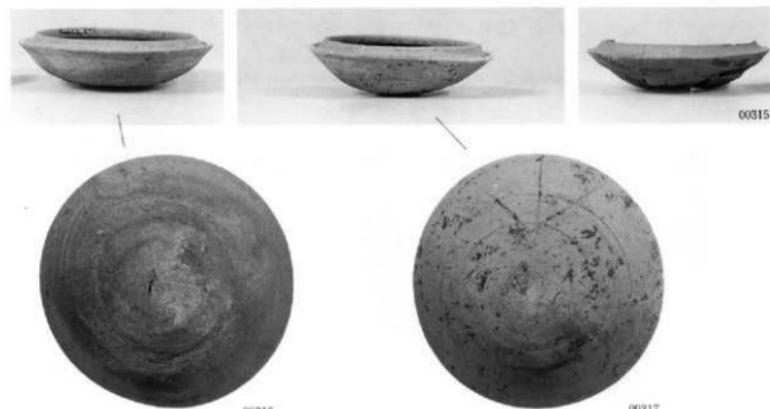
1) 第17号竪穴住居跡検出状況



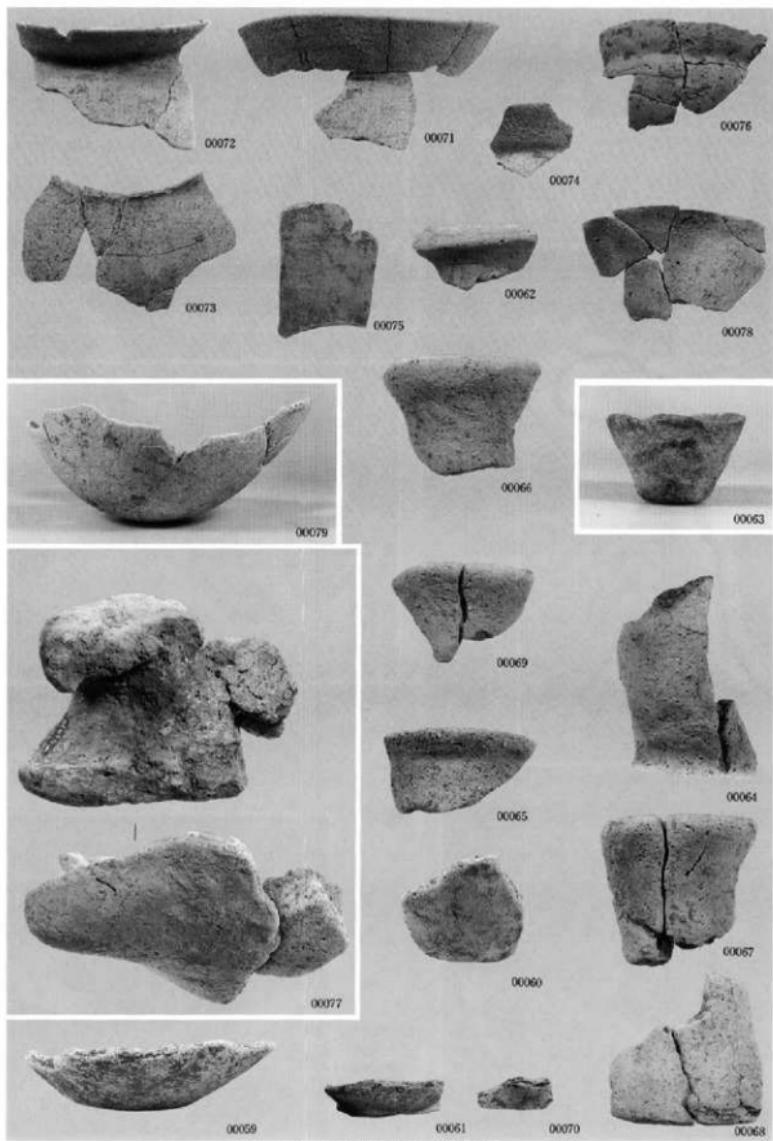
2) 第18号竪穴住居跡検出状況



3) 第18号竪穴住居跡出土遺物

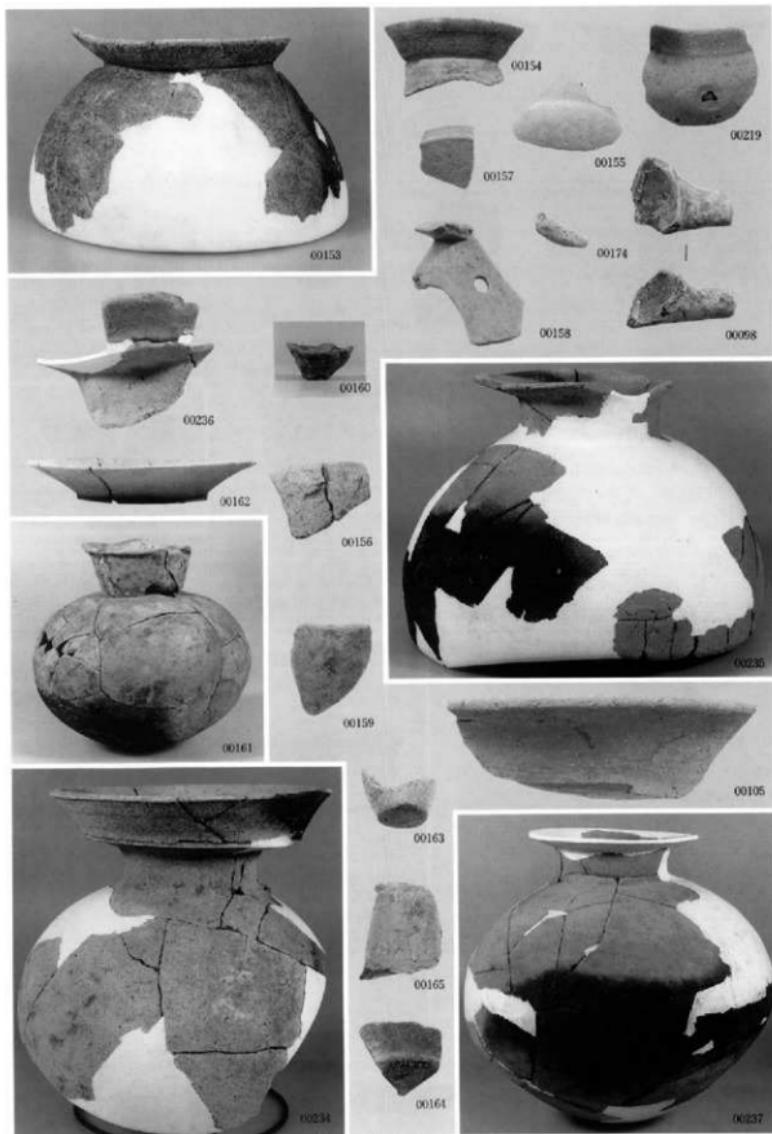


4) 第259号柱穴出土須恵器

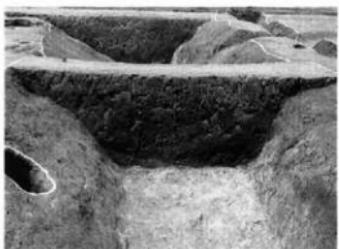


第1号方形周溝墓下層出土遺物

PL. 6



第4号方形周溝墓下層出土土器



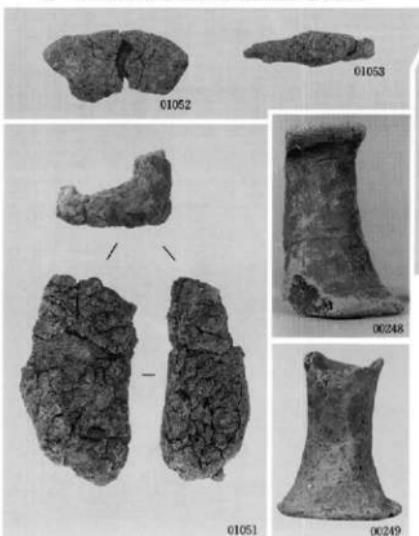
1) 第4号方形周溝墓土堆積狀況(a-a')



2) 第4号方形周溝墓土堆積狀況(b-b')



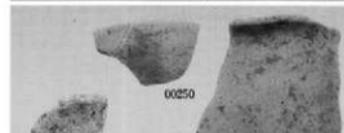
3) 第13号方形周溝墓土層堆積狀況(西から)



4) 第13号方形周溝墓下層出土遺物



00266



00250

00245

00247

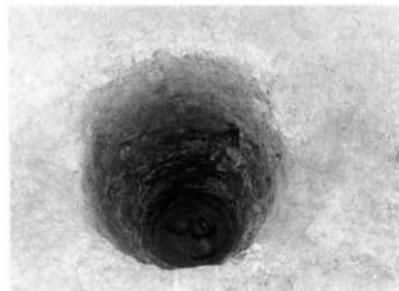


00241

00242



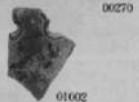
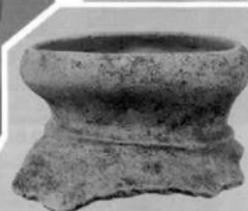
00265



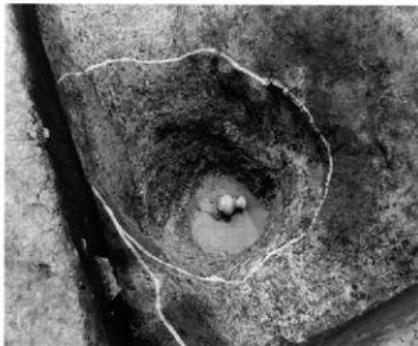
1) 第5号井戸検出状況



2) 第5号井戸遺物出土状況



3) 第5号井戸出土遺物



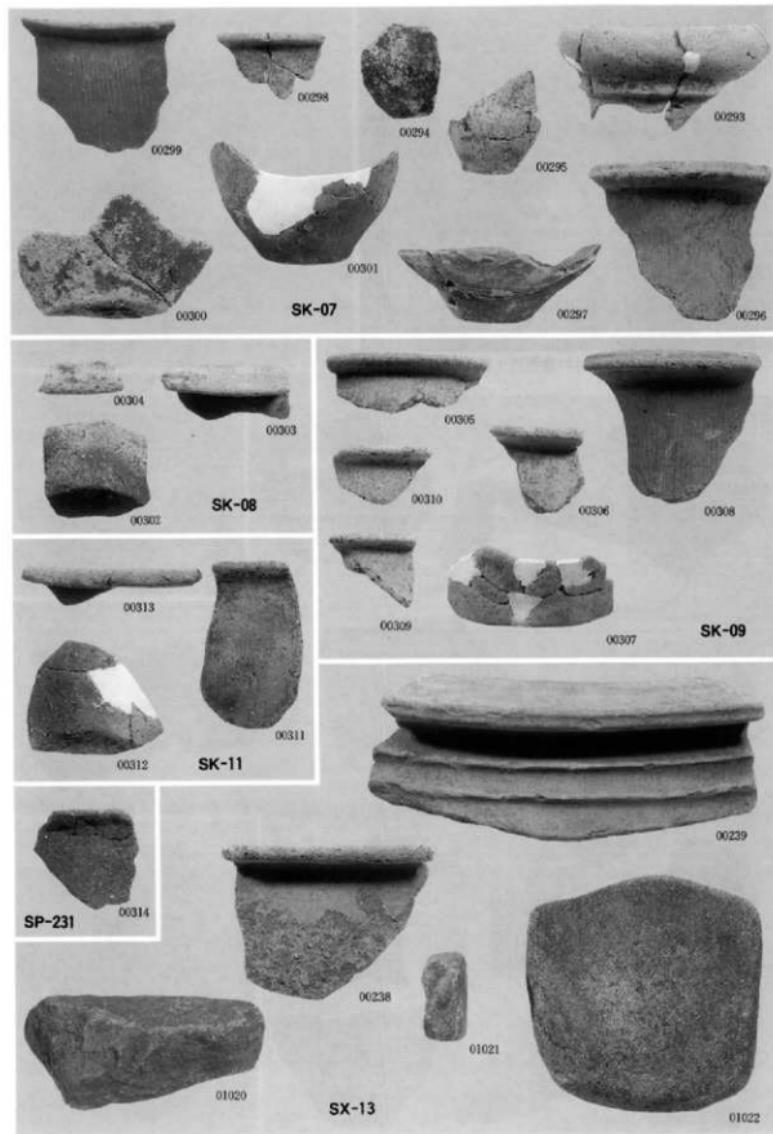
1) 第19号井戸遺物出土状況



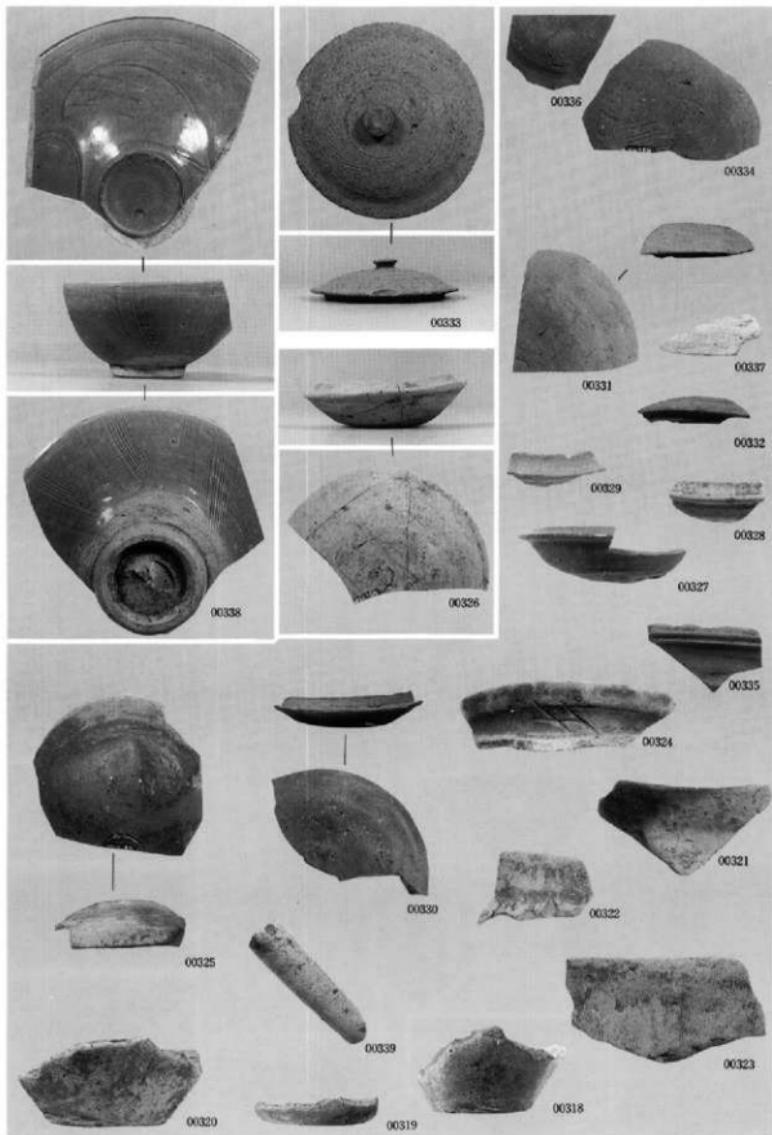
00279



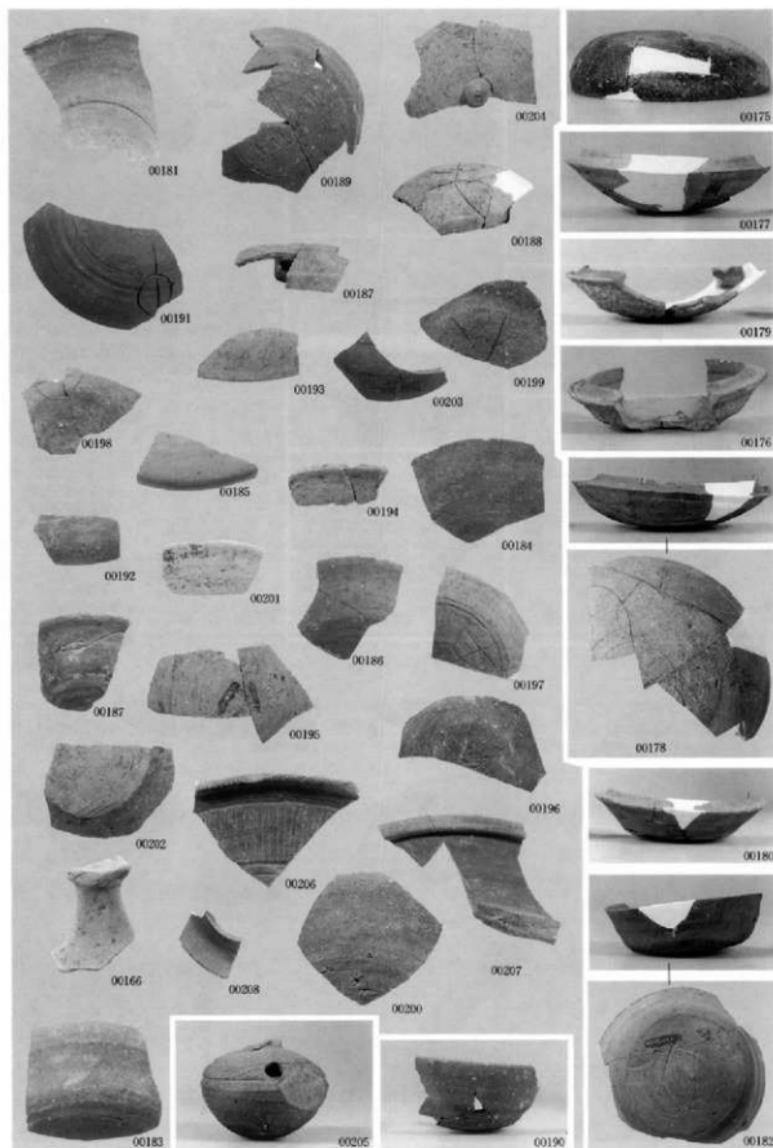
2) 第19号井戸出土遺物



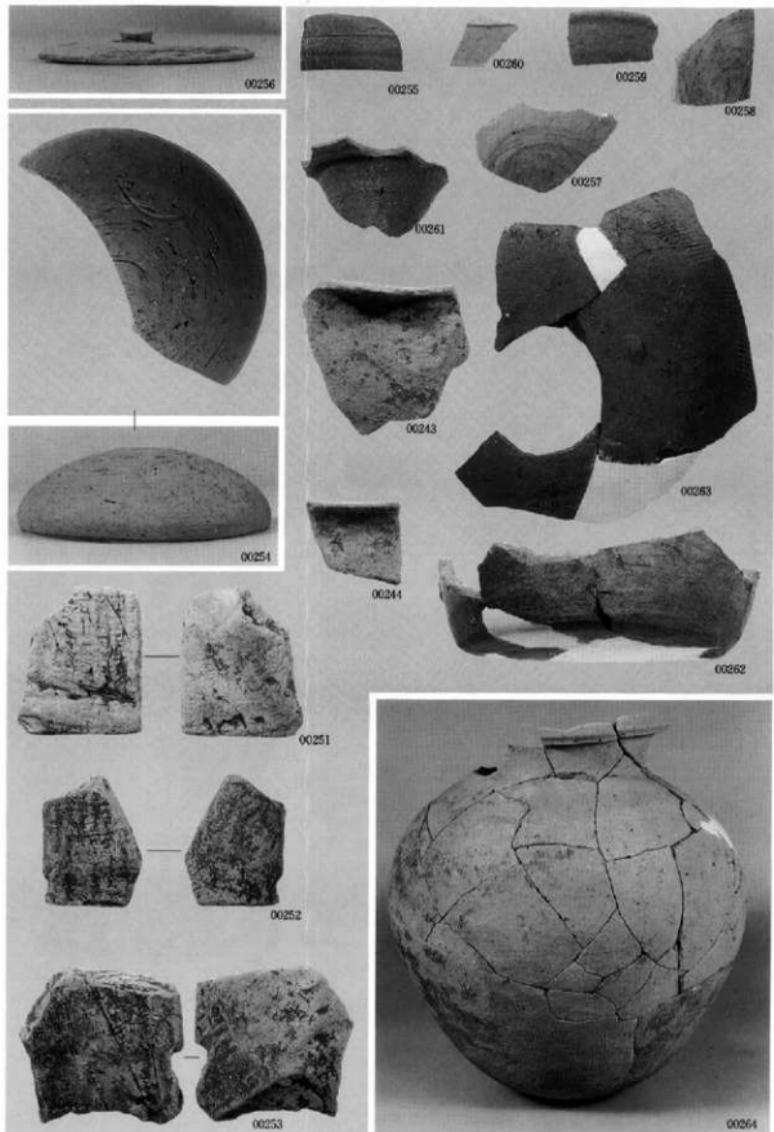
各遺構出土遺物



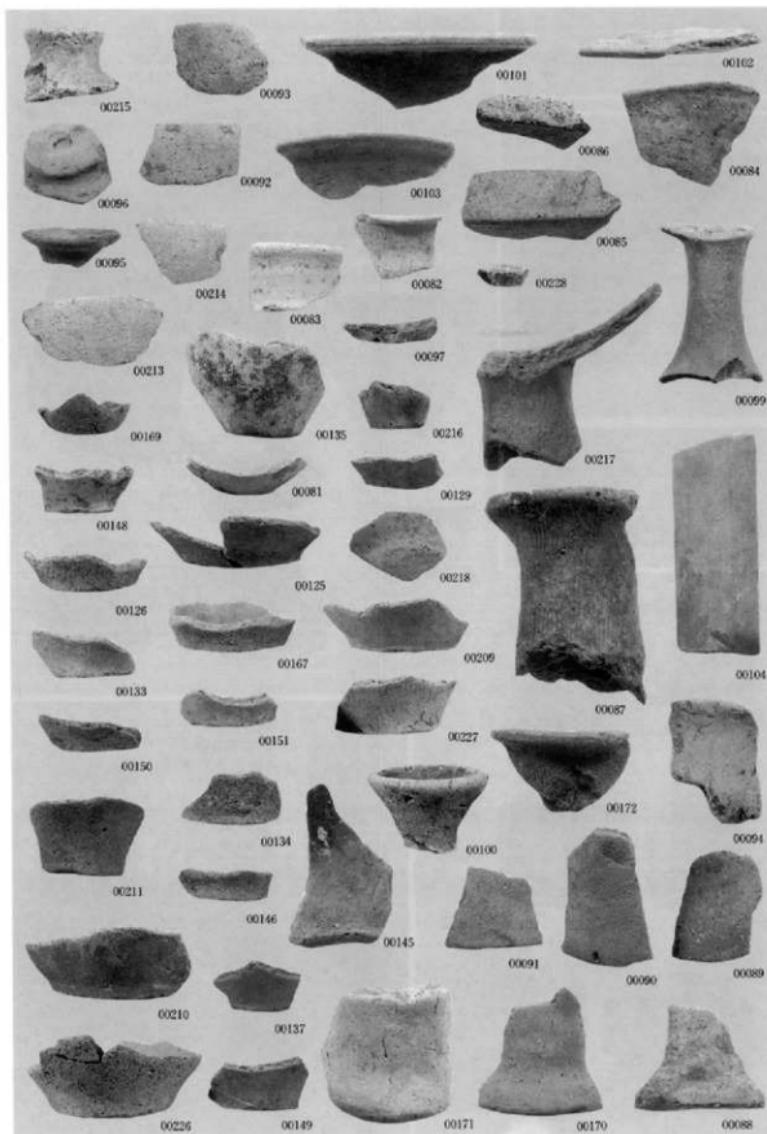
遺構検出時出土遺物



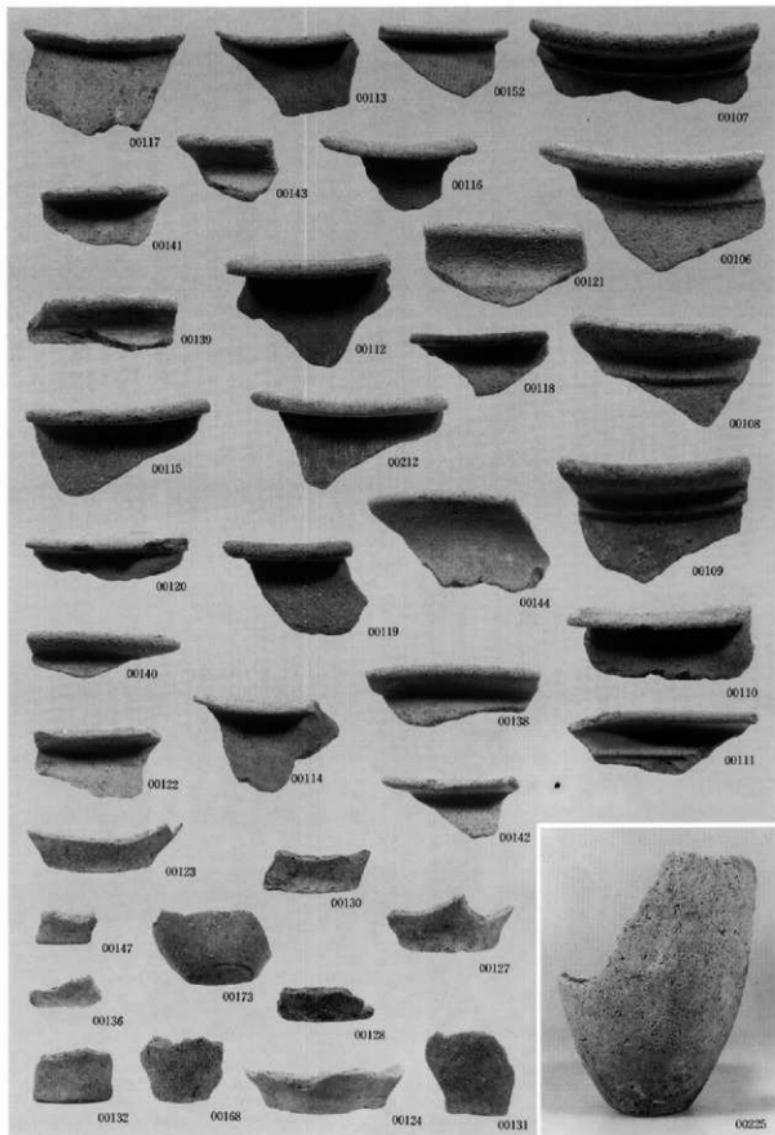
第4号方形周溝墓上層出土遺物



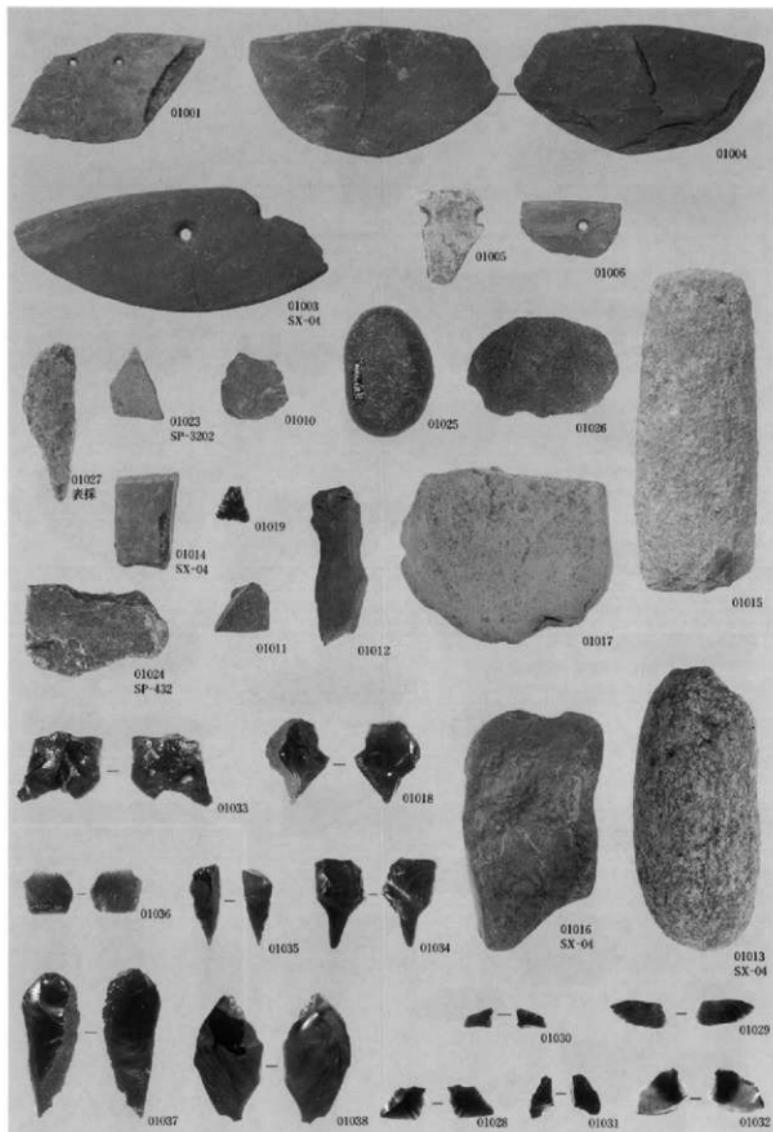
第13号方形周溝墓上層出土遺物



第4号方形周溝墓出土泥生土器(1)



第4号方形周溝墓出土弥生土器(2)



第9次調査出土石器



1) 第57次調査区全景（西から）



2) SC001 (南から)



3) SC002 (北から)



4) SC005 (南から)



5) SC005石製紡錘車出土状況



1) SD003 (南から)



2) SD004・006 (東から)



1



2



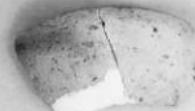
5



4



6



7



8

3) 出土遺物

那珂 23

— 那珂遺跡群第9・57次調査報告 —

1999年（平成11年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印刷 魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20